

元治元年(1864)

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

元治元年十月ノ二

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料」  
(紙数八四枚)の記載あり〕

目録

- 征討軍出發日割
- 長州討伐之諸隊出發日限布達
- 大久保一蔵ヨリ小松帯刀へ書翰
- 海陸軍奨励
- 地頭職年頭八朔等ノ次第
- 尾張大総督諸藩へ示達
- 外国米輸入

黒田嘉右衛門清瀨旧名小倉其他事情探訪報告

折田要蔵探訪報告

銃薬製造掛上申書

全上第二

救助方上申

全上第二

改正軍隊職制

海軍會計

四七一 征討軍出發日割

一惣物主

一大口 一組

高城郡

一高城 一組

一伊集院 一組

一阿多 一組

一國府 一組

一清水 一組

右十月二十九日出立

一惣督

- 一 一番組 一組
- 一 二番組 一組
- 一 三番組 一組
- 一 御軍役奉行
- 一 出水 一組
- 一 大砲打手人数
- 一 御軍役方
- 御家老座書役
  - 一 河野半藏
- 右来月朔日出
- 一 御家老
- 一 御側役
- 一 御家老座書役
- 一 御軍役方御家老座書役
  - 一 市來彦太郎
- 一 田布施 一組
- 一 末吉 一組
- 一 高山 一組
- 右同二日出立
- 一小荷駄奉行以下諸役者

- 一 御軍役 種子嶋城左衛門
- 一 青山并野村両門人
- 一 大崎 一組
- 一 帖佐 一組
- 一 志布志 一組
- 右同三日出立
- 一 四番組 一組
- 一 大砲要具等差引人五人
- 外ニ大砲要具等帖入
- 右此節於長崎御買入相成候蒸氣船ヨリト存候、
- 右同五日
- 右ハ出軍ニ付、先達テ五日限申渡置候へ共被相替、右ノ  
通出立被仰候条可申渡事、
- 出水
  - 野田(出水郡)
  - 高尾野(右同)
  - 羽月(伊佐郡)
  - 湯之尾(伊佐郡)
  - 山(大口市)
  - 野
  - 曾木(大口市)
  - 馬越(右同)
  - 本城(伊佐郡)
  - 高城郡(川内市)
  - 高城(川内市)
  - 大口
  - 隈之城(川内市)
- 水引(川内市)
- 串木野(川内市)
- 中郷(肝属郡)
- 高山

元治元年(1864)

(薩摩郡) 東郷  
 (薩摩郡) 鶴田  
 (右同) 山崎  
 薩摩郡  
 (右同) 山田  
 (薩摩郡) 樋脇  
 (百重郡) 伊集院  
 (百重郡) 市來  
 (百重郡) 鹿兒島郡  
 (同上) 吉田  
 (同上) 伊作  
 (同上) 阿多  
 (川邊郡) 川邊  
 川邊郡 加世田  
 山田  
 (川邊郡) 久志秋目  
 (右同) 坊泊  
 (宮崎県西諸郡) 野尻  
 (宮崎県東諸郡) 高岡  
 (宮崎県えびの市) 飯野  
 (宮崎県えびの市) 加久藤  
 (始良郡) 吉松  
 (曾於郡) 末吉  
 (始良郡) 福山

(曾於郡) 松山  
 (宮崎県北諸郡) 勝岡  
 (山之口九) 山口  
 諸縣郡  
 (宮崎県北諸郡) 高城  
 (同上) 高崎  
 (宮崎県西諸郡) 高原  
 (肝屬郡) 佐多  
 (曾於郡) 百引  
 (鹿屋市) 高隈  
 (曾於郡) 恒吉  
 (鹿屋市) 大始良  
 (曾於郡) 鹿屋  
 (垂水市) 牛根  
 (曾於郡) 囃吹郡  
 (始良郡) 横川  
 (右同) 栗野  
 (曾於郡) 始羅郡  
 (右同) 山田  
 (曾於郡) 財部  
 (曾於郡) 櫻島  
 (曾於郡) 小根占  
 (右同) 大根占  
 (曾於郡) 田代  
 (曾於郡) 敷根  
 (曾於郡) 敦根  
 (曾於郡) 高原  
 (曾於郡) 高崎  
 (曾於郡) 諸縣郡  
 (曾於郡) 山口  
 (曾於郡) 勝岡  
 (曾於郡) 松山  
 (曾於郡) 財部

—(同上)—

志布志 (曾於郡)

串良 (肝屬郡)

大崎 (右同)

高山 (右同)

内之浦 (肝屬郡)

蒲生 (給良郡)

始良

倉岡 (宮崎市)

帖佐 (給良郡)

馬關田 (恩)

諸方郡 (えびの市)

吉田

一二番組

一三番組

一御軍役奉行

一出水一隊 大砲打手

御軍役方御家老座書役河野半蔵

右来月朔日 出陣陸地

一御家老 御側役 御家老座書役市來彦太郎

一田布施一隊

一末吉一隊

一高山一隊 右同二日 出立陸地

一小荷駄奉行以下諸役者 御軍賦役種子島城左衛門

一青山弓太郎・野村與八左衛門并兩一人

一大崎一組

一帖佐一組

一志布志一組

右同三日 出立陸地

御城下

一四番組一組

一大砲要具等差引人五人

四七二 長州討伐之諸隊出發日限布達

一惣督

一一番組

元治元年(1864)

手 先

五百目二挺	組 一 山 高	物主
	副	鳥丸六左衛門
		築瀬善兵衛

備 左

五百目二挺	組 一 崎 大	物主
	副	益満与右衛門
		佐竹直之進

備 右

五百目二挺	組 一 口 大	物主
	副	山田
		伊地知宗助
		司

軍 中

組 一 院 集 伊	惣物主
談	島津隼人
養田源左衛門	

備 跡

二封度二挺	組 一 志 布 志	物主
	副	福崎助七
		仁禮新左衛門

兵 遊

五百目二挺	組 一 水 清	物主
	副	武宮十左衛門
		毛利喜平太

先 手

御城下六番組

物主

島津 登

談合役

伊藤源五左衛門

二封度六挺

ボト忽砲二挺

携白砲一挺

右 備

御城下二番組

物主

川上東馬

談合役

新納源左衛門

二十拇白砲一挺  
携白砲一挺

出水一組日置  
旗本  
半手附之

惣督

島津又六郎

御家老御側役  
附之

左 備

御城下一番組

物主

島津刑部

談合役

相良弥兵衛

二十拇白砲一挺  
携白砲一挺

遊 兵

御城下三番組

物主

島津小平太

談合役

橋口甚四郎

二十拇白砲二挺  
携白砲一挺

跡 備

御城下四番組

物主

仁禮舍人

談合役

平田半太郎

二十拇白砲一挺  
携白砲一挺

副 惣 督

島津主殿

元治元年(1864)

手 先

組一城高郡城高
池田次郎兵衛 副
長束十郎 物主

七百目二挺

備 左

組一施布田
中島助十郎 副
喜入雄次郎 物主

七百目二挺

備 右

組一吉末
相良甚之丞 副
川田掃部 物主

七百目二挺

軍 中

組一府國
松方正之進 副
川上左大夫 物主 <small>腕力</small>

五百目二挺

備 跡

組一多阿
有馬雄之介 副
柳半之丞 物主

七百目二挺

兵 遊

組一佐帖
千田傳一郎 副
染川五郎左衛門 物主

七百目二挺

大砲

山	高
手	先

三原傳左衛門

口	大
五百目二挺	山田
	右備
	司

崎	大
五百目二挺	益満與右衛門
	左備

分	國
中軍	川上左大夫

水	清
五百目二挺	武官十左衛門
	遊兵

志	布	志
二封度二挺	跡備	福崎助七

砲	大
組	六
手	御城下
	先
	島津

組	番	二
携白砲一挺	二十拇白砲一挺	仁禮舍人
		右備

組	番	一
携白砲一挺	二十拇白砲一挺	島津刑部

本	旗
---	---

組	番	三
携白砲一挺	二十拇一挺	島津織之助
		遊兵

組	番	四
携白砲一挺	二十拇白砲一挺	名越左源太
		跡備

城	高
手	先

大砲

郡長東十郎

吉	末
七百目二挺	川田掃部
	右備

施	布	田
七百目二挺	左備	喜入雄次郎

城	高
手	先

大砲

伊中軍

佐	帖
七百目二挺	伊集院
	喜左衛門
	遊兵

多	阿
七百目二挺	柳半之丞
	跡備

院	伊
総物主	中軍
	集島津隼人



外ニ大砲要具等積入

右此節於長崎御買入相成候蒸氣舟ヨリ被差越候、

右同五日出帆、

右ハ出軍ニ付、先達テ立日限申渡置候ヘトモ被召替、

右之通出立被仰付候条可被申渡候、

子十月廿九日表御用人通達、

但総テ十月廿九日、御对面所ニ御流頂戴被仰付候、

一 幹行丸

右御軍艦

一 豊瑞丸

右御注文蒸氣舟

右通御軍艦被仰出候条、此旨開成所掛・御船奉行へ

申渡、可承向々へ可申渡候、

十月

龍衛川上

四七三 大久保一蔵ヨリ小松帯刀へ書翰

安行丸并去ル八日立之飛脚より被成下候 尊翰、難有

拝見仕候、益御機嫌克被遊御精務、奉恐悦候、於御当

地

御両殿様益御機嫌克被為遊御座、御同慶奉存候、扱今

般愈征長相運候段、委曲奈良原より承知仕、迎も急ニ

相運候処無覺束奉存候処、誠ニ案外之次第ニて、無此

上御都合、先々大慶之事ニ奉歛察候、最早 御進発御

日限も近寄、種々混雜御配慮之筈と奉察候、於御当地

も則より人数御繰出之手配ニて、大抵ハ御究相成居候

得共、現事ニ臨候へは、色々混雜も有之事ニ御座候、

器械積蒸氣船小蝶丸未廻船不相成、追々催促いたし、

近々ニハ相廻ル賦候得共、現在廻船無之候てハ、安心

出来不申候、人数ハ被仰付置候外ニ、攝津及求馬・奈

良原・松方出軍被仰付候、此節出軍ニ就ては、多くハ

外藩よりも依頼いたし候訳、副將越公九州江下向相成

事候得は、全体御親も有之訳ニて、彼是御軍議も御相

談相成候ハ案中ニ候処、成程其地人数ヲ以、救応ハ有之

候得共、現事其内之処旁不容易場合ニて、被仰付置候

人数迄ニてハ、形勢事情吞込候人々も相少ク、万々一

御国恥相成候儀、実以不相済訳合ニて、何れ御家老・

御側役・御小納戸辺被仰付候方、可然と之

御趣意ニて、右通被仰付候、勿論

御出馬被為 在度、段々起り立候訳も有之、第一御家

老被召附候へハ三軍之人氣も居合、外聞実義可宜と奉

存候、攝州出軍被仰付候ては、御国之処御差支之訳ニ

ハ御座候得共、何分無致方御事ニて、兎角式部殿御は  
まり無之候ては相済ましく、彼是

御直ニ御下知被為下候得は随分可然奉存候、愈以御国  
之処御大切之御事、攝海異人廻船ニも相成候得は、詰  
り

御上京不被為在候て難相濟場も難凶、尚一涯練兵等行  
届不申候て不相成事候間、及限り精々振はまり候賦御  
座候、左様御納得可被下候、御帰国一条ハ可成以御都  
合早目之処奉祈候、

一兒玉莊助・吉利祐助句読師助ニて山ノ内教授よりも分  
て申出相成、此兩人迄ハ被差出候筋致吟味、江戸遊学  
被仰付候、尚亦宜鋪御差凶可被下候、委曲ハ先便ニも  
申上置候通ニ御座候、

右兩人今日被差立候付、御用答旁公私取交如此御座  
候、一々御答可奉申上筈候処、今日は別て取込其義  
不相叶、尤兩人は早着も難凶候故、大略奉申上候、  
以上、

帯刀様

大久保一藏

侍史

追々来月朔日蒸気船出帆ニて、一組（福間忠）あし屋迄差送、

一組ハ朔日・二日・三日陸地被差立、一組ハ阿久根

江待受、朔日出帆之蒸気船帰着之上、差送り候賦ニ  
御座候、軍勢三組ニて三度ニ被差立候、御陣所もあ  
し屋之方ニ決申候、

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

#### 四七四 海陸軍奨励

一窮士御差分高ノ儀、海陸軍所詰台場見締人等願出候上、  
夫々順番ヲ以、窮士ノ面々へ被仰付、扶持米被成下事  
候処、此比海陸軍所詰願出者相少候、就テハ兵隊ノ儀  
ハ申迄モ無之、当時急務ノ事候間、困窮ノ者タリトモ、  
壮年ノ者ハ海陸軍所詰願出候様可有之候、此旨支配中  
へ不洩様早々可申渡候、

一陸軍兵士ノ儀、十八歳以上入隊被仰付、右年輩ノ以下  
ノ者、自分稽古ニテ陸軍所へ致出席候テモ、入隊不被  
仰付、殊ニ御扶持米ヲモ不被成下候旨、先達テ申渡置  
候得共、右書面全趣意違ニ付、申渡無之筋可被相心得  
候、此旨支配中へ不洩様、写ヲ以早々申渡、本文明後  
返納可有之候、以上、

大番頭方組方印

四七五 地頭職年頭八朔等ノ次第

十月

一 今般地頭之制被相替、諸郷々へ居地頭被仰付候、御祝儀伺 御機嫌之外、以来左之通被仰付候、

一 年頭御祝儀之儀ハ、居地頭之面々御当地ニ罷越、御祝儀被申上候様被仰付候テ、於所難遣訳合有之候歟、又ハ病氣ニテ自然難罷越候節ハ、進上物迄納置、追テ罷越候上御祝儀被申上候様被仰付候、

一 八朔之御祝儀、居地頭之面々御用人迄、書状ヲ以御祝儀被申上、進上物之儀ハ、有来通被差上候様被 仰付候、左候テ大目付格以上ニテ、居地頭之面々ハ御家老迄同断書状ヲ以、御祝儀被申上候様被仰付候、

右ハ年頭八朔御祝儀ノ儀、指宿并小根<sup>(肝属部)</sup>占居地頭其外へ被仰渡置候趣有之候ニ付、以来右之通被仰付候、

一 五節句御祝儀ハ、御当地へ参合候節ハ、是迄之通被仰付候旨、被仰渡置候通ニテ、不参合節ハ別段御祝儀被申上ニ不及旨被仰付候、

一 臨時御祝儀伺御機嫌之儀、御当地へ参合候節ハ是迄之

通、不参合節ハ追テ伺之上罷越、御祝儀等申上候様被

仰渡候、甌島・長嶋移地頭、并諸所地頭之儀モ、御

發駕 御下国并 御官位御昇進等、其外御吉凶事等之節ハ、不差支時節罷越、御精進日間御祝儀等被申上候様、其時々申渡来候得共、以来ハ右式御吉凶事之節ハ、

御用人迄書状ヲ以、御祝儀伺御機嫌申上候様被仰付候、左候テ御当地へ参合居候節ハ、是迄之通登 城御祝儀被申上候様被仰付候、居地頭・談合役并抑之儀ハ、於

仮屋居地頭へ相付、御祝儀伺御機嫌之上、一張ヲ以居地頭ヨリ御用人へ向差上候様被仰付、御当地へ参合ノ

節ハ、有来通公用達候儀モ、抑同様申上候様被仰付候、尤右式御祝儀之節ハ、其時々猶又可申渡候、

但大目付格以上居地頭向々ハ、御家老向御祝儀伺御機嫌被申上候様被仰付候、

一 何ソニ付、御当地へ差越候節ハ、時々伺之上差越候様被仰渡置候付、其通可有之候、

一 諸郷之儀ニ付、於御当地御格申渡等ノ節、於敷舞台地頭申渡相成候仕来候ニ付、此節一統居地頭へ被仰付候

付テハ、申渡振之儀、以来兼テ名代相頼置、右へ申渡相成候儀ハ、是迄之通移地頭之振合通被仰付候、

一 御筆拜見等之節モ右同断、居地頭名代、抑廻、郷士年寄組頭之間召呼、御筆処才領ニテ、居地頭へ差遣、拜見於所申渡方相成候様被仰付候、左候テ依時宜現ニ御直達等不相成候テ不叶節ハ、居地頭被召呼候儀ハ、此節ハ時宜次第被仰付候、

一 御当地へ銘々地頭取次頼置、御殿向書付差出方等致弁別、於所ハ<sup>(マ)</sup>年寄ヲ以申渡事ニ取計候様被仰付候、用達被召付候向々ハ、依時宜用達ヨリ申渡事等相成候儀モ可有之候、

一 是迄用達並地頭取次之儀、依所<sup>虫</sup>扶持米又ハ筆紙墨代等、所ヨリ遣来<sup>虫</sup>申候へトモ、以来用達取次へ扶持米式石ツ、所並兼郷ヨリ割并ニテ遣候様被仰付候、左候テ筆紙墨代又ハ何ソニ付、所産物等遣候儀一切差留候、

一 年頭ニ付、諸郷年寄・組頭御祝儀之筋、御当地へ罷越、御目見被仰付先例ニ付、弥以其通被仰付候、

一 御発駕並御下国御官位御昇進其外御達事之節、郷士年寄・与頭志人ツ、差越、御精進日限御帳ニ相付、御祝儀同御機嫌申上候先例候へ共、已来右式御祝儀同御機嫌之儀ハ、於所居地頭へ相付申上、一帳ニテ居地頭ヨ

リ御用人へ向差上候様被仰付候、尤其時々尚又可申渡候、

一 八朔並歳暮ニ付、諸郷右年寄・与頭御当地へ罷越、登城於驚之間御帳ニ相付、御祝儀申上候へ共、以来前条同段、惣テ居地頭ヨリ御用人へ向差上候様被仰付候、一 居地頭之儀家内召列差越候儀ハ、是迄之移地頭等之振合通勝手次第不苦候、

右通被仰付候条可承向々へ可申渡候、

子十月

攝津

#### 四七六 尾張大総督諸藩へ示達

御意振

不肖ノ此方過分之大任ヲ蒙、実ニ心配ヲ致ス、此上ハ諸藩ノ力ヲ頼ムヨリ外無之候、此度ノ儀ハ

公武ノ命素ヨリノ事、訳テ粉骨ヲ被致ヨ、此方ヲエテ年来ノ

御報恩爰ニ尽ス間、諸藩へ此段約シ置<sup>十月十九日御目付介御使番曲御之助大坂御宿禰へ持参ノ</sup>

御軍令

条々

- 一 今度毛利大膳為征伐進発ニ付、旗下並諸軍勢万事相慎、不作法ノ儀無之様、下々ニ至迄入念可申付事、
- 一 喧嘩口論堅令停止之、若違背ノ輩有之ヲヘテハ、理非ヲ論セス双方成敗スヘシ、或ハ親類・縁者ノ因ヲ存シ、或ハ傍輩知音ノ好ニヨリ、荷担之族是アルニ於テハ、其科本人ヨリ重カルベキノ旨、急度はヲ申付ヘク、自然用捨セシムルニ於テハ、後日相聞ユルトイヘトモ、其主人重科タルヘキ事、
- 一 軍中相討堅禁制タルヘシ、若止事ヲ得ス相討スル時ハ、慥ナル証人ヲ立可申候事、
- 一 先手ヲ差越、假令高名セシムルトイヘトモ、軍法ニ背ク上ハ重科ニ処スベキ事、
- 一 但先手ヘ相断スシテ物見ニ出ヘカラザル事、
- 一 子細ナクシテ他ノ備ヘ相交ル輩於有之ハ、武器・馬具トモニ是ヲトルベシ、若其主人異議ニ及ハ、可為曲事、
- 一 人数押ノ時不可脇道ノ旨堅可申付、若猥通輩ハ曲事タルベキ事、
- 一 地形又ハ敵ノ機ニ応シ、時宜ノ指揮可有之候間、此旨兼テ可心得事、

- 一 降人生捕候ハ、猥不可殺害事、
  - 一 諸事奉行人ノ申旨不可違背事、
  - 一 時々使トシテ如何様ノ者差遣ストイヘトモ、不可違背事、
  - 一 持鎗・持筒ハ可為軍役ノ外、長柄差置キ持スヘカサル事、
  - 一 但長柄ノ外モタスルニオヘテハ、主人馬廻リ袴本タルベキ事、
  - 一 陣中ニオヘテ馬ヲ取放スベカラザル事、
  - 一 田畑作毛ヲ刈取、或ハ竹木切取ル事堅令停止、附押買狼藉スヘカラス、若違背ノ族有之ヲヘテハ可為曲事、
  - 一 小荷駄押ハ、右之方ニ附可相通、軍勢ニ交ラサル様兼テヨリ堅可申付事、
  - 一 船渡ノ儀、他ノ備ニ相交ラス一手越タルベキ事、
  - 一 下知ナクシテ陣払並人返ノ儀一切停止ノ事、
  - 一 右条々堅ク可守、此旨此外載下知状候也、
- 元治元年十月  
御墨印  
下知状

四七七 外国米輸入

当年諸国作方不宜哉ノ趣ニ相聞、米価殊脱乙外高直相成、下々難儀可致ニ付、公儀ニ於テモ外国米御買入相成候筈候得共、潤沢ノ為外国米買入、売捌不苦候間、外国商人共ヨリ勝手次第買入候様可触知候、

十月

右ノ通江戸表ヨリ申来候間、可被得貴意候、以上、

四七八 黒田嘉右衛門清綱 小倉其他事情探訪報告

四七八ノ一 一幕府御使番三名、小倉藩士同伴ニテ去月七日江戸発足、

然処、藤枝藤枝江滞在相成、小倉藩士ニは順々通行可罷帰旨被相達、三使ニは同十八日比京着、夫より下坂于今滞坂之由、何故ニ候哉、子細不相分旨小倉藩士上條八兵衛より承得候、

一小倉領内参軍之地利は、大里・田之浦・門司之辺、第一關路關路江接近、即時ニ長府を攻敗候便利可宜見受、右場所御借用いたし度趣申込候処、右は彼方人数繰出し、且熊本勢も繰込之筈故、一緒ニては何欵混雜可致候間、小倉より西手之方半道計を隔て、平松と申所を

薩軍参集之御場所ニ配当可仕旨、返詞ニ御座候、尤平松も海辺ニテ、關路關路トハ馬を去事僅ニ壱里余、港口關ヲ云フに至て宜く、渡揖之橋船も眼下ニ繫置、御用途可相勤ト之趣ニ付、委細は折田要蔵江追て地図等取調罷帰候様示談仕置候、

一右ニ付關路江渡海之橋船及相談候処、是以彼方用船之内より獵船式百艘差分、御用途可為相勤ト之返詞ニ御座候、

一長州地江可攻掛之場所は、右次第關口之方便利可宜候得共、各藩皆同一所ニ攻屯候ては、必混雜を可生儀案中御座候付、幸平松之前面ニ当り候長州領引島トモハ彦馬と申所を手初ニ乗取、右を宿陣足溜り之場ニいたし候ても可宜、左候得は其地江獵船数多有之由候付、右を橋船ニ召仕、即關路江押渡、關之山を越して安岡と申所江出、夫より萩城を衝候へハ、萩之腹背ニ当り候由御座候、乍然攻口之儀は、敵之不意ニ出て、其無備を撃ニ勝算可有之候付、猶又彼表之地利を誦し候功者之者江、吟味被仰付度奉存候、

一右引島は元来一万石之福地ニテ、港口も福良と申て、蒸氣船をも可繫良港御座候由、近来長州より彦島と唱

相替、農兵共少々取仕立置候由、右島ニ薩摩之宮と申社有之、古来島中之惣廟ニ相崇、往昔薩摩之貴人を祭來候段申伝居、因て臆説を以断を加候へハ、引島は蓋し比企島にて、比企判官能員之由縁之地にて候半欵、左候得ハ比企家は御元祖様江格別成御由緒有之、畢竟右等之処より相伝り候宮社ニ可有之哉、但しは又

勝久公豊後沖浜ニ於て御逝去と承伝居候付、其刃之御故跡にて候半欵、更ニ確証無之儀は、絶て附会之説

も難附御座候得共、何分此節柄奇遇之事ニ奉存候此島ハノ内ニアリ、故ニ斯ク唱フル乎、薩摩ノ因由ハ、詳ナラス、蓋シ黒田カ考フル処モ又理アルニ似タリ

一 賊徒之巢窟を覆し候へハ、右体一小島は力を不勞て掌握ニ可入候付、強チニ初より可望ニもあらず、素より

於毛利家も、元就嚴島勝利之先蹤も可存候付、此儀は臨其期必機變候一策ニ備置度而已之事ニ奉存候、

一 稻葉閣老(正形) 淀城并軍目付九州渡海程合未相分由、此後万

一 不時出張相成候ハ、此節私共江被仰含候趣を以、程能可申取旨土持平八江委細申合置候、

一 糧米之儀は於小倉相談ニ及候処、差当り三千石は即御用途可差立と之返答ニ御座候、尤老式万石は、熟談之向

ニ依り調達相調模様ニ御座候、尤当春既ニ糧米之儀付

ては、被及御相談、表向御引結迄も相済候上、俄ニ御破談ニ相成、於小倉も別て迷惑ニ及居候由ニ付、此節之相談は如何可有之哉、土持平八初頻ニ懸念ニ存居候処、於彼方当路之上條八兵衛と申者江事情詳ニ及談判、右次第無口能内談も相済候、右は専ら上條周旋之力ニ御座候、依之仮令小倉体小藩迎も、其ニ対し約定信義は不失様之御処置有御座度乍恐奉存候、

一 長州使者之儀及探索候処、先月八日兄玉若狭・木梨彦右衛門と申両使、筑後松崎駅江參、久留米柳川夫より

肥後・薩摩江差越候含之由申出、即久留米候より近臣松崎清藏と申者を被遣、態と松崎駅閑吏之筋にて出迎

及談判、遂ニ其所より追返し候由、其次第は右清藏より直談詳ニ承得候、

一 下之關瀬戸内蒸氣船通行、当分ハ差支無之模様、既ニ当月十四日幕之蒸氣船鉛七万斤を積、長崎より小倉江廻着、右引島之前江碇船いたし居候を現在見届申候、

一 長州之挙動当分吉川之建議にて至極恐懼謹慎相加居候由之評判、又或は籠城防戦之用意頻也と之巷説も有之、

虚実分明不窺得候、大膳殿ニは当月三日萩江引取、世子

長門長門は少々不快之由にて、猶山口江居残り之由、此儀は

相違無之之由御座候、尤岩國にては一向旅人を不禁、他藩より参候者江ハ改服にて出迎候程之会積ニ候由、

一下之關開港は弥相違無之、先度及戰爭候異舶、引取後或は来り、或ハ去、始終致出沒、頻ニ致交易此時ハ下シ難シ、次之品購求スル、既ニ長州より牛式疋迄も差送候由、尤ノミト云テ可ナリ自由ニ上陸徘徊、稻荷町売女店江も追々登楼之由相問得候、

一熊本藩親睦を結候儀は、於彼藩も有志之面々大ニ望所ニて、至て力を得候勢ヒニ被伺候、全体八代領主長岡佐渡を初、俗吏輩頻ニ近來俗論を發し、薩州と之親睦を致嫌疑候者共も為有之由ニて、良之助公子、別て之御尽力を以、国老松野巨・大木織部・藪圖書、大目附朽木太仲、用人堀部助左衛門、番頭津田平助、奉行藤本常記、其他京都留守居并物頭等數十輩之奸吏を近日尽御貶斥相成、国議致一新候由、於彼藩窃ニ承得候、

一久留米柳川も同断、大ニ御当藩御当藩トハ、本藩ヲ云フ江依頼之向ニ相見得、就中久留米は近來国論一定、士氣も稍致奮起居候筋ニ被窺候、

一薪之儀小倉藩江内談申入候処、差当り三千人余之軍勢、御入用丈ハ無滞御用度可相立、委細御受合ニ候趣、上

條八兵衛より返詞承届候、尤御人数増候節は、及其期如何様共尽力之致し様も可有之候付、薪之儀は聊御懸念ニ不及と之趣ニ御座候、

一味嘈之儀も前条同断、且村上銀右衛門よりも味噌并炭之儀は心当有之由申出候付、其筋内々手配いたし置候様申含置候、

一塩之儀は土持平八先達てより内々手当いたし、既ニ筑前蘆屋江過分囲置候由ニ御座候間、是以及其期候ハ、速ニ積廻シ之手数ニ被及候様可有之旨示談仕置候、

一蠟燭并油之儀は、小倉表払底之品ニ候由ニ付、此分ハ持越之御手数ニ被及度奉存候、

一肥前閉叟公此節之御上京は、各藩頻ニ疑惑を生し居候、尤眞贋は發揮と不相分候得共、前広別紙通之御国触書も致流布居候付、猶更疑念を懸居候、且又於小倉は、既ニ先達て陣中用之粮米并薪等差廻シ相成居候を、近日尽皆入札払ニ被差出之由申触候、然時は弥出勢之模様は無之哉ニ疑敷相見得候、

一先般繰出し居候久留米人数も、当分一先引取、別紙御願書御差図之上、猶又不日ニ出軍之心組と被相窺候、

熊本藩小倉援兵人数は、依然として如故滞陣永屯之姿



相見得、近日小倉之川江水車を仕掛、余多米白け方相初め申候、一日ニ七拾石位白け出来候賦ニ御座候由、一惣督尾州公御請相成、当月七日・八日比御下坂ニて、征長之諸侯近国は御当人、遠国は国老を大坂江当廿日限ニ被召集、御軍議有之、左候て期限等御発し相成筈之由、熊本藩当月初旬立之飛脚去ル十三日到着、右之旨申来候由、於熊本彼藩軍備手当方役人、大岩又左衛門と申者より承得候、

一右ニ付各藩出軍之旗・馬驗之図形并物頭以上之姓名、且戦兵・陪卒惣計人数書出シ候様、御達し相成候由、

一於熊本は右期限御達し次第、越中守順慶様良之助美談公子并末藩宇土侯細川豊前守行真、宇土郡宇土三万石を卒ひ、小倉江御出軍之筈

ニ候由、尤小倉ニては御間柄之事ニて、小倉城江御入城、御本陣を被据筈之御手当ニ候由、右大岩又左衛門より承得候、人数之惣計相尋候処、陪卒相加凡一万人之賦ニ候由相答候、

一各藩諸侯銘々自身之御出陣有之候付ては、乍恐

太守様ニも其儀ニ可被爲至哉、然時は小倉平松之御陣細川慶賢營は不可然、子細は右通熊本侯小倉城ニ入て、本陣を固め指揮被致候時は、小倉在營之諸軍は皆共其麾下ニ

属し候風采、即熊本九州惣督之勢ひニ可相成、依之

此御方様御本陣を被召居、可然場所得と勘考ニ及候処、何れ豊前之英彦山、筑後之高良山両所之外、右を庄倒可致程之良地は有之間敷と愚案仕候、右両山之間ニ堂々と御本陣を被居候欤、不然は近く肥後之水俣・日州細嶋辺江 御本陣被召居、途々 御指揮被遊候ても可然哉、乍然右両所は、御国許近く之便利宜キ迄ニて、別段御本陣共可相成良地とハ不奉存候、乍去

薩公既ニ三軍を御帥ひ、境外江御出張と申日ニ相成候へハ、四方必響之如くニ応し、敢て因循反側仕者も有御座間敷、誠ニ官軍之声援を益事、是より大なるハ無御座哉と乍恐奉存候、

一此節御城下并諸郷人数練出シハ、日州細島路より蒸気船(豊)ニて、肥後佐賀之關一泊ニて、豊前江着帆仕候様被仰付可然哉、尤右制之通来ル何日日州細島会軍と被仰渡、各其郷之地頭人数を引列、最寄々々之便路より致会軍候様有御座度、左候ハ、態々遠郷之者共御城下江不及被召呼、即其郷より直様会軍場所江差越候付、至極輕便ニ御座候、尤行軍は必五六里を限り、縦来着直様変事到来候ても、即其用ニ立候様疲勞不被爲致儀

肝要と奉存候、天正之昔豊太閣小田原征伐之行軍は、  
僅日二三五里ツ、之由承伝罷在候、

一 小倉表会軍之上、攻入之期限御達し相成候節は、各藩  
一同之事故、第一渡揖之橋船手支ニ可及儀案中御座候  
付、御国元より鯉船御見合を以及其期候ハ、御差廻  
し之御都合有御座度儀と奉存候、

一 征長相初り候は、決て異船共彼海辺江出沒いたし候儀、  
是亦案中之儀ニ可有御座、乍然長州江助勢は逆もいた  
す間敷、然共近日、長州より頻ニ依頼之向も有之由、  
左候得は戦央ニ及て和議取結之中人と可相成、夷人之

腹欵モ難計、且攝海迫切之状態等、旁右等之事情於長  
崎親切ニ探索仕候様、御人撰を以此涯探索人御差出し  
被置度儀ニ奉存候、熊本ニおひては庄村助右衛門庄村、  
彼藩儀  
井覚フモノナリ、西、  
洋砲術主張ノ名アリ、  
杯申者共、始終長崎江被差出、夷情深

密ニ探索之由ニ相聞得申候、実ニ夷船之動靜は、皇  
国之安危ニ致關係候事ゆへ、夷情探索之一儀は、方今  
不可闕之要務と奉存候、

一 泉州境津江此涯速ニ御本亭被召立置度、子細は万一夷  
船攝海江乗込候節は、兵庫海口は決て相塞り可申、然  
時は紀州とまり島沖を乗抜、泉州境江着帆いたす之外

更ニ京師江之通路ハ有之間敷、勿論兵庫御本亭は、治  
世以來

御代々様御參勤御通行之場所故、連々只今通御手厚被  
成下候筋相見得候得共、自今以後は兵庫之方よりも、  
必境津江御手を被為附度御儀ニ奉存候、既ニ

御先若様關ヶ原御退陣之節も、此所より御乗船御帰国  
之由ニ承伝罷在候、

一方今肥後熊本を初其他各藩皆共、一切旅人江間道通行  
を不許、是迄差通來候処迄も本道外ハ尽通融禁止相成  
居候、然は御当国出水米之津通行之旅人は、全麓江不  
相響、何国・何人軟通行も一向郷役共ニも不存位之事  
候半、左候ては適境目郷之詮も無之事候付、船路より  
米之津着岸之者迎も、旅人ハ皆麓町江差通し、本道通  
行為致、左候て時々何国何某通行且止宿之形行、地頭  
并所役共江首尾申出候様御制度被相立、米之津間道ハ  
一切旅人通行御差留相成候ハ、第一御取締之為ニ可  
宜奉存候、右体旅人通路相定り居候へハ、別段旅人入  
込を不及禁、公然と生国・姓名相名乗來候者ハ、無異  
儀本道を差通し候様有御座度奉存候、

右は此節周旋探索之形行、且存付候愚意相加此段申

上候、以上、

子十月

黒田嘉右衛門綱清

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

黒田ハ当時軍賦役ノ職ニアリ、因テ長州討征出軍ノ前頃、地理人情探訪ノ為メ、小倉其他ニ派遣シ、見聞スル処アリ、而シテ出軍ヲ待テ滞在シタリ、鹿児島ニ於テハ、此等ノ報告ヲ得テ進軍セント予メ準備シタリ、

四七八ノ二

長藩軍賦ノ概略黒田嘉右衛門探訪報告十月初定ル処ナリト云フ、左ノ如シ

禄高五百

鉄砲老挺

鎗老本 棒老本

同千石

鉄砲式挺

弓老張 鎗五本

乗馬老疋

同式千石

鉄砲三挺

弓式張 鎗拾本

乗馬三疋

同三千石

鉄砲五挺

弓四張 鎗拾六本

昇老本

乗馬五匹

長州安部郡須佐(阿武)

禄老万三千石

益田右衛門介(親施)

家来凡千三百八拾人

同国同郡宇多

禄三千五百拾石

榎本石見(実作元賢九)

家来凡五拾人

同国同郡宇生賀

禄四千石

根来主馬(熊江)

家来凡七拾五人

同国見瀨郡三隅(宋港)

禄式千三百石

繁澤石見(マコ)

家来凡三拾人

同国大津郡阿川

禄老万千石

毛利伊勢(親彦)

家来凡八百人余

同国人丸峠

禄三拾石

乃美織江(信)

家来凡式拾人

同国青野(熊毛三兵)

禄千五百石

穴戸備前(親甚)

家来凡式拾人

同国末吉(清水)

祿壹万石余

家来凡三百八拾人

防州厚狭

祿壹万千石余

家来凡四百人

同国宇部

祿壹万三千石余

家来凡五百人

同国吉敷

祿凡壹万石余

家来凡百五拾人余

同国右田

祿凡壹万八千石余

同国上ノ關在番

祿壹万四千石余

家来凡四百人

同国三田尻頭役

祿二千五百石

全千五百石

毛利讚岐(元純 清末藩主)

両家合テ家来五百人余

此家来ハ総テ船方ノ職ニテ、右両人船頭又ハ名頭トモ相唱候、

毛利能登(元美)

同国上ノ關在番

祿四千五百石

浦

(元美) 靱負

福原近江(元備)

同国高森在番三丘

祿壹万千石

穴戸

(親基) 美濃

毛利主計(出雲 元潔 元力)

同国岩國

祿六万石余

吉川

(經幹、岩國藩主) 監物

毛利筑前(元統)

同国徳山

祿四万拾石

毛利淡

(徳山藩主) 路広

毛利隱岐(顯朝)

長州豊浦郡府中

祿五万石

毛利左

(長府藩主) 京周

家来凡千八百人余

村上(武安 元)

同国清末

祿壹万石

毛利讚岐

(純)

村上出羽(徳馬 元力)

元治元年(1864)

長州吉敷	長州吉敷		
禄壹万三千石余	宍戶孫四郎 <small>(親基)</small>	千八百石	佐伯丹下 <small>(親想)</small>
禄壹万三千石余	毛利九郎太 <small>(出雲元深之)</small>	五百石	國司信濃
全國大津	毛利宮太郎 <small>(伊勢親彦之)</small>	千式百石	并原孫右衛門
禄壹万石余	毛利伊賀 <small>(親詮)</small>	千九百石	毛利虎十郎
全國平尾	三吉久藏 <small>(清太郎親知)</small>	千石	湯淺速水
禄六千石余	清水主水 <small>(マ)</small>	八百石	兒玉小民部
全國	毛利登雲 <small>(マ)</small>	七百五拾石	福岡舍人
禄八百石余	浦 <small>(元忠)</small> 親貞	七百石	岡部内記
老万石	高洲平七 <small>(マ)</small>	八百石	河内首令
三干石	穴戸播磨 <small>(親信)</small>	千四百石	梨羽兵衛 <small>(直衛之)</small>
貳千石	毛利内匠 <small>(マ)</small>	九百石	小澤一學
壹万石	毛利内藏 <small>(マ)</small>	七百石	粟屋早太 <small>(マ)</small>
老万五百石	益田源兵衛	千七百石	桂三左衛門
九千石	益田伊豆	七百五拾石	高杉小忠太
五百石	清水清太郎	六百戶	兒玉主殿
千五百石	大西将曹	八百五拾石	中山衛士
		五百石	林 主税
		全	平田新右衛門
		全	飯田左門
		全	上原縫殿

全 福原八郎右衛門

全 内藤五郎兵衛

三百石 山縣半七(植)

三百石 小倉源五郎(マ)

六百五拾石 梶尾孫太郎(マ)

以上 (長州藩分限帳等と照合の結果数字に異同があるが、そのまま掲げた)

#### 四七九 折田要蔵探訪報告

(長岡謙美)

一 熊本良公子良之助頻リニ御上京之御含ニテ、御国元御国元トハ本藩ト云

フヘモ、其旨御使者ヲ以御相談被仰越、且長谷川仁右衛門熊本藩士ヲシテ、予メ上京ヲ命セラレ、依時宜ハ関東

ヘモ下向、公武周旋之筈ニ候由、

右肥後藩山田五十郎ヨリ聞ク、

一大樹公御初諸侯伯、此涯又候京師へ御打揃、官武一和之基本相立、而シテ後討長ノ師ヲ起シ度トノ趣、肥後

一 藩之定論、

一大樹公御上落、万一モ御延引ニ於テハ、当春ノ当春ノ如クトハ、

本年正月島津主殿・吉良幸輔等ヲ云フニ如ク、諸藩ヨリ使節差立御

催促申上度、薩州ニ於テ其儀御同意ニ候者、速ニ其人

ヲ撰ヒ御同行仕度之議論、

一方今瓦解之世態相成候ニ就テハ、責テ九州中成共合從

一定之策ヲ定度、薩・肥前・筑等ノ大藩サヘ合体イタ

シ候ハ、其余ハ素ヨリ靡伏ニ疑アルヘカラス、乍然佐

賀ハ独立佐賀ハ兩端ヲ持シ、形勢ヲ傍觀シ、獨立ノ形ヲナシタル者ナリノ形、福岡ハ長州ヘ内

通福岡ハ士衰弱、長州ノ聞有之、因テ患フル処ハ只此二藩ノ

ミト之説、

一小倉藩ハ、内実長州之患ヨリモ、却テ筑前之後襲ヲ疑

恐レ小倉ハ元來柔弱ナルカ故、長州ノ暴業、ヲ目即ニ見テ益恐懼シ、保護ヲ頼メリ、頻ニ其趣ヲ以熊本ヘ

応接之頼有之由、

右肥後藩津田山三郎・井上喜太郎輩二三子ヨリ聞ク、

一小倉應接ノ為メ、熊本ヨリ出張之人数上下凡ソ二千人

位、惣督ハ沼田勘解由ト申ス者ノ由、先触ニハ二千人

人ト書記為有之由候得共、街道駅所ニ於テ聞クニ、二

千ニハ少シ不充程之人数ニ候由、

一 熊本藩近来大ニ開港論ニ致一定、頻ニ海軍主張ノ儀ニ

着眼、既ニ蒸氣船ヲモ入手、猶益々長崎辺ヘ手ヲ附ケ、

新船来ノ砲銃類、追々官府官府トハ藩庁ヨリ取入相成候由、

一方今ノ世態ニ相成、今更一和之説ノミヲ主張イタシ候

テモ、因循ニ歲月ヲ積、終ニ不可救ニ可至候間、肥・薩

ト志ヲ合セ、断然不庭ヲ罪シ、大義ヲ天下ニ行ヒ、大

ニ海軍ヲ拡張スル策、當時之急務ト之趣、

右肥後横井平四郎(示標)之論、

一熊本領内之関ニ於テ、鉄砲鑄造盛ニ有之、当分官府ヨリ劍銃五千挺之注文ヲ命シ、出来方折角差急候由、

右大抵肥後中之議論形勢、

一久留米勢ハ有馬織部ト云者、頭取ニテ惣勢千四五百人、筑前木屋瀬ニ去ル七日着陣、爰ニ宿陣之由、

一十二封度砲三挺六封度七挺、都合十挺之車砲押立行軍、去ル六日冷水峠ニ於テ見之、

一騎馬十四五騎具足箱為持候員七百余、

一乘輿更ニ無之、騎馬之外都テ步行、凡一日ノ行軍里程五里計ツ、之由、

一柳川藩ヨリモ、筑前領内軍営場所借入度引合有之候迄ニテ、未タ何方ト申地面モ不相究候、尤出勢之模様モ未不相分候、

一柳川家老十時攝津ヲ初メ、当春時分京師ニ於テ周旋イタル人数ハ、尽ク貶斥セラレ、国論又大ニ変シ候由、肥後藩士ヨリ聞之、

右大抵久留米・柳川之形勢、

一字和島藩ハ、当月七日迄ニ国境三机地名迄人数繰出シ、

夫ヨリ各藩ノ形勢ニ随ヒ、豊後鶴崎ハ渡海、九州路ヲ押シ、下ノ關ヘ掛ル手筈之由、

一字和島留守居ヲ、江戸ニ於テ關老ヨリ被招呼、長州ヘ之封書御渡シ、宇和島ヨリ長ハ相達シ候様可取計旨、御達シ相成候由、然処留守居ヨリ頻ニ辞シ申シタル由

候処、当分長藩士之儀ハ慎中故、封書国許ヘ相達シ候儀調間敷候間、是非宇和島ヨリ相届候様、達テ御沙汰相成、不得已其通取計候得共、御封書故何等之趣ニ候哉、更ニ其書意ハ不相分由、誠ニ奇怪之事ト申事ナリ、宇和島藩士モ大ニ怪ミヲ成シ相語ル、

一長州益田(親施)・福原(元勳)・國司三人儀ハ、無恙帰国(當時ノ巷説ニ、福原・益田等ハ山崎ニ於テ死シタリト噂々セリ)弥無相違、左候テ防州徳山侯ヘ御預相成、

入牢之由、右ハ宇和島産ノ僧、防州之内某寺ヘ寄宿イタル居、近頃帰リ来リ、親シク見聞シタル咄之由、

一福原越後儀ハ、福山侯ノ庶兄故、徳山ヨリ預ヲ被辞、其事ヲ以テ吉川監物輩ト議論ヲ生シ、暫時ハ大ニ六ヶ敷事候処、本藩(藩)ヨリ警衛兵可被付トノ論ニ定リ、其通ニテ漸ク徳山モ落着イタシ、預リニ相成候由、

右四ヶ条之話ハ、宇和島藩井關齊右衛門・島内衛門ノ両士ヘ、肥後熊本ニ於テ邂逅イタシ、詳ニ聞之、

一筑前ニ於テ聞ク処、右益田・福原等之形行宇和島藩士之咄大図相同シ、

一吉川監物近來屢山口へ出張、暴論ノ徒ヲ退ケ、大ニ改正イタシ、当分

勅勘ヲ蒙リ居候国柄ノ事ヲ折節達シ、士分以上八月代ヲ

為上、市中ハ戸口ヲ占メ、寂トシテ謹慎罷居候由、右

ハ筑後藩士櫛田角右衛門、近頃防州岩國へ使節トシテ

差越、帰路木屋之瀬ニテ邂逅イタシ聞之、尤モ岩國ノ

儀ハ、右櫛田現在見タル由、山口・萩之儀モ同断之由、

岩國ニテ為聞ト之話、

一長州ハ君臣共当分ハ大ニ悔悟致シ、吉川ヲ以テ京師へ

謝罪之筈ニテ、其歎願書草案ヲ筑州藩ヨリノ御使者へ

見セタル由、併悔悟之唱迄ニテ、未ダ其悔悟ノ姿実跡

ハ更ニ不相見由、筑前ニ於聞之、

一筑前藩ノ儀ハ、長州之周旋探索ヲ、内々一橋公ヨリ此

以前御承知相成居候由ニテ、此節表向一度ハ御使者被

差立、其後彼方ヨリモ御返礼之使者參候由、其節是迄

ハ御近藩ノ御好ヲ以テ彼是御周旋、且ツ御引合モ為致

候得共、此節限りニテ、以来ハ絶交致候間、其通御心

得可有之旨、筑前ヨリ御申越相成、其旨一橋公迄御届

相成タル由、

一蘆屋其外筑前領へ、近來防長之船ハ壳船連モ不近付、

是迄碇泊致居候船々ハ悉ク追ヒ払ヒ相成リ、尤モ下ノ

關辺遊女モ、蘆屋辺へ段々近頃參リ居タル由候得共、

是以テ一人モ不殘追返シ相成候由、是ハ直ニ蘆屋ニ於

テ土人ノ説聞ク処ナリ、

一長州ヨリ石炭買入レニ、筑前へ商船數艘毎々參リタルヨ

シ候得共、絶交以來石炭モ長州之手ニハ一切不壳渡由、

一筑前勢当分黒崎・若松之内ニ、上下三千人位出勢相成

候、其頭取ハ加藤司書ト申ス中老人勤ノ者之由、

一長州攻撃期限等之儀、筑前ヨリ肥前侯へ被仰談、御使

者ヲ以テ惣督尾州侯へ御伺相成候由、

一筑前之輕卒、先達テ小倉領内之百姓ト同行イタシ、戯

ニ近々長州ト申合、小倉城ヲ前後ヨリ挾打ニシテ、乘

リ取筈ナリト為申由候処、右ノ百姓大ニ驚愕イタシ、

其趣具ニ役筋へ為申出由、折柄筑前勢黒崎ニ於テ大勢

ノ調練致シ候ニ付、小倉ハ益疑畏ヲ生シ、夫ヨリ福岡

へ音信ヲ絶チ、当分之形勢ニ相成タル由、然ル故ニ福

岡ヨリハ、右輕忽之儀申タル者ヲ糺索ニ被及、小倉へ

ハ御使者ヲ被立、以前通有之度趣被仰越候由候得共、何



分未タ小倉ハ疑心解兼、色々巷説申触シ、夫ヨリシテ肥後其外諸藩ノ嫌疑モ受候由、実ニ無勿体事ナリ、筑前侯之御咄ナリ折田拜謁ノ御親、話ナリシト云フ、(増態)(七)

一筑前之家老黒田(増態)(七)山城出任ヲ被留、当分慎中之由、右山城事ハ、筑前藩中之議論モ追々順逆区々ニテ、山城初暴論体之者ハ、当分折角御取押之調最中之由、

一蘆屋御借入ニ付テハ、福岡ヨリ達シニ、薩藩士ヘ対シ決テ不敬ノ儀共無之様相嗜、物価高料ニ売ヘカラストノ趣意モ御達シニ相成リ、左候テ出精相勤候間得宜シキ者ヘハ、後達テ御褒賞可被下旨被達候由、依之万端土人共丁寧ニ会釈イタシ、家屋土蔵等モ無不肖明渡シ、立退居候筋ニ見受ル、

一兵糧米ハ、蘆屋ニ於テ求ルニ至テ容易ク、僅一兩中(日カ)忽チ二三千俵之米買取候儀ハ、何之口能モ無之由、蘆屋問屋之茂七ヨリ委細ニ承届ル、

但

石之前石ノ前トハ米二石ノ通噺今之相場直成代金一兩二步ノ由、  
錢ニシテ十一貫二百文ニ相当ル、

一筑前留守居江戸ヨリ申越候趣ニ、当分幕役中之評議ニ、長門宰相父子退隠サセ、外ニ何方ヨリカ養子之取結有

之、可然旨内達為有之由ニ申越候由、於筑前ハ彼藩士川越又右衛門ヨリ聞之、

一右長州養子之人柄迄モ、内々於關東相究リ居ルトカノ由、慥ニ名前ハ不取覚候ヘ共、四国・九州辺之御大名之御子共ニテハ無之由、

右川越ノ話、

(前田藩參)一加州侯ヨリ内々長州之周旋有之由、尤黒崎ヘ当分加州船大船一艘碇泊、土地之巷説ニ長門守殿迎ニ參居候由之説モアリ(坂カ)ニ足ラス、

一大返辺九州ヘ下リ船ヲ、多ク加州ヨリ雇入相成居、夫故下リ船大ニ差支、筑前藩京師等ヨリ下向之者、別テ難渋致ストノ話、

右筑前藩士川越又右衛門・篠原幾平兩人ヨリ聞ク、  
一肥前出軍、去月晦日迄繰出シノ管候処、御達替之

台命廿七日ニ相達シ、夫故出軍差扣、即チ尾張公方ヘ日限等何相成候ヘトモ、未ダ何分モ不相分候由、

一肥前出軍之惣督ハ、鍋島河内ト申スモノニテ、惣勢五千余之由、

一兵糧米一万二千俵余、既ニ小倉表ヘ運送致候由、  
右肥前藩士千住大之助・井之内小左衛門ヨリ聞之、

一筑前黒崎船兵庫へ碇泊致候処、先達テ京師ヨリノ落人  
遁レ来リ、価ノ高下ヲ不論可雇入トノ趣ニテ被相雇、  
右落人共ヲ乗セ、上ノ關迄送届候由、其節長門侯御上  
京之賦リニテ、大勢ヲ卒ヒ上ノ關上ノ關ニアラス  
關州多摩津ナリへ滞船之  
折柄ニテ、京師ノ敗走ヲ被聞大ニ憤怒シ、再ヒ守返シ、  
会稽ヲ恥ヲ雪キ度ト之軍議起リ、暫時ハ大ニ勢ヒ毛奮  
ヒ候由、然処薩ノ蒸氣船追々登リ来ルトノ説ヨリ、其  
等ノ処ヨリカ右再起之軍議モ相止ミ、俄ニ帰国ノ議ニ  
相變シ、万一中ニ於テ蒸氣船ニ逢ヒ候ハ、速ニ御本  
船ヲ相固メ、時宜ニヨリテハ長門侯ヲ何レノ船ヘカ相  
忍ハセ、何方ヘナリト遁レ去リ候様、於其儀ハ恩賞ハ  
可任望トノ趣、船々へ達シニ相成候由、黒崎船頭帰国  
之上申出候趣ナリ、

右筑前藩士之話、

一長州ハ、此節下ノ關ニ於テ夷船ト戦争之砌、兼テ抱置  
キタル浮浪士、所謂奇兵隊之輩ハ、敢テ戦ハ不致、多  
クハ脱走シ、僅ニ残り止ル者ハ、却テ夷人ノ奪ヒ去ル  
台場之大砲ナト持運ヒ、夷人ヘ加勢イタシタルモ為有  
之由、是モ筑前藩士ヨリ聞ク新聞紙ニハ土人ト記セ、  
リ蓋シ土人ナラン乎、  
一長州之使者有川仲祐ト申スモノ、七八人列ニテ求磨之

相良家へ参リ、肥前地へ差掛リ候由、肥前之内對州領  
田代駅ニテ聞キ得、即チ跡ヲ追テ佐賀へ差越聞合候処、  
佐賀へノ使者ハ右有川ニハ非ズ、小幡喜兵衛ト名乘リ  
来候由、尤モ国境迄役筋之モノ出迎ヒ、於其所長州侯  
ノ書翰相受取、即右之使者ハ其所ヨリ追ヒ帰シ候由、  
左候テ右之書翰ハ、当分

勅勒ヲ蒙リ居ラレ候方ヨリノ書故、則チ開封モ調兼、  
如何様可仕哉之旨、

朝・幕へ御届ニ及ヒ置候由、肥前藩士話、

一長州ヨリ近頃四国・九州ノ諸藩へ悉ク使者ヲ立候由、

其仔細ハ未ダ不相分、人足ハ皆通シ通シトハ宿駅ニ於テ雇フコ  
トナク、是ノ地ヨリ彼レノ  
地ニ通行ノ通稱ニテ、国元ヨリ召列レ候筋ニ相見へ、駅所ニテ  
人足繼立不致候ニ付、何ツノ間ニ通行候哉モ分兼候由、

是モ肥前藩士話、

一当分田ノ浦沖へ夷船一艘碇泊イタシ居候由、長州ト和  
議調候上、猶何故滞船イタシ候哉、更ニ子細不相分候  
ニ付、長崎ニ差越事情探索ニ及候処、横濱ヨリ近々ミ  
ニストル廻船ニテ、長州ト永年不易之通交為可相結、  
夫迄相待居候由、尤下ノ關ニ於テ、最早盛ニ交易モイ  
タシ居候由ノ説ヲ聞ク貿易ニ非ラス、夷船ノ斷之、  
品ヲ売買スルノミナリ

一 於長崎通詞堀壯十郎同道致シ、ガラバへ面会致シ、下ノ關戰爭以後和議之結局聞繕候処、長州ヨリノ談判ニ、元來攘夷鎖港之儀ハ、於彼藩モ敢テ好ム所ニアラスト雖トモ、

朝・幕ノ命令ニ随ヒ不得已事、去年來通船ノ妨候儀ナリトノ申分故、軍艦横濱へ立歸リ、ミニストルへ其旨申聞候処、ミニストル大ニ憤怒イタシ、然ラハ則チ幕府ニハ長州一己之狼藉ナリト唱へ、内ハ窃ニ長州へ致同意、発砲ヲ命シタリト見ユ、此儀ニ於テハ、其因縁糾サスンハアルヘカラスト、直様銃卒五百人許ヲ引キ列レ、江戸へ出掛ケ、閩老衆へ談判ニ及候筈ナリト、近日申來候由、依之最早長州へハ一向不差構、下ノ關へ残置候一艘モ、近々曳取ニテ可有之、乍然長州征討之日本軍始ラハ居止リ、見物致スニ可有之ト語レリ、

一 今般長州征討ニ付テハ、諸藩へ不被菅、薩之一手ヲ以テ攻伐ヲ被加度トノ趣、御願立相成候由、頻ニ於熊本其説ヲ唱候由、彼藩士ヨリ聞之、然処其説流伝シテ、於肥前モ頻ニ其儀ヲ唱へ候由、於佐賀モ亦是ヲ聞ケリ、未ダ其然ル所以ヲ知ラズ、

一 九州諸藩、長州征伐之為メ出軍シタル藩ハ、筑後久留

米一藩ノミニシテ、其他更ニ不及聞、熊本之出勢モ小倉之類ニ被庇、救援ノ為ナリ、福岡ハ黒崎・若松自國ノ境目故、固人数被差出置候ニ可有之、依之或ハ三千、或ハ五千トモ云フト雖、其実ハ漸ク央ニモ可有之乎、尤藩々何方モ、追々人数繰出之筈ナリト云ハサル所ハ無之、(徳川慶勝) 独リ佐賀藩士ノミ断然トシテ曰、我藩ハ惣督尾張公之命ヲ待テ、未ダ一人・一騎モ不出、命令アラバ則出軍可致手当ハ兼テ調へ置ケリ、然ルニ久留米藩等ハ、何様ノ心得ニテ、此節元帥之任ヲ賜ヒタル尾州侯ノ命ヲモ不待、早マツテ師ヲ出シ、徒ニ兵ヲ外ニ廻ラシ候哉、更ニ不得其意、頻ニ嘲笑スル形ニ見ヘタリ、如斯ノ形勢故、御国元ノ出兵モ今姑ク御持重アリテ、妄リニ不發方可然乎、右各藩之形勢ヲ觀察シ愚案ヲ加フルニ、熊本遠近之情実ヲ探リ、大小之藩士ヲ懷ケ、大ニ志ヲ述ヘント欲スルノ気味アリ、佐賀ハ威勢ヲ以テ近ク小藩ヲ赫シ、遠ク関東ニ結ヒ、表ニ独立傍觀ノ形ヲ示シ、内事變ニ投シ機會ヲ見テ動ント欲スルノ風采アリ、尤モ二藩ハ国富ミ兵強シ、福岡ハ其君英邁トイヘトモ、惜ラクハ下ニ人材ナク、世態時情ニ疎ク、動々モスレハ事機ヲ誤リ、諸藩ノ嫌疑ヲ受ルノ失アリ、尤国

俗懶惰士氣軟弱、其他久留米・柳川以下ノ小藩ハ、固ヨリ確乎タル定論ナク、東藤西從、イツモ時ノ強勢ニ随ヒテ變遷スルト見ユ、長州ハ表ニ悔悟謝罪ヲ唱、内猶姦謀ヲ廻ラスニ似タリ、尤關東ノ所置弥討長ノ意有之哉否ヤ、可疑可怪事多シト、於所々雖聞之、新シク東行シテ探索ニ不涉事故、其実何トモ窺得難キ也、此探訪書ハ、名性・年月モナシト雖トモ、甲子九月初頃ノ事実ナルハ文中ニ明ナリ、又書体文章事実ヲ以テ考推スルニ、折田要藏ナルヘシト信ス、當時小倉其他ニ探訪ノ為派遣セラレタレバナリ、

四八〇 銃藥製造掛上申書

子年 伊集院四郎

詰中左之通 (硫黄島在動中)

一 硫黄三拾七万四千三拾九斤四合五勺

一 錢 四万千拾九貫六百貳拾八文

右一行御利潤

内

錢壹万貳千貳百五貫百六拾八文 (七三)

右御臨時上リ

差引

錢貳万八千八百拾四貫四百五拾六文

(マ) 年門司為兵衛

詰中左之通

一 硫黄三拾八万四千六百八拾斤四合貳勺四才

一 錢三万三千百七貫七百八拾九文

右一行御利潤

内

錢壹万九千三百四拾五貫貳百四拾八文

但

硫黄七万七千三百八拾壹斤

右御臨時上リ

差引

錢壹万三千七百六拾貳貫五百四拾壹文

(慶應二年乙) 寅年 伊藤清右衛門

詰 去十二月迄

一 硫黄 三拾九万五千八百五拾壹斤三合

御利潤未不分

右当三月中迄又々相応之出産ニ可相及候、

御臨時上リ

三万五千五百五拾貫四百貳拾文

一硫黄六万千貳百斤

右一行硝石代

長崎表へ積出相成候

一同 四万千三百拾斤

右一行鷲管并生洋布御買入代ニシテ同断

二口

合硫黄拾万貳千五百拾斤

一雷粉五拾八貫目

一水銀六拾六貫七百目

斤ニシテ四百拾六斤余

二十五度以上ノ

一アルコール 三百九拾貳貫目

斤ニシテ二千四百五拾斤

二十度位之燒酎

倍ニシテ四千九百斤

一硝酸五百貳拾貳貫目

此之

レートルトハ八千七百

但二度遣之賦

一硝石并綠礬 壹万八百拾貳斤

一木炭并薪麦粉玉子 口土人足賃錢

一雷粉 貳拾九貫目

一水銀 三拾三貫五百目

斤ニシテ貳百八斤余

二十五度以上之

一アルコール 百九拾六貫目

斤ニシテ千貳百貳拾五斤

二十度位之燒酎

倍ニシテ千四百五拾斤

一硝酸 貳百六拾壹貫目

此之

レートルト四千三百五十

一硝石并綠礬其外入

一雷粉精製之上卷勿ニ付代銀壹貫百文位之算当

但諸入目其外人足賃分等都テ出候賦

一雷帽子百貳拾万

雷粉拾貳貫目

斤ニシテ七拾五斤

但

卷ヶ月分拾万出来賦

大雷帽子 貳万

凡銅地カネ拾貳貫目

但卷ツニ付量目五分宛

内地カネ四貫目

但雷帽子カラ切屑ニテ

差引銅地カネ六貫目

右同卷ツニ付三分宛

外ハ仕欠地金

一細工人 三人

但カク切

一右同 兩人

但器械へ取繕方

一右同 六人

但銅板延方并下地仕

合細工人拾人ニテ

一日分出来高之賦

一鑄物師鍛冶御引取出来物集成館出来

一雷帽子製法集成館へ御引直シ

一ハトロン紙囊并コロス製(コソオンカ)作引物方・銃薬方へ御引直シ

一製作方同断

一写物方御引取ニテ、時々写物有之節ハ筆工へ

一製薬方御引取ニテ御製薬方合并

一雷帽子器械御取立製造有之度

一硫黄島方・生産方計ラヒ

一コロス製作大工御引取銃薬方計ラヒ

四八一 全上第二

陸軍兵士

諸役者六拾四人

戦兵 六百四拾人

鼓隊

小銃取繕人 拾人

御城下一大隊

内

卷隊ハ当分之

六番隊

但貳拾五歳以上之人數

貳隊ハ諸座人數

二隊八番兵人数

大砲一隊

臼砲打手四拾人

外二

海軍一隊

諸郷一大隊

内

高岡一小隊

加世田

伊作

式ヶ郷

合一小隊

出水

阿久根

合一小隊

伊集院

市來

串木野

三ヶ郷

合一小隊

都之城一小隊

知覽

鹿籠

合一小隊

右二大隊

一御城下一大隊

差引 四人

一諸郷 一大隊

差引 四人

一御城下三小隊人数

三百六十九人

一右同大砲隊総人数

百三十四人

一右同臼砲打手総人数

九十七人

一御城下番兵二小隊

総人数二百三拾四人

一諸郷四小隊総人数

四百八拾三人

一 (47)

二百四拾人

總人數千五百六拾五人

一御軍賦役頭取者人

一右之卒 貳人

一御附人 七人

一右之卒 四人

一家 中 百者人

一足輕以下 五拾人

惣人數百六拾五人

右備後殿へ被召付候人數

一大砲隊一隊七拾七人

一右差引人 壹人

右從卒 拾者人以下

一陸軍兵士六隊

惣人數五百貳拾八人

但一隊ニ付四拾八人ツ、

右從卒 六拾六人ヨリ以下

但一隊ニ付拾者人ヨリ以下

一小頭長 壹人

一右差引人 四人

一旗隊 六人

一鼓手 六人

但喇叭ハカ兼役

一樂隊小頭 壹人

一大太鼓 壹人

一笛手 四人

一兵糧方 七人

一普請方 七人

一人馬方 七人

一玉葉方 七人

一玉葉方支配 四人

一主取夫 二十八人

町方手当

一醫師 七人

從卒七人

役掛方付足輕十四人

四人間ニ皮庫者ツ宛

一二人間ニ在番皮庫者ツ宛

但從卒之義ハ主人方付込



一私領夫卒 五拾人

ノ八百四拾四人

海陸軍方御宛行

御扶持米 六千石

内

四千石

陸軍兵士千人分

但屯人前四石ツ、

貳千石

陸軍兵士五百人分

但書同断

御城下一大隊

内御城下三小隊  
番兵二小隊

監軍 八人

医師 六人

兵糧方 三人

人馬方 三人

玉藥方 三人

普請方 三人

同 大砲隊

監軍 二人

医師 一人

小荷駄方

四役場 四人

諸郷屯大隊

大隊長之場 屯人

教頭之場 貳人

村田勇右衛門  
澤山十兵衛

教佐之場 屯人

中村源助

監軍 六人

右御城下ヨリ

指宿 山川 頼娃 坊泊

久志秋目 加世田 串木野 高五五

水引 阿久根 大始良 小根占

佐多 田代 内之浦 高山

右海岸要所

出水 大口 山野

加久藤 須木 倉岡

綾 穆佐 山之口

志布志

右境目要所

大口

羽月 山野 馬越

湯尾 曾木 本城

鶴田 溝邊 横川

兼

加久藤

吉松 栗野 諸方郡  
吉田

馬關田 飯野 兼

右一大隊

高岡

勝岡 倉岡 綾  
諸方郡

穆佐 山之口 高城兼

小林

野尻 須木 高崎

高原兼

右一大隊

志布志

大崎 串良 松山

福山

高山 内之浦兼

末吉 財部 敷根兼

右一大隊

小根占

大根占 佐多 田代

始良 大始良 鹿屋兼

櫻島

牛根 高隈 引(百脱之)

恒吉兼

右一大隊

合東目 四大隊

出水

野田 高尾野

阿久根

高城郡 高城 水引 東郷

中郷 高江兼

右一大隊

隈之城

串木野 樋脇 山田 薩摩郡

伊集院

百次 山崎兼

御城下一小隊

但有馬雄之助預

市來 郡山兼

監軍

外ニ谷山一郷ヲ是迄通兼帶ニテ相濟

村田長左衛門

右一大隊

同

一小隊

加世田

阿多 田布施 伊作

監軍

但大野五左衛門

川邊 河辺郡 山田 坊泊

井上助右衛門

久志 秋目兼

阿多源七

指宿

三番隊

穎娃 山川兼

但 同断

右一大隊

監軍

國府

伊藤仙大夫

清水 日当山

伊藤万次郎

踊兼

番兵一小隊

蒲生

但 一番

帖佐 大村 始羅郡 山田

監軍

鹿兒島郡 吉田兼

川畑伊右衛門

右一大隊

土持佐平太

合西目四大隊

同

一小隊

但 二番

監軍

川南東右衛門

淵邊直右衛門

大砲 隊

但御城下

監軍

大山後角右衛門

平山喜八郎

一白砲打手

監軍

前田十郎

上原藤十郎

同諸郷

一番隊

監軍

毛利強兵衛

山口沖吾

同二番隊

監軍

日高軍次郎  
種子田左門

同三番隊

監軍

大脇彌五右衛門

有馬藤太

同四番隊

監軍

山ノ内一郎

柴山龍五郎

同五番隊

監軍

大脇豊之介

中村矢之助

同六番隊

監軍

中村源吾

堀直太郎

四八二 救助方上申

窮士御差分高

七千石之内

一 千石

但比志島転任方御宛行所務米、

三百六十

一 三千式石余

但六ヶ月交代ニテ、四石之割ヲ以、砲術館詰

二百三十人へ被成下候、

所務米九百拾九石余

一 百三十拾石余

但同断大砲掛拾人へ被成下候、

所務米三十拾九石余

一 百五十拾六石余

但同断両遠見番人拾式人へ被成下候、

所務米四十拾七石余

一 千五百五十拾五石余

但同断 造士館・演武館百二十一人へ被成下

候、

所務米四百七拾五石余

一 式百三十拾五石余

但年中壹石八斗之割ヲ以、拾三歳以下家督之者造士館へ出席四拾人へ被成下候、

所務米七拾壹石余

一 八百八拾式石余

但同断郡方支配見締人百五十人へ被成下候、

所務米式百六拾九石余

右之通窮士御差分高七千石当分御宛行相成居候、

四八三 全上第二

窮士御差分高七千石之内、別紙之通当分御宛行相成居候得共、此節海・陸軍所被召立、追々多人數兵士被仰付、盛大可被成 御趣意ニ付テハ、右御差分高二モ、窮士之内武役ニ可相立壯年之者ハ、可成文武兵士ニ被振向、御扶持米被成下候儀、時勢相当之事ニテ可有御座、当時御米繰等御難渋之折柄、別段御差分高窮士方へ御宛行相成居候ニ付テハ、窮士トハ乍申、只今之飢ヲ相凌候迄ニテ、往々御奉公方等不相調候テハ、実ニ遊民同様ニテ、適難有被成下候御救助之詮モ不相立事候付、当世態第一武役ニ可相立儀、急務之事付、造士館・演武館へ罷出候百人余之窮士モ、都テ御引取ニテ、此節窮士操練所詰之内ヨ

四八四 改正軍隊職制

リ、陸軍兵士多人数被召入候付、其跡代へ順番無構繰入候テ可然、左候テ造士館・演武館へ御宛行相成居候千石余之御扶持米ハ、別紙八百石余之郡方支配見締人の方へ

一大隊長

被振向置度、尤当分操練所詰式百三十人之儀モ、都テ陸

御役料高 百八拾石

軍兵士へ繰入相成、何篇兵士同様ニテ、御扶持米之儀ハ、

式拾貳人 賄料

別紙三千式石余ヲ御宛行相成、病死又ハ無拠故障等ニテ、

御役順大番頭之頭

右貳百三十人之内代合之節ハ、窮士之内壯年之者、与方ヨ

一教頭

リ人柄取調出候様有之候テ、左候得ハ、窮士壯年之者ハ、

御役料米 一百 俵

自然武役ニ相立候様罷成可申、其外老体又ハ長病人・幼少

拾四人 賄料

等ニテ、迎モ武役難相勤至極之窮士ニハ、別紙見締人其

一教 佐

外之御宛行有之、七千石御差分高外ニモ、別段三口番竹之

御役料米 七拾五俵

子留・早苗留四ヶ月目一俵ツ、被成下候、御救助米モ御

拾壹人 賄料

座候付、夫ニテ随分露命被相繫可申、只窮士御救助迄ニ

御役順御使番次席

テ、士相当之御奉公難相勤者多人数罷居候テハ、当時柄

一小隊長

別テ歎ケ敷次第二御座候間、右通同席中申談、吟味役へ

御役料米 五拾五俵

モ及吟味、此段申出候、以上、

拾壹人 賄料

〔慶応二年カ〕  
寅正月

御役順御小納戸頭取頭

大 番 頭

一半隊長

御小姓与番頭

御役料米 四拾俵

六人 賄料

御役組方吟味役頭

一分隊長

御役料米 貳拾七俵

五人 賄料

御役順御膳所頭次席

一小隊長

役料米 貳拾表

一伍長

役料米 兵士同様

右ハ此節陸軍所被召建候付、右之通新規御役等被召建候旨被仰出候条、向々へ可致通達候、

但役料高等之儀大概右通候得共、持高之依員數時々

可相替候、

(慶応二年九) 正月

伊勢

四八五 海軍會計

海軍方 四百人 内評

陸軍方 千人

一海軍方

付開成所

卷ケ年雜用

卷万三千兩

一蒸氣船 五艘

同卷万三千兩

但貳万余リ御入目ニ可及候得共、運賃ヲ以相補賦、

且石炭掛御扶持飯料等ハ、別段御勝手方ヨリ、

一集成館

同式万兩

但三万兩之賦ニ候得共、器械成就之上ハ、人足等

相減シ、且鍋方利潤等ヲ以相補賦、

四万六千兩

一陸軍方

同六千兩

一銃藥方硝石丘方 (マゴ)

同卷万四千兩

一製練所

同卷万四千兩

但卷万八千兩位ニ可及候得共、霧島・硫黄島、中

之島出產硫黄利潤ヲ以相補賦、

三万四千兩

二口ノ 八万兩

右ハ当秋ヨリ之三升重出米、大抵可及壹万三千石、右之内六千石海陸軍方兵士海軍方四千石陸軍方四千石御扶持米ニ差向ケ、残七千石ヲ以前件御本手ニ宛行、

真米 七千石

壹石拾兩見賦

七万兩

差引

壹万兩不足

右御勝手ヨリ年々差統ケ、

右通当座相定メ、追々諸寺院へ御手相付、御取揚高等被振向候ハ、別段御勝手方ヨリノ差統ニ不及様可相成、



〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編

元治元年十一月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」  
（紙数六八枚）の記載あり〕

## 目録

奈良原幸五郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰  
 京都在宮薩兵長州発途其他報告  
 在江戸柴山良助報告  
 薩州兵近日軍装ニテ行軍致スニ付市中へ触達  
 蘆屋在陣黒田嘉右衛門清編報告  
 小松帯刀報告  
 諸大名参勤妻子在府復旧云云永田大野ノ書翰

銅銭価騰貴藩達

伴勝三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰芦屋陣中ニ於テ

大山格之助良綱信書ノ略

酒井十之丞ヨリ黒田嘉右衛門へ軍議并攻入期日云云書翰

西郷隆盛報告

伴勝三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書状

中津藩菅沼ヨリ黒田へ書翰

小松帯刀ヨリ島津主殿外二人へ書翰

島津主殿ヨリ市來廣實へ蘆屋陣中ヨリノ書翰

木場直右衛門ヨリ大久保一蔵へ書翰

本藩出軍各隊へ達

三暴臣首級実檢之藩達

御両殿様御親諭

西郷隆盛ヨリ大久保一蔵へ与ル書

海江田武次ヨリ大久保一蔵へ書翰

総督尾州侯ヨリ廻達

長州征討ノ軍令藩令

長州征伐ニ付出軍ノ面々武運長久之御祈願云云

筑前国蘆屋中ニ布告

五卿各藩へ御預ケ達書

長州御征伐ニ就キ萩表海道先鋒之御受書

黒田嘉右衛門報告

西郷吉之助長州処分建議

尾州総督ヨリ蘆屋陣営へ達

蘆屋陣中布達

官軍配兵

天賜御剣之御拵書

四八六 奈良原幸五郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

尚々醉筆御仁免可被下候、

御道中無御滞御通行ノ筈、大慶奉存候、扱小生ニモ鶴崎(天分愚)

之様罷通ル賦御座候処、人馬急速揃カネ候トノ由ニテ、

此表ノ様致通行、今日漸出帆ノ都合ニ至リ申候、就テ

自然御手抜モ無之筈奉存候へ共、喜入家并御側役之御

宿手当未無之哉ニ承リ候間、為念申上置候、

一一兩日ノ処ニテハ兎ニ角ニ御座候へ共、御家老共之処

ハ、存付ノ御人数ニテ御座候間、急速御手当調カネ候

半ト存付候間、可然様御都合奉願上候、小生ニモ五日

之内帰帆、彼表之次第委曲可申上候間、左様御待居被

下度、此旨用事マテ早々奉得貴意候、敬白、

十一月一日

蘆屋ニテ

黒崎ヨリ

黒田嘉右衛門様

奈良原幸五郎

四八七 京都在宮薩兵長州発途其他報告

十一月朔日早天、薩州藩長征発途ニ付、銘々立派ニ甲

冑等イツレモ軍装其人ノ好ニ随ヒ正敷着立、

御所南門前へ集合、陣列相立拜伏致シ、夫ヨリ組々列

ヲ正シ堺町御門ヲ出、其俣伏見駅へ出立有之候事、

一同日、尾張前大納言殿、過日来大坂西御堂滞在之処、

今日藝州表へ御下向之事、

十一月二十二日、於下關洋中俄ニ雷雨頻ニ降リ、折節大

雷船中へ落、船中焼失死スル者無数、過日取片付相済

候由、船頭ノ実話ニ有之候、

十一月二十日、松前伊豆守殿(兼広、松前藩主)是迄老中格之処、本役被

仰付候事、

一兵庫奉行小笠原攝津守殿(広孝)へ被 仰付、

但右ハ兵庫開港之前拵ト下評有之候、

十一月二十一日上京、豊後佐伯矢筈毛利伊勢守殿

天氣御伺トシテ參府懸ケ上京有之候事、

十一月十八日、北野聖堂石鳥居

今般一橋殿附属消防方、江戸ヨリ新規ニ、先達テ上

京相成候、頭取新門某、右京地ニテ申サハ、手伝方

之親方三文シヤ同様之モノ共ナリ、右新門某始メ子

方不残、其上京都紅満屋中一同ヨリ寄附ニ、右鳥居

十一月十八日午後、無故忽然ト破裂ニ及ヒ、上之笠

木東之方ニテ、三ツ折墜落、不思議之事共ニ有之、

下説ニ

菅公モ長門國之凶徒ト有之候、詔旨之反シ候ヲ如

何思召ケン、

十一月十一日、南都春日社申祭ニ付、例年之通

勅使參向、坊城前大納言殿・野宮中納言殿等行向之処、

春日社前森中之大木無故忽倒折、皆々奇異之思ヒヲ成

ス、神威之奇瑞如何力可貴尊ト云々、

十一月二十五日參内、毛利伊勢守殿〔長門守禮殿、高橋藩主カ〕・秋月〔高橋、多度津藩主〕殿・

京極壹岐守殿・加州家老長大隅守等、

一同月二十八日、長大隅守征長先陣発途之ヨシ、

加州ニ力ナク

會津ニ人ナク

薩州ニ六十人ナシ

越士ナシ

長州ニ三ノ入テナシ

十一月九日夜、西宮藤堂家御警衛陣所へ、何者トモ不

相分侍体之者十三人計忍入、藤堂金七ヲ殺害ニ及ヒ逃

去候ヨシ、子細不相分、

四八八 在江戸柴山良助報告

承及候形行申上候、

一幕府も諸侯之妻子等旧制ニ復シ候様之事ニテ、御察シ

も被為在候筈と奉存候、当分大ニ言路を絶、表向ハ大

小監察之取次ニテ奏達仕筋ニハ御座候得共、先ツ名目

而已之事ニ被伺申候、此節柄諸藩より各主命ニ依テ、

機事を奏し度出府仕候者不少向ニ御座候得共、大方閣

老中固き御申合之段を以御申断之由、此内紀州之家老

國より態々出府仕り、拜謁願出候処御断ニテ、右之家

老話ニ、今日迄三十余日色々いたし候へ共、閣老江拜

謁不相叶、御三家之家老としてケ様之会釈ニ逢ひしハ

于今、初ニテ、甚以御三家之名を穢したりと、大ニ立腹

仕居候由、將又去月廿二日比、肥後之用人長谷川仁右

衛門と申者、君公之御直書并滞京之阿部〔豊後守正外、奥州白川閣老職〕侯

添書を以出府仕り、拜謁願出申候処、初之程不相叶、漸

一昨日と致直書持参之御取訊にて、水野侯和泉守忠精羽州山形開老職

江拜謁相叶候由、細川侯之御直書別紙差上申候、右様

之振合にて親藩・外藩之差別なく甚失望此事ニ被伺申

候、左候て小藩なとハ小事咎目等いたされ、吃り付ら

れ候様之向も有之、稍々は迄之幕弊ヲ取起し、威厳を

取るの氣風ならんと被察申候、

一長州征伐之事ニ付、將軍様之御進発、機宜を被為失

候ては不相濟砌り柄とは、

朝廷よりの御内命も有之、諸藩之希望無申迄事にて、

其役々主立候尾州・越前等之処ハ勿論、會津・桑名・

松山・大垣・忍等之親藩、精々尽力為有之由候へ共、

于今其しるし相見得不申、就て又御邸ハ勿論久留米・

藝州・肥後・津等之外藩より御手を被付度との御申合

にて、当分折角之央ニ御座候、其儀ハ自ら筋々御掛合

御座候筈にて、慙と閣筆仕申候、

一牧野備前守忠英、越後長岡老職様御話ニ、御進発ニ付因州・阿

州等之処、御疑之廉長州左祖も被為在候得共、其儀ハ御

關係なく御進発被為在候御趣意なりと申事、右御家

中へ久木山泰藏行達能き手続有之相洩れ申候、

一尾州之水野喜三郎トコと申者此内出府仕、水野和泉守全前様

江拜謁奉伺候ニハ、御惣督長防辺江御打入、一城をも

御乗取と申時分、其段御左右有之候上、將軍様御進

発被為在、已ニ又大坂辺江御着之比御一左右申上様ニ

との御内定之段承りし由、併ながら尾州侯之方ニハ、

將軍様御進発と申ものなれハ、別段我々數へ惣督と申

儀は、不入訊にて、此節ハ不易易砌柄、一日も早く御

進発被為在、其上何分惣督之御沙汰も被為在然るへし

と被仰、幕府にてハ又惣督之御受無之ニハ、御進発被

為在候儀不被為叶、一日も早く御進発之惣督御受可有

之と、申振合之哉ニ承及申候將軍進発ハ全ク虚声ニ出タルコトナ

ニ斯ク紛擾連、

一肥後之長谷川仁右衛門水野和泉守様江拜謁之砌り、御

口上之中ニ、將軍様ニも折角御急之事故、可成早目

ニ御仕舞之訳なれとも、武器等も御不揃にてどふも關

ヶ原時分之様ニは參兼、其段ハ役人之罪なから、今日

精々尽力仕舞方いたす儀にて、速も急速と申所ハ、譬へ

勅命にしても、どふもいたし方なき時宜合と、被仰候

御口氣御座候由開老ノ言ニ、武器云々等ノコトヲ以テ、進発虚声ナ、

一長州之屋敷も悉く破けにて、材木等ハ焼捨之賦りにて、

高之者ニ御任せ、内々風呂屋へ竹木用ニ申受候て、分家徳山、清末、長三ヶ家ヲ云フ之方々も御屋敷御取揚相成、家中ハ御預けニ成り候様承及申候、

一五陣ヶ原ニて之調練無間日砲声不絶仕申候、一昨日ハ於吹上 御進發ニ付、行軍之式 上覽御座候筈之處、御延引ニて、不遠中又有之向ニ承及申候、

一常州辺之事、未立入承得候儀も無御座候へ共、浪人之輩当分大方水戸江聚り候よし、彼之国も奸党・激党と欺申唱、当分二ツニ相成り、奸党之方ハ国君をさしはさみ、激党ハ松平大炊頭頼徳、常を押立、武田耕雲齋ナラシと主裁頼ハ、幸フニて、浮浪人一味いたし、于今毎日程追合御座候由なれとも、激党之方軍器乏し敷、敗戦しはく御座候由、

右之大方海江田武二信義・久木山泰蔵等より承得候事ニて、此段申上候、以上、

子十月朔日

大久保一蔵様

柴山良助

〔島津忠家氏所藏本にて校訂〕

四八九 薩州兵近日軍装ニテ行軍致スニ付市中へ

触達

子十一月二日申渡之写

〔島津茂久、薩州藩主〕

今般征長ニ付、松平修理大夫家来軍装ニテ、近日京都ヨリ当表へ行軍致シ候様ニ付、市中之者共右往来之様子及見聞候共、決テ動揺致間敷候、此旨三郷・町中端々迄モ不洩様可申通候事、

子十一月二日

四九〇 蘆屋在陣黒田嘉右衛門清綱旧名報告

今般久留米江立寄、先達て御引合申入置候趣も御座候處、既ニ出軍期限被仰渡候付、先不取敢初發之究通、筑前蘆屋江參陣之筈候間、為御心得御同組合之事故、拙者存慮を以御案内ニ及候旨申入候處、於彼方いまた其手数ニ不及候付、不日ニ彼藩も出軍之手配ニ可取掛と之事ニて、

中務大輔頼様ニも、別て御満足被思召候御模様ニ被相伺申候、尤 御国之御様子如何と、御出軍之有無伺之為、先日御使者も御差立相成居たる由ニ御座候、

一肥後熊本出勢人数、筑後松崎駅江滞留罷在候付、何等之子細ニ候哉、涉探索候處、筑前領人馬継立相断、通行不相調由承得、尚又於山家藤駅委細相尋候處、弥以筑

前領は、此節長州征伐として、諸藩之出張人数ニは、

人馬一切継立不致様、城下より嚴敷命令御達しニ相成候旨、駅場役人より慥ニ承届候付、早速福岡之様道を転し、既ニ近日御国人数も通行候処、右次第通路拒絕之御取扱、差当り当惑之至、元來何様之故を以右次第之儀ニ被及候哉、一先役筋江引合、埒明兼候模様ニ候ハ、美濃守齊様江遂拜謁相願候含ニテ差越、即彼藩篠原幾平と申者江面会、委細談判ニ相及候処、全体於彼方近日出陣之筈、左候得ハ夥敷人馬入用付、一往諸藩之御継立相断候次第ニテ、別ニ子細無之旨返答、左候ハ薩州出勢人数、最早追々肥・筑之間ニ参掛り候処、前以一往之御挨拶も無之行形、御断と申ては実ニ進退相究り候次第、左様候ては第一

朝暮江奉対、御命令之日限も相逃、無勿体事候趣、委曲及説得置申候、然処其通差当り御迷惑相掛候てハ不相濟次第御座候付、屹と重役江も申聞、是非御国人数は、速ニ御通行之御便利宜キ様取計可申と之返詞承届候、左候て粮米且薪之儀は、蘆屋在营中不自由無之様及相談候処、是は素より御安キ事故、聊御案しニ不及様、早速郡方下役共出役為致、御用弁可為仕と之返答

ニ御座候、

一御国蒸氣船三艘、一昨三日夕方福岡沖江碇泊、其日私ニも幸福岡江参合候付、即小舟より乗出し、副惣督島津主殿久壽并其他出軍諸役々江面会事情承候処、兎角福岡より先キ江ハ難差越旨水主共申出、依之是より都て陸行之外無之と之評議ニ候旨承得、然処福岡より蘆屋迄は直道とハ乍申、大凡拾壹里余之路程、急速之通行手配可難調存し、福岡湊之船頭共招呼、内々蘆屋通船之難易相尋候処、随分被差越と之趣申出候付、是以彼地案内能存し候水夫五六人雇入、海路案内ニいたし、何れ共蘆屋迄廻船之方便利可宜申談、右篠原幾平江水夫御借シ給度段も申入置候、

一右彼是於福岡談判相及置、返詞之儀ハ松方助左衛門正堀平右衛門兩人相残り、決定之処承届、罷帰候様申談、右篠原江も松方・堀之両士姓名申入置、御返詞之儀は此者共江被申聞給度、委細申入置、私ニは早速発足、蘆屋江馳参候処大混雑、宿割は兎も角も相運居候得共、何分賄方之手数毛頭無之、田中治右衛門ニも別て当惑仕居候付、いまた御伺ハ不申上候得共、差当り無致方、豊前平松之方江乍即分隊之筋ニいたす外之間敷、因

茲島津隼人<sup>久</sup>一陣諸郷人数、并御城下二組丈ハ、平松之

方江繰入、左候て惣督并御家老御着之上、何れ共又御

処置可相付奉存、乍不成合私当座見切を以、右人数丈

ハ平松之方江着陣之手配ニ相及置申候、無左候ては着

涯食糧焚出シ之処全無之、不得已右通取計ニ相及申候

間、左様御聞取可被下候、自然御前之御都合は、乍恐

可然御執成奉願候、

一越前公いまた九州御渡海無之、近日中ニハ御着可相成

と之評判ニ御座候、諸藩も追々繰出之体、乍然拾巻日

限之惣揃ハ、些六ヶ敷可有之被存申候、此節之出軍は

御国人数真先ニて、却て近国之面々は相後れ、大ニ都

合宜く勢ひ之事ニ御座候、

一於大坂去月廿一日御軍議、当月十一日惣揃ニて、十八

日打入之御内定、其内廿六日藝州江長州家老御呼出シ

ニて、幕役より右之趣御達しニ相成筈之由、熊本之飛

脚相咄候旨小倉村上銀右衛門より申出候、

右通手配仕置、只今又小倉江差越申候、太分今日は

副惣督蘆屋御着陣可相成、左候ハ、飛脚御差立相成

候半奉存、大抵是迄之形行匆々書認置差上申候、尚

此末之形勢ハ、又追々可申上候、恐惶謹言、

十一月五日

一蔵様<sup>大久保</sup>利通

黒田嘉右衛門<sup>綱清</sup>

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

四九一 小松帯刀報告

於其御地

上々様御揃御機嫌克被為入、恐悅御同慶奉存候、爰

許何そ相替候事も無御座候、征長期限等之義は、先便

申越候通、此方人数も為応援被差出候段ハ、御問合申

置候通ニて、去月廿九日御殿御書院より、御敷台ニて

<sup>京師二本</sup>惣勢江、出陣之御祝として御酒御膳迄被成下、

物主以上江は備後<sup>忠隆</sup>殿より御盃とも被成下、翌一日

辰之上刻御邸中稻荷社江御神楽、備後殿も御參詣、

惣勢參詣御敷台ニて惣勢御暇乞、其より行軍、乾御門ヨ

リ繰入、公家門前通、南門ニて惣勢遙拜、境町御門ヨ

リ二條通東洞院、竹田街道伏見と行軍ニ相成候、尤前

以より軍装、九門内通南門遙拜之事共相願置候処、御

免ニ相成居、旁都合能九ツ時分ニ伏見江着、直様淀川

下りニて、浪花江も四ツ過着舟等ニ相成候由、備後殿

ニも南門前ニ御出ニて、行軍御見物、夫より賀茂下上

江出陣之祈願として御參詣相成、惣勢も進立、軍装も

此節ハ殊之外立派ニテ、旁能キ都合ニ御座候、浪花ニても何辺都合克、三日早天ニ乗船、平和之天氣ニテ出船相成候由、旁上都合御座候、昨日は備後殿ニも八幡江御参詣ニテ、拙者ニも御同伴申上候、且長州事情并惣督軍配等之義は、大坂より西郷吉之助申上越候由、其後何そ相替候条も無御座候、おのつから其御方よりも人数御差出為有之筈、御出陣先江、此方出陣方より御曳合可申上賦御座候間、旁御都合可宜と相考申候、吉川より浪花迄使者差立候由、伊地知正治より之書面差上申候間、別段不申越候、先々好キ向能キ向トハ、謝罪ヲ云フ乎ニ相成御互ニ大慶いたし候、然処惣督之所は前後所置振も十分心得相成居候得共、何分関東之処三才之童子迄も命ヲ絶と申様な心得善史ノ議断スル処ハ大體父子死一等ヲ減シ親藩へ終身幽閉、家藩モ隠居減祿、暴臣數百人悉ク斬罪魁首等ノ処分云々ナリシト云フ有之由、左候時ハもふハ天下之乱ニ可相成候間、旁長州之事情もくわしく申込候方可然と之事ニテ、高崎いせ伊勢ノ略正風旧名 関東江下向いたし申候、大樹公御親將軍出馬ハ、全テも、惚勢切掛ヲ期限ニいたし、虚言ナリシト云フ候、御出馬相成と之事、矢張遅寢ニ相成向ニ御座候、海江田も未帰京不致候得共、もふハ不日ニ罷上り候半と相待居申候、左候ハ、詳細幕之内情旁可相分候、其上ハ早

々申上候、爰許ニても段々流説多々御座候得共、例之通依て出る所も可有之、突留候義更ニ無御座候、併水藩近比多人數出京、何欵相企居候向ニ被聞申候、折角探索もいたし置候得共未相分不申候、一向趣意分兼候、

御所向ニテは何そ別段之事柄も無之、先々無事ニ御座候、中川宮御改名賀陽宮御縁組島津圖書殿兼妹懸アリ 宍条、旁細事井上大江申合置候間、当人より御聞取可被成候、御屋敷中静謐、去ル三日ニは岡崎ニおひて、一陣訓練共御座候、毎日程御屋敷ニテ訓練共ニ御座候、出軍跡之事ニテ一向御手当向嚴重ニ有之度と之事ニテ、取締等念入申渡事ニ御座候、

一守衛江被差登候御城下物主、此内より少々病氣有之、今程快氣之程合も無寛束、一役之事ニテ差支ニも相成候間、孰レ交代ニても可被仰付義と相考申候、然処右御城下人数ハ、御手当被仰付置候て、直様出立詰之心得も無之、其上物主組ニテ被曳列候間、最早七月十九日之一戦も相勤、皆々功勞も有之事候間、御城下人数は、当年中欵来正月方迄ニハ交代被仰付度相考申候、おのつから御家老方江も問合申越候間、可然御談し可被成候、交代被仰付候節は、組ニかゝわらず御人撰ニ



て、被差出候様有之度御座候、

一一橋公之所矢張御引込ニテ、何事も關係無之向ニ御座候、併間々参 内等は有之申候一橋公ハ幕吏中ニ據察ヲ受ケテラレ職ニ望アルノ脱類リ、ニ起レルカ故如斯タルハ年久シ、中ニモ近頃ハ將軍

一山階宮江最上富澤星栗毛、

中将様御滞京中ニ被進相成候得共、右御馬ハ御手ニ不

被叶候間、市成月毛駒ニ繰替被遊度、無抛御沙汰ニ付、

奉伺候上ニ御答可申上筈候得共、御差急キ之事ニテ、

先夫形ニ御繰替置被遊候て可宜と申上置候間、其段御

申上置可被成候、外ニ

思召御座候ハ、何分可被申越候、

右之形行申越候、形勢事情詳細大和上井江申含越候間、

御聞取達

貴聞候義共、可然御執計可被成候、此旨御内用を以申

越候、以上、

霜月六日

大久保一藏殿利通

菱田傳兵衛殿

小松帶刀清廉

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

四九二 諸大名參勤妻子在府復旧云云永田大野ノ

書翰

貴翰拜見仕候、如命追テ寒冷相催候処、弥御清福被為涉

奉賀候、シカレハ今般御大名様方等御參勤之刻、前々之

通被仰出、且御妻子様方等当地御呼寄被成候趣被 仰渡

候ニ付テハ、此方様ニテ奥方様直ニ御出府之御積ニ候哉、

今度長州御征伐被蒙 仰候ニ付テハ、御成功之上御出府

之御積ニ御座候哉、左候テ若々御成功之上御出府之御取

調ニ御座候テ、形行一通ノ御届御用番様江被 仰出候ニ

テハ無御座哉、右条々御承知被成度、御委細御紙表之趣

奉存承候、右ハ未タ御国元ヨリ何共不被仰越候得共、イ

ツレカ長州御征伐御成功之上ナラテハ、御出府御六ヶ敷

義卜相考申候、右之趣一ト通御用番様江御届之義ハ、未

タ取調中ニ付、御答仕兼申候、イツレ治定次第從是可申

上候、右趣御承知可被下候、此段貴酬迄、匆々頓首、

十一月九日

永田

岩元様

大野

新納様

四九三 銅錢佃騰貴藩達

銅錢屯文二付

代錢四文

右吟味之訊有之、今日ヨリ御蔵入払、奥書略ス、

十一月十一日

久遠式部川上

四九四 伴勝三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

(蘆屋陣中ニ於テ)

尊書謹テ奉拜誦候、過刻ハ御繁用中ニ参上、御妨申上  
恐縮之至奉存候、然ハ其節御相談之次第、猶又御賢考  
被下候処、御尊藩之儀ハ御尊示之通被為隨 (台之)命、  
萩口へ御押寄御決定之外無御座候へ共、弊藩ニテハ蒸  
氣船モ数多無御座、海路之仕寄、実以難波之段深々御  
察被下候ニ付、幸御同藩様御中ニ越藩御知己之御方御  
座候間、明日一先弊藩之内情無余義子細被仰籠、御尽  
力御周旋可被下候間、否之返詞御座候迄滞留仕間敷哉  
之旨、委々曲々拝承仕候、先ツ以御懇情之段深ク奉感  
戴候、御周旋ニテ相叶候儀ニ御座候ハ、実ニ無此上  
幸甚之義ニ御座候へハ、怖入候儀ニ候へトモ、何卒宜

敷御周旋被下候様御依頼申上候、就テハ否相分候迄ハ  
滞留罷在候様可仕候、且又弊邑へ大略ノ形勢申越候儀  
ハ尚勘考之上決定可仕、孰レ明日拜鳳縷々可奉恭謝候  
へ共、大略貴報申上度、早々已上、

十一月十一日

伴 勝三郎

拝答

黒田嘉右衛門様

四九五 大山格之助綱信書ノ略

前文略ス、当地ノ形勢追々御聞及被為在候半、御国元ノ  
人数モ疾ク惣着陣、然ル処既ニ長賊所置ノ儀殊之外迅  
速ニ相決シ、一昨日十二日三家老誅伐ニテ、今十三日当地  
草津ニ於テ三人ノ首級ヲ携へ吉川経世監物出頭、御目付戸  
川鉦三郎内実驗致シ、来ル十六日尾州総督廣島ニ於ヒ  
テ本実驗ノ式取行ヒノ賦ニ御座候、右次第ニテ巨魁ノ  
輩悉ク誅殺相成り、先ツハ平定ノ姿ニテ、此上ハ戦ハ  
無之凱陣モ不遠事ニ可有之、何レ拝顔事情御直話可申  
上候、今日蒸氣船翔鳳丸出帆ニ付キ、匆々以下略ス、

十一月十三日

大山百拜

四九六 酒井十之丞ヨリ黒田嘉右衛門へ軍議并

攻入期日云云書翰

大略、過刻ハ御懇尋被下辱奉拜謝候、其節御内話申上候明日御軍議之儀、明日之処ハ相延ヒ候ニ付、十八日期限ノ儀モ急度見込付兼申候、御話申上候事故、心得迄ニ得御意申候、早々此事而已申上度如是御座候、已上、

十一月十四日

酒井十之丞(忠通 福井藩士)

堀平右衛門様

黒田嘉右衛門様

四九七 西郷隆盛報告

先度吉井幸輔(友妻)・奈良原幸五郎ヨリ、当表之形行御聞取相成候半、爾後去ル十一月十日長州家老草津駅迄御呼出ニテ、御討伐之儀御達相成候処、昨十四日福原越後(元通)・國司信濃(親徳)益田右衛門介三人之首級差出、嚴科ニ取行候由ニテ、直様御実験之式モ相濟候、就テハ恭順之道ヲ以伏罪之筋相立、決テ官軍へ不奉刃向段申出、尚又吉川監物ヨリ歎願愁訴仕候ニ付、御軍門へ罷出候儀御免被下度、

別紙通願出御免相成候、右ニ付攻口期限被召延卜之事

ニテ、尾州藩ヨリ兩人其元へ被差越候ニ付、蒸氣船ヨリ早目相達候処、取計吳候様長谷川総藏(惣)ヨリ承候ニ付、

正治(伊地)被差越候間、御聞取可給候、尤期日御延引之儀ハ、御達不相成候得共、右兩人ヨリ其元參集之諸藩

へハ御達可給候、何分吉川之尽力ニテ今日迄之時機ニ相成申候、細事ハ正治ヨリ御聞取之上、御而殿様へ被

申上候儀共、可然様御取計可給候、此段御掛合ニ及候、以上、

十一月十五日

大島三右衛門(舊名)

大久保一藏(毒入旗津方)殿

大久保一藏殿

四九八 伴勝三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書状

十一月十四日之尊書拜見仕候、先以弥御安寧被為涉大慶不斜奉存候、陳ハ御依頼申上置候一条、御同藩様方御与々御周旋御尽力被下候処、迎モ越藩ニテ指揮相整兼候趣、縷々御紙表拜承仕候、ケ様迄御周旋被下候段ハ、兎角陳謝可仕様モ無御座候、重々奉感戴候、依之御尊藩ハ其砌御内話之通御決議之由、弊藩之義モ、小生帰着之砌ハ種々評議中ニテ、尊旨之趣申聞候ニ付、

唯々御左右御待申罷在度、自然相整候節ハ、御尊藩  
へ御相談申、隨便宜押寄セ候外無之卜大概評決罷在候  
付、御状之趣承知仕候へハ、定テ右ノ処へ決議卜相心  
得申候、夫ニ付唯々当惑ハ船ノ一件ニ御座候、近々東  
西ニテ才覚罷在候へトモ、相整候儀無覚束、痛心此事  
ニ御座候、既ニ家老岸相摸、今夕当リ此表へ下着仕候  
筈ニ付、尚同人所存可有御座、孰レニ御相談可申上筋  
モ可有御座候間、御含置被下度奉存候、右之趣何欵之  
御礼旁参上仕候処、蘆屋表御出張中之由ニテ空敷引取  
申候、依之以書中大略御返報申上留候、尚拜謁可奉干  
謝候、恐惶再拜、

十一月十六日

伴 勝三郎

黒田嘉右衛門様

#### 四九九 中津藩菅沼ヨリ黒田へ書翰

尚以御端書之趣、是又逐一拜承仕候、御命日間モ無  
之、最早致方モ無御座候、唯々乍此上万事宜御依頼  
申上候、

以手紙啓上仕候、追日寒氣相加里候処、先以倍御勇健  
被成御座珍重ニ奉存候、扱先日ハ罷出、種々蒙御懇談

辱奉多謝候、小生之空談尽失敬深恐縮仕候、其節御話  
有之候中原先生ハ、既ニ御着陣ニ相成候哉、御様子相  
伺度、且又十八日期限之処ハ如何之御模様ヤ、尊藩之  
御備ハ最早北海へ御繰出ニ相成候ヤ、是又乍略義御様  
子御尋申上度、先之御厚礼申上度、旁可得貴意如此ニ  
御座候、以上、

十一月十六日

中津藩

菅沼新五右衛門

薩州様御藩中ニテ

黒田嘉右衛門様

#### 五〇〇 小松帯刀ヨリ島津主殿外二人へ書翰

一橋様拜謁御都合之儀、昨日申上越候通、川口迄被遊  
御廻船候得共、風并悪鋪、海陸之通船モ無之、拙者儀  
モ天保山へ出張居候処、昨夜半過兵庫之様御乗戻為相  
成筋ニ候間、昼時分迄ニ当所へ見合、拙モ今日中又  
御廻船御上陸之天氣合無之候ハ、直様兵庫之様差越、  
同処ニテ拜謁、御用済早々帰京之賦ニ候、尤モ当所へ  
公役人御船手人数ハ勿論、一橋様御供方人数之儀モ御

廻船先不相分故、追々当所へ相円リ居候、右形行ヲ以  
申上越候条、被達 御内聴候儀共、宜可被取計候、此  
段モ申越候、以上、

十一月十七日

小松帶刀

島津主殿殿

大坂安治川口

伊集院平治殿

大久保一藏殿

五〇一 島津主殿ヨリ市來廣貫へ蘆屋陣中ヨリノ

書翰

十一月十九日副總督島津主殿久市來廣貫へ書信

前文略ス倍當蘆屋へ着陣ノ形勢左ニ概略申上候、出軍前  
評議、又ハ朝暮ヨリ達シノ趣ニ依リ、此方人数ハ萩城  
へ海陸両手ニ押入りノ賦候処、着陣ノ上評議ニ及候処、  
萩ハ北向ケノ地ニテ、冬中北風強ク、容易ニ船ヲ近付  
ケ候事不叶、殊ニ菊ヶ濱ト云フ所ニ台場ヲ設ケ、大小  
三拾門程備へ、此レハ外国船ニ備候由、ケ様ノ地形ニ  
候間、古軍艦ヤ商売蒸氣船ニテハ勝算無覺束候故、副  
總督越前侯・小倉侯在陣故、黒田嘉右衛門其外差越、  
馬關ノ方ニ攻口替ノ相談ニ及候処、小倉・熊本ニ藩へ

先陣被命置候事何分心配ナル向ニテ、段々右二藩ノ情  
実及探偵候処、中々勇ミ立候兵氣ニテ、殊ニ小倉ハ小  
藩ナカラ長州トハ先年来ノ不和、其上攘夷一件ヨリ甚  
シキ不和トナリ、此回ハ虎ノ威ヲ仮リ、先陣ニ攻入ラ  
ント容易ニ先ヲ讓ル向ニ無之、其上田之浦・門司等ノ  
地ハ陣営ノ余地モ無之、然ルニ内々攻口先陣ヲ讓ラレ  
ンヤト相談ニ及候ニ、中々承引ノ勢ニアラス、尤モ關  
へ攻口繰替、且ツ蒸氣船二艘拜借ノ尽力小松帶刀分カへ  
相談ニ及ヒ承諾、於京都西郷吉之助へ談合ニ相成候処、  
西郷云フニハ、是迄当リヲ嫌ハサル薩州兵カ攻口ノ好  
ヲ出シ候テハ、決テ然ルヘカラス、又薩州カ好ヲナシ  
候得ハ、諸藩統々申立候様ニモ可相成トノ趣ニテ止メ  
ニ相成、右ノ段吉井幸介幸輔ノ申述候、黒田等ハ不服ナ  
カラ夫形リニ相成候、然ル処先度新ニ御召抱相成候林  
伊兵衛長防探訪ノ為メ  
抱トナリタリ、藝州ヨリ帰リ来リ承候ニ、萩方ノ  
地形ハ功者ニテ申スニ、冬中ハ萩へ船手ノ攻入ハ容易  
ノコトニ非ラス、因テ萩ヨリ四里程手前ニ、仙崎ト申  
ス所アリ、又ヨシ前名地真向ニ大津ト云フ所アリ、又ヨ  
シ前ノ内丁度浦、又馬關ヨリ下ノ方ニ安岡ト云フ所ア  
リ、此所ニ天氣見合セ船ヲ付候ハ可然トテ予定致シ、

又幸ニハ丁度浦ト云フ所ニ、毛利孫四郎ト云正論家アリ、益田等ノ為メニ退ケラレタル人ノ由、此人元來慷慨家ノ由、是ヲ諭シテ順逆ノ道ヲ以テシ、降伏シ謝罪ノ道ヲ為立候密議ニモ及申候、

一中原猶介(高野)豊瑞丸ヨリ着陣致シ、旁意見ヲ問ヒ相働キ可申候間、御懸念被下間敷候、

一当所家老小宮民部ト申人ヨリ内報ニ、今日 毛利左京(元周)亮ヨリ、越前本宮へ使者差出度旨願出候ニ付、免許相

成り候、定テ悔罪嘆訴ノ為トノ趣ニ候、黒田・種子島乘左衛門・中原・三雲藤一等モ参リ居、之ヲ承リ、未明黒田ハ、越前側用人酒井十之丞へ面会、事由可承賦ニ候、果シテ謝罪降伏ニ相違有之間敷候、

一昨日ハ長崎ノ方ヨリ英国軍艦一艘、上方へ向テ通航致候、又藝州ヨリ伊地知正治并尾州総督ヨリノ使者、蒸気船翔鳳丸ヨリ田之浦へ着、碇泊致居候処、右英艦端舟ヲ以テ三四人参リ、長州ノ形勢攻入りノ事トモ承リ、長州ハ此通ナルヘシト、頭ヲ低ケテ手ヲ合セ笑ヒ候由、又昨日ハ蘆屋ノ沖ニモ夷国蒸気船一艘相見得、半日程漂ヒ居、馬關ノ方ニ去リ、此等ハ形勢ヲ見ニ航海致候ナラント申ス事ニ候、

一諸藩士モ毎々來宮、何レモ議論スル所、長州謝罪ストモ萩城ハ早ク乗取、其上御所置相付キ度トノ事、越前ノ論ニモ長防ノ内三分ノ二ハ被召揚、京師ノ御支配ニ可致トノ趣、又小倉ノ小宮カ論ニハ、三暴臣ノ首級ハ勿論、三條初四五卿ノ首モ同様有度、大膳父子ハ白衣白馬ニ跨リ、軍門ニ出タル上、死一等ヲ減シ、庶人ニ下スヘシ等ノ事ニ候、

一柳川ハ出軍前久留米へ出軍日限掛合セシニ、返答ニ未タ日限不定、暫時間アルヘシトノ事ニテ見合居候処、其次ノ日繰出シ柳川へハ何ノ打合モ不致、因テ柳川ハ大ニ怒リ隣国ノ好モ無之、何レ末大議論ニ及ヒ、謝罪不申ニ於テハ、臨機ノ事ニ及ヘシトノ勢ニ候、又熊本ニハ出軍ニ付、先觸ヲ以テ人馬ノ手当差越候処、返事ハ先觸ニ張札ヲ以テ、長州征伐ニ付、通行ノ人へハ人馬差立、御断リトノ由達シノ趣有之、差向ノ事ニテ、多人數行懸リノ場ニテ大混雜ニ及ヒ、同駅へ無滞リ候由、俄ニ国元ヨリ人馬呼ヒ寄セ通行致由、此事ヨリシテ、無事帰陣ノ時ハ福岡へ押掛、趣意札問可致ト申居、段々同志喧嘩ノ向モ有之、可笑次第ニ候、

一前文通り長州降伏ノ向ニテ、兵士中ハ大ニ力ヲ落シ、

見込相違セリト沸々申シ居候、無事ナルハ好キ事ハ勿論ニ候得共、適々茲迄ハルハ出軍致、一発モ放サス引取ル事ニハ興モナク、人々ニ長州話致シ候言詞モ恥ケ敷シキ心持ニ候、何レ遠カラス芽出度拜顔、彼是御細話ニ可及、以下略ス、

十一月十九日

島津主殿

小倉ヨリ発

五〇二 木場直右衛門ヨリ大久保一蔵へ書翰

大久保一蔵様

木場直右衛門

尊下

一筆啓上仕候、其後御動静不奉窺候処、弥御壮健御滞坂、御腫物も日々御快方ニ赴候半と奉大慶候、隨て爰元静謐、次ニ私事無異相勤候間、乍憚御放意可被成下候、然は御下坂之由承候故、罷出候得は、最早御発途後にて残念奉存候、御立後内田君ト一夜争ひ申候、七八番も争候内ニ番負申候、御機嫌あしく御笑察可被下候、貴所様於大坂税所氏ト御稽古被成候ハ、御帰京比は余程御出精可相成ト、内夷御憂苦ニ御座候、乍然ソロソロ不意内稽古いたし置、御帰京之上一会相

楽居申候、御地何様御座候哉、爰元いまた雪気晴上り不申、矢張少々もバラハいたし、寒サ中々難堪御座候、乍憚折角御加養、早々御帰京之程奉待上候、先々御伺旁為可申上如此御座候、恐惶謹言、

十一月廿一日

木場直右衛門〔朱〕  
旧名

大久保一蔵様

侍史

〔大久保利謙氏所藏本にて校訂〕

五〇三 本藩出軍各隊へ達

五〇三ノ一

脱走三條實美初五人請取方之儀ハ、先日申達置候通りニテ、自然於筑前侯御請取方難行届、御人数被差出時機ニ成立候ハ、小倉在陣先鋒隊ヨリ速ニ下ノ關へ押渡、引続爰許在陣人数順々繰出、勢州出軍人数ノ儀ハ救応隊ニテ被差出賦ニ候条、各其心得可有之候、猶其節ニ至リ可致差図候事、

右ハ蘆屋ニヲイテ陣中ニ御達ニ被成候、其元其元トハ若松在陣

在陣之面々へモ申渡候事、

十一月廿一日

喜入攝津久高

五〇三ノ二  
同二十日出局

朝、薩藩吉井中助・關八郎、紀藩岩橋鐵助・大島友之〔正朝〕  
〔九州藩士〕 允来ル、急務并密議ヲ聞ク、

○太宮ヨリ金川〔神奈川〕へ揚子江船来ル告アリ、

○吉中子云、御上洛之議大城炎上ニテ遅緩ニ流レム、

マタ諸有司鎖港ヲ為シテ、後 御上登可然ト云モノ、  
大抵議論者ノ説皆是ナリ、極密ニ周旋セムニハ、今大  
城炎上、鎖ノ決談ニ及ハ、必ラス事機ニヨツテハ一  
戦モ知ルヘカラス、此炎上ニ付テハ暫ク御猶予アリ、速  
ニ御上洛アルヘキ旨 勅アラハ、如何此周旋、若薩ニ  
テ為コト他ニ漏レナハ、必定行ハルヘカラス、密ニ小  
子ニ告ケ、其議如何ヲ問フト、

### 五〇四 三暴臣首級実檢之藩達

毛利大膳父子伏罪、三暴臣ノ首級備実檢候由、依之攻  
掛期限ノ儀重テ御沙汰可有之旨、別紙之通從 尾州候  
御達被成候間、各承知可被致候、右ニ付テハ以後ノ御  
所置モ有之、イツレ攻掛期限等ノ儀被 仰出ニテ可有  
之候条、一左右次第重テ可相達候付、其要意聊無緩疎  
可相心得事、

十一月二十日

攝津

写

一毛利大膳父子事、伏罪ノ姿モ相頭候付、当月十八日攻  
掛期限ノ儀、重テ一左右相達候迄、攻掛懸可被見合事、

元治元年十一月十四日

〔徳川慶勝〕  
尾張前大納言

### 五〇五 御兩殿様御親諭

元治元年十一月廿一日、表御休息所地震ノ間ト唱候御  
閉室へ被為召、

茂久公並ニ国父久光公御揃、御膝下へ被為呼、此ノ時

前ノ派戦  
争以來 人心不穩御配慮ニ付、親敷御沙汰相成候ハ、国

家統御ノ道失候ニ付テハ、此ノ末国家ニ致尽力、吾等

致安堵候様精々可尽思慮、尤モ国事御委任ノ旨致承知、

負荷ノ任ニ不当ニ候得共、嚴命敢不辭拜戴請仕退去ス、

### 五〇六 西郷隆盛ヨリ大久保一蔵へ与ル書

封筒ナシ

御兩殿様益御機嫌能被遊御座、恐悦之御義奉存候、陳

ハ長征之一条、吉川辺之情態、奈良原帰府詳悉御聞取

被下候半、其後三家老之首級御実檢も相濟、參謀之徒

四人〔大戸佐馬介・中村九郎・佐久間佐兵衛・竹内正兵衛〕断斬ニ相行ヒ、御控〔尾州〕之条理も相

立、暫攻懸之処、御猶予と相成、五卿并浮浪之輩所置



を付、其上如何様之罪をも可奉待段、末藩迄も書付を以申出、其上山口之新城破却を被命、相濟候上兵を解かる筋ニ相決シ候折柄、暴徒蜂起し、五卿を押し暴動之様子相知れ、総督府ニおひても区々之議論故、いつれ此上ハ五藩江御預と申もの被仰出、得と五卿江説得を被命、其上承引無之候へハ、人事を被尽候義故、其上ハ打破候外無之、徒ニ長評議ニ日を送寒中ニ兵をさらし候義、天下之物笑と可相成、誠ニ濟ぬ次第と、事を分け理ヲ尽して申立候処、急速相連、いつれ五卿浮浪之輩江ハ、私踏込候て利害得失を論シ、納得出来候様、是迄ハ可尽と相決居候処、筑前藩喜多岡勇平と申者、廣島表江參、此説得ハ筑藩江御委任相成候へハ、差はまりて尽力可致、十七八ハやり付可申との事故、早速督府江申込、是非是迄之処ハ、人事を尽され度、一体説得之処ハ、筑藩江御委任之処、御当然之義と建言仕候て、都て申立候通相連、別紙之通御達相成申候故、去ル廿一日晚廣嶋出帆仕、廿三日昼時分小倉江着仕申候、自然廣嶋江在陣之人数も、蘆屋江合シ可申賦ニて、蒸氣船廣嶋迄差遣手筈仕置之事共ニて御座候、只今之処ニてハ、激党も千人位ハ有之との趣ニ相聞得、

長府之方江寄候との説も御座候へ共、虚実難分、小倉ニてハ、長府より歎訴嗣將江申立候由と相聞れ申候、萩之政府・岩國・徳山此三所ニおひてハ、三人之首を刎候故、決て激党ニ与し候訳ニてハ無之、慥ニ暴正引分候故、制シ安き事ニ罷成申候、肥後・越前辺之処開城束縛と申迄不参候てハ、不相濟との議論、頻ニ起居候処、得と情実之次第も申述、此義ハ戦矢尽て之極つまり之事と申もの、いまた戦も不致候て、極之手を致そふとハ以之外之事、右様之御見留ニ候ハ、速ニ攻懸候外無之と、段々世態紛擾之処より列藩費弊之次第、夫より又々官軍ニも混雜到来いたし、頓と征伐之御成功遂させられざる場ニ成立可申事歟も難計、委敷前後之処申述候処、而藩共ニ同意いたし、小倉表ニおひても、議論も一致相成、大慶之事ニ御座候、此上ハ筑藩説得之一左右相待、事破れ候ハ、可打碎賦ニ相決候間、此上ハ速ニ相連、不遠兵を解き候場合ニ相成可申、千位之激党ハ一時ニ打破可申候付、左様御得心可被下候、此旨大略形行迄申上候、謹言、

十一月廿五日

西郷吉之助

大久保一蔵様

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

五〇七 海江田武次ヨリ大久保一蔵へ書翰

國元

京都より

大久保一蔵様

海江田武次

尚々、時分柄折角御自愛、御痛無御座よふ折入奉存候、

一筆啓上仕候、弥御堅栄可被成御座、大慶御儀奉存候、  
下拙事も無事相勤罷在申候間、乍憚御休意思召可被下  
候、しかれハ江戸表云々の義、大意ながら別冊を以申  
上候間、前後通兼候得共、御推覽被下度奉存候、其後  
御進発之義ハ、弥増御困循之姿ニ相見得申候、會津杯  
ニおひてハ、彼是御職分之事ニも有之、御直書等度々  
被遣、精々尽力も御座候得共、無益之事ニ相成、此上  
ハ、會津侯御下東ニ相成、これきりの御尽力可被成外  
無之杯と、會の臣下決心の様子にて、如何と私江も相  
断候故、其儀ハ御不道意云々申述候得ハ、會津の身と  
してハ外ニ見込も無之、実に赤面之至、如何いたし候  
ハ、宜敷哉杯と、甚歎息憤怒ニ御座候、 朝廷又ハ一  
橋公杯ニおひても、当分ハ手を空ふして、御受も被為不脱カ  
在候御様子ニ御座候、長征之方ハ、吉川杯誠ニ深切成

志故、能き向ニ相成、これハ実ニ御同慶奉存候、三家  
老首級も、去ル十四日藝の國大寺ニおひて、成瀬隼人正徳、大山藩  
正又ハ大小監察刃にて、内実檢有之候哉ニ相聞へ、何

も実事之義西郷君などより被申上候半と相考候故、別  
段不申上候、此御地にてハ何も相変候事無之、至て鎮  
靜にて、当分ハ諸藩江信義の交りともいたしおり申位  
ニ御座候、別冊云々ニ付てハ、御名も無抛さし出候事  
故、恐入候義ハ可然様御頼申上候、 天璋院様御つほね  
よりの手紙巻通さし上申候間、御熟覽可被下候、 御進  
發一件云々相見得候得共、内実ハ、 天璋院様ニも 御  
進發被為在候てハ、少し御入り之御様子ニも被伺申候、  
近比別段相変候義も無御座候、追々可申上候、敬白、  
子十一月廿六日 海江田武次  
大久保一蔵様 〔大久保利謙氏所藏本にて校訂〕

五〇八 総督尾州侯ヨリ廻達

毛利大膳儀、追々謝罪之運相成候付、此上之御処置如  
何相立、御為メ可相成哉承度候間、重臣之内國論専ラ  
对方行届候者、来月五日迄ニ廣島表江可被差出候事、  
但本文見込之趣、直ニ被申達度向ハ、持口之兵備不懈

様申付、自身之隊ニテ廣島表江早速可被申達候事、

十一月 惣督

右尾張前大納言殿使者青木齊宮、十一月二十七日妙行

寺宿宮江三島彌兵衛通應同伴面会、別紙手扣相渡候付、蘆

屋於陣營直ニ以飛脚差送候事、

右達ニ付島津主殿ヨリ惣督へ上申、

昨二十六日尾張總督府ヨリ御使者青木齊宮到来、今朝

当宿陣江引請拙者及応接候処、別紙ノ通御書付被相渡、

猶又右ヨリ演説ニ及候趣ハ、毛利大膳儀此節ニ至リ弥

々悔悟之美効モ相頭、謝罪降伏之運ニ可相及候ニ付、

此後長藩御処置振之一条ニ就テハ、寡君儀モ別テ被及

心配候次第ニ候、就テハ逐一幕府江御問越ニ相成、御

裁議ヲ被相待遇訳合モ可有之候得共、何分遠路懸隔候

地ニテ、致急決候儀不相調、機會取後候儀モ可有之事

ニ候、右ニ付以来之御処置振リニ付、於諸藩可然存寄

之儀モ有之候ハ可及建白、總督御直ニ質問モ可被為在

事件モ可有之候ニ付、当時重臣之内、因論情合会得イ

タシ居候モノ、廣島表江参向可有之、修理大夫様御出

張被為在、御親論ニ被為及儀ニ可有之候得共、此義ハ

不容易訳合ニ付、前論通時論致貫徹、御質問之事御応

答相整候重臣之内、来月五日迄彼表江出張可有之トノ

趣ニ候、就テハ右御書付ハ勿論、御演舌之趣、早速此方

總督方江相達候様可致旨申答置候、就テハ於是許猶又

評議ニ涉リ候処、何レノ筋最初ヨリ事機貫徹致候者致

一参向、可然訳合ニ就テハ、西郷吉之助重臣之場ニテ参

向致如何可有之哉、尤三島彌兵衛儀モ右ノ御使者同伴

ニテ廣島表江到着、於彼方モ右吉之助出張ニ相成可然

トノ内評ニ御座候由、乍然此儀何分不容易儀ニテ、ヲ

ノツカラ於其元御吟味モ可有之賦ニテ、右ハ別テ迅速

ニ相運ヒ候様ニトノ趣ニ御座候間、何レモ迅速ニ御評

決相成度、尤船都合モ折柄差支候ニ付、此元江廻舟次

第直様出張有之候間、何分ニモ御決定有之度候、右件

為御心得早々御懸合申上候、以上、

子十一月二十七日

島津主殿久

喜入攝津殿久

五〇九 長州征討ノ軍令 (藩令)

陣營

一本營へ毎日總督・御家老・副總督・御側役・御軍役奉

行・御小納戸・御目付・御軍賦役、毎日四時ヨリ八ツ時迄出席、左候テ客殿へ出水人数ノ内并総督手人ヨリ繰廻ヲ以、十人ツ、昼夜交代可相詰事、

但御家老座御軍役方・御家老座御用部屋書役ツカ儀ハ、

次ノ間へ可相詰事、

一本營ニハ、御軍役奉行・御目付・御軍賦役間、毎夜一人ツ、可相詰事、

一本營門外へ番所一ヶ所相調、肝煎与力ノ間一人、足輕兩人ツ、繰廻昼夜可相詰事、

但門出入ノ節、何某組何某ト嚴重名前承届候上可差通、為差知御役場ノ向ハ不及其儀候、

一他国使者本營へ差向參候節ハ、門外へ扣サセ、番人ヨリ役所へ申出、使者ノ依輕重、出迎御使番横目ヨリ応答可致事、

宿陣ノ作法

一御閑札外へ私ニ不可出事、

一本營ヨリ早鐘ノ合図有之節ハ諸隊請次、且相立総勢物主々ノ門内外へ着到、御差図可相待事、

但組々着到ノ届、談合役ヨリ本營詰御軍役奉行・御軍賦役間へ可申出事、

一毎夜二組ツ、請持ニテ、銘々小銃携帯陣營中半時廻リ、昼ハ一組ツ、朝昼夕ト三度相廻リ、異変ノ有無時々御軍役奉行等へ届可申出事、

但昼夜警衛廻方順番張紙ノ通、

一宿陣ノ面々猥ニ外出致間敷候、無抛用向ノ節ハ物主承届免許ノ上、什伍ノ間同道外出可致、罷帰候節モ物主へ届可申出、私ノ夜行屹ト可為無用事、

但配下ノ者役頭ヨリ、家来下人ハ主人ヨリ、猥ニ外出為致間敷候、尤夜行一切差留候、

一火用心ノ儀諸隊可為肝要、万一出火騒動有之節ハ、出水人数直ニ本營へ可馳付、若総督御廻ノ節モ一手ハ先陣、一手ハ可為跡備事、

但諸隊ハ風舞ニ依リ早々火薬等持出、其組一手ニテ守護イタシ、残一手ハ御差図可相待、兼テ火薬廻場等見合置、俄ノ節混雜無之様心掛第一ノ事、

一家陣ノ事候付、猶又律義相嗜、家内ノ者共迷惑不相成様可相心得事、

一御閑札番所ノ儀ハ、与力扈人足輕兩人ツ、昼夜不明様可相勤、不審ノ者通行見受候ハ、留置、御目付・御軍賦役間へ届可申出事、

一他国使者入来候節、番所ニテ承届、使者宿へ可差通事、  
右之通陣中御規則被召建候条、一統嚴重ニ相守、聊等  
閑ノ儀曾テ有之間敷候、此旨総勢へ早々可申渡候、

元治元子十一月

攝津

夜廻順番

一御城下一番組

一同 二番組

一同 三番組

一同 四番組

一同 六番組

一青山弓太郎・野村與八左衛門組

一高城郡

高城

一田布施

一末吉

一國府

一阿多

一帖佐

昼廻順番

朝昼晩

一帖佐

一阿多

一國府

一末吉

一田布施

一高城郡

高城

青山弓太郎・野村與八左衛門組

一御城下六番組

一同 四番組

一同 三番組

一同 二番組

一同 一番組

五二〇 長州征伐ニ付出軍ノ面々武運長久之

御祈願云云

今度長州御征伐ニ付、多人數出軍被仰付候付テハ、

御西殿様深被遊 御高配、厚 思召ヲ以朝敵速ニ致降

伏、出軍人數ノ儀、武運長久有之度トノ為 御祈願、

去ル九日

太守様五社へ被遊 御參詣、霧島山・華尾山・新田宮。  
國府正八幡宮へ、

御兩殿様ヨリ奥向 御代參ヲ以、御祈願被為在候段申  
来、誠ニ以御仁厚ノ至、不容易御事ニテ恐入難有次第  
ニ候条、一統謹テ可奉承知候、此旨早々不洩様陣中へ  
可申渡候、

元治元子十一月

攝津

五一 筑前國蘆屋中ニ布告

〔番号五一〇と同文により削除〕

五二 五卿各藩へ御預ケ達書

〔番号五一六と同文により削除〕

五三 長州御征伐ニ就キ萩表海道先鋒之御受書

長州就御征伐、萩表海路先鋒相動候様御達ノ趣奉畏候  
処、未曾有之逆賊追討之一挙ニ付テハ必勝之利無之、却  
テ御瑕瑾ヲ生候様ニテハ、実ニ難相濟儀ト奉存候、全  
体弊邑之儀精々軍政之手当加指揮候へ共、海軍之備向  
十分届兼候間、攻口之儀心機變勝手次第被 仰付被下  
度奉願候、不容易事件恐入候へ共、

皇国之御大事ニ関リ候場合、前条通無見据儀御請難仕、

不得止此段奉願候、

島津家

御名

五四 黒田嘉右衛門報告

方今天下制御之道不相立、号令区々ニ出テ一定セサル  
所以ハ、イマタ朝幕之間且ハ一橋閣老辺之所猜疑アル  
カ故ナリ、依之我 中将公再御上京遊サレ、根軸基本  
安固ノ道ヲ御尽力被為 在度候、今ノ時ニ当テ外六十  
州ノ侯伯誰モ其任ニ堪候人無之、因テ願クハ 中将公  
御上京於被為 在ハ随テ周旋尽力被成度、熊本良公子  
御含之由、

右ハ肥後藩淺井新九郎・宮川小源太、此節御使トシ  
テ参入之由シニテ、於小川駅邂逅イタシ所聞ナリ、  
一熊本良公子頻ニ御上京之御含ニテ、御国許ヘモ其旨御  
使ヲ以御相談被仰越、且長谷川仁右衛門ヲシテ予メ上  
京ヲ命セラレ、翌五日発足、依時宜関東ヘモ下向、官  
武周旋ノ筈ニ公子御手許ヨリ密命ニ候也、  
右肥後藩山田五次郎ヨリ聞、

一大樹公初諸侯伯此涯京師へ打揃、官武一和之基本相立、

而シテ後討長之師ヲ起シ度被申趣、肥後一般之定論、  
一大樹公御上洛御延引ニ於テハ、当春之如ク諸藩ヨリ各  
使節ヲ差立御催促申上度、御同意ニ於テハ速ニ其人ヲ  
撰ヒ御同行為仕度トノ議論、

一方今瓦解之世態相成候上ハ、九州一定ノ策ヲ定メ、不服  
之國ハ九州中之力ヲ以テ攻撃服從セシメ候様有之度、  
薩・肥・筑之大藩サヘ合体イタシ候ハ、久留米・柳川ノ  
如キ小藩ハ素ヨリ、大藩ニ靡服スル疑アルヘカラス、  
併佐賀獨立福岡長ヘ内応ノ疑念、因テ患ル所ハ只此二  
藩而已トノ説、

一 小倉藩之儀、内実ハ長州之患ヨリモ却テ筑前之後襲ヲ  
疑ヒ恐レ、頻ニ其趣ヲ以熊本ヘ応接之頼有之候由、

一 柳川藩士先達テ熊本ヘ来リ、此節筑前ト同組合ニテ出  
軍之儀ハ甚懸念ナレトモ、幸薩州モ同組合故、夫ヲ力  
ニ先ハ安心イタシ居ルトノ話イタシタル由、

一 小倉応援ノ為熊本ヨリ出張人数、沼田勘解由ヲ大将ト  
シテ凡ニ千人位之由、駅々問屋場ニ於テ聞ケハ、先触  
ニハ二千百六人ト記有之タル由、

右各藩之形勢ヲ觀察シ愚案ヲ加フルニ、熊本ハ遠近之  
情実ヲ探リ大小ノ諸藩ヲ懐ケ、大ニ志ヲ伸ント欲スル

ノ氣味アリ、佐嘉ハ威武ヲ以テ近ク小藩ヲ嚇シ、遠ク  
関東ニ結ヒ、表ニ獨立傍觀ノ形ヲ示シ、裏事變ニ投シ、  
機會ヲ見テ動ント欲スルノ風采アリ、尤ニ藩共國富兵  
強、福岡ハ君公英邁ト雖、惜ラクハ下ニ人材乏シク、  
世態事実ニ暗ク、動モスレハ事機ヲ誤リ諸藩ノ嫌疑ヲ  
受ルノ失アリ、最國風懶惰士氣軟弱、其他久留米・柳  
川以下之小藩ハ固ヨリ確定之國論無之、徒ニ東靡西從  
時勢ニ随テ變遷スルト見ユ、防・長ハ表ニ悔悟謝罪ヲ  
唱、裏猶遠謀ヲ廻ラスニ似タリ、尤関東ヨリノ処置可  
疑可怪事多シトイヘトモ、親シク東行シテ探索ニ涉ラ  
スンハ、其実何共窺得難シ、

黒田

### 五一五 西郷吉之助長州処分建議

一大膳父子落髮退隱清末ヨリ家督之事、

一下之關刃拾万石削リ、暫時豊前・筑前辺ヘ守衛被 仰  
候事、

一上之關・大島ハ藝州ヘ同断之事、

一吉川此節兩國平均ノ功ニテ御直勤被 召出、且本家附  
添被 仰付候事、

一官軍発向之印山口新城破却之事、  
一宮市・三田尻辺長府ヨリ国替被 仰付候カ、或公領ニ

被 召上候事、

右於藝州西郷吉之助ヨリ建議ノ趣ナリ、

五一六 尾州惣督ヨリ蘆屋陣宮へ達

松平修理大夫

去年脱走致、是迄長州江藩在候三條實美初五人之内一人、松平美濃守ヨリ請取可申事、

但右五人之者美濃守長州ヨリ受取方難行届節ハ、細

川越中守・有馬中務大輔・松平肥前守申合、兵力

ヲ以速ニ臨機之所置可有之事、

十一月 (マ) 日

此時長州ニハ正論トモ云 暴論両党分立シ、一兩年來暴論

党勢力アリ、正論党庄倒セラレシニ、暴論党京師敗潰ノ後

倏チ正論党勢ヲ待(俟カ)、吉川等ヲ推揚シ、暴党ヲ庄シ、殊ニ國

司・益田・福原ヲ首トシテ十有名(余脱カ)ノ巨魁ヲ刑シ、其他モ

輕重ノ罪ニ問ハントスルニ至レルカ故、暴党又起リ死力

ヲ竭シテ拮抗セントス、茲ニ於テ三條實美外四名ヲ四藩

熊本・福岡・久留米及ヒ本藩 留米及ヒ本藩 久ニ分幽ノ令下リシカハ、暴徒ハ之レヲ否シ、

殊ニ吉川等之レヲ処スル嚴酷ナルニ忿リ、揺シテ清末ニ

抛リ、復タ為スコトアラント大ニ同志ヲ聚嘯ス、来リ集

ルモノ殆ント一千人、其勢焰甚タ猖獗、大膳父子ヲモ同

シク揺セントスルノ勢形ナルカ故、吉川驚愕措置ノ途ヲ

失フニ至レリ、此事総督府ニ聞ヘシカハ、総督府大ニ驚

キ兵力ヲ以テセンニ決シ、左ノ令ヲ布キタリ、此時西郷

等ハ深く謀ル旨アリテ、吉井友輔等ヲ長州ニ遣シ、吉川

等ニ策ヲ示シ、且ツ暴徒ニ論シテ分幽ヲ熄メ、五卿一同

太宰府ニ転座シ、四藩ノ兵ヲ以テ守護セシムルコト、ナ

レリシ故、漸クニシテ鎮定セリ、此時本藩ノ説得スルニ

アラスンハ、必ス暴徒忿興、遂ニ大師ヲ動シ堆ノ血河ノ

惨状ヲ見ルニ至ルヤ疑ナシ、暴徒ハ実ニ窮鼠ニ等シキ際

ナレハナリ、是レヨリシテ、正・暴ノ二党モ本藩ヲ敵視

スルノ情稍薄ラキタリト云フ、

編者曰、本藩ニ於テ長藩ニ衝ム(衝カ)処アルハ、去ル壬戌ノ

夏国父公初テ上洛セラレ、尊 王ノ大義発揚セラレシ

後、長藩ハ先鞭セラレタルヲ遺憾トシ、種々黠詐ノ術

ヲ以テ妨害シ、或ハ自ラ大權ヲ掌握セント、御親征

大和御幸ヲ矯促シ奉リタル等、枚挙シ得サルノ奸謀ヲ

施シタルニ起因セリ、然リ而シテ長藩ハ遂ニ癸亥八月



十八日堺町門警衛ヲ解カレ、七卿ヲ誘フテ帰国シ、而シテ百方詐謀奸術ヲ尽シ、藩主父子及ヒ七卿ノ冤罪ヲ訴フノ名ヲ藉リ、或ハ勢力ヲ以テ脅闖ノ策ヲ以テ輩下ヲ動かシ、

一鳳輦ヲ下クヘシ、他所ニ遷サントスルノ暴動ニ及ヒ、其罪至重至大普天下容ル、ヘカラサルノ逆賊ニシテ、北條・足利ト同唱スヘキ無道ナル無論ナルカ故、

〔マコ〕  
説シテ討伐ノ大師国境ニ臨ミタリト雖モ、此時ニ当リテ

内外多難、牀ニ迫マリ、加之英・佛・米・蘭ノ四夷連衡シテ馬關ニ迫マリ、先キニ妄拳ノ罪ヲ問ハント、既ニ横濱ニ数艘ノ軍艦ヲ揃ヘタルノ際、或ハ兵庫・大坂ニ開港ヲ逼ル等ノ困難咫尺ニ臨ミ、若シ一步ヲ過ルトキハ国家ノ一大事、恐クモ

皇室ノ動搖ニモ関スル時機ナルカ故、本藩ニ於テハ輕重寛急ヲ考ヘ、此時ニ方リテ宜シク耐忍シ、私忿ヲ去リ、一向ヲ

皇室ノ重ヲ維持センニハ、一小長藩ヲ討シニ砲烟ヲ揚クルヲ喜ハス、吉川等ニ諭シ或ハ暴徒ニ説キ、百方力ヲ竭シテ干戈ヲ動かサルニ至レリ、実ニ危殆ノ時機ナリキ、是ヨリシテ長人ハ、正・暴二党モ大ニ感スル処アリシト

云フ、而シテ幕府ハ是ヨリ不滿トシ、乙丑ノ年ニ至リ再ヒ討征ノ令ヲ布キ、將軍家モ進發セラレタリト雖モ、天下ノ人心之レニ服セス、唯命之レニ従ヒ出軍スルモノ寡ク、本藩ニ於テハ不可ナルヲ建言シ、一卒モ動スコトナシ、然ルニ幕軍ハ長防ノ四境ニ臨ミ屢々戦ヒシニ、捷報一聞セス毎回敗北、進退茲ニ極リシ際、將軍家茂公大坂城中ニ薨セラレ、喪ヲ以テ軍ヲ班シタリ、是ヨリシテ幕威益傾キタリ、実ニ機運ノ傾キタル人力ノ能クスヘキニアラサルノ言宜ナル哉、

五一七 蘆屋陣中布達

長州滞在三條實美初五人之内一人、松平美濃守ヨリ諸取預リ候様、左候テ美濃守受取方難行届節ハ、兵力ヲ以速ニ臨機ノ処置可有之ト之趣、別紙之通從尾州侯御達相成候ニ付、一統承知可被致候、尤御軍配等之儀ハ追テ可相達候条、其心得可有之候事、

十一月

取次

田尻

〔種實〕  
務

此時長州ニ於テハ暴論党六百人余ノ輩五卿ヲ押立、長府ヘ引籠リ、官軍ニ抗セントスル形勢ナルカ故、五藩ニ於

テハ此達書ニ依リテ兵備ヲナシ、福岡藩ノ後援ヲナサン  
トス、

五一八 官軍配兵

官軍配兵左ノ如シ、

九州口

一筑前蘆屋

松平修理大夫手勢

一平松ヨリ鑄物師辺

同隊ノ内

大砲隊中原猶介并島津隼人隊

一山家(鹿)

(慶頼、久留米藩主)  
有馬中務大輔手勢

一黒崎并若松

(黒田奇禰、筑前藩主)  
松平美濃守手勢

一小倉城下田町

(長行、老中格、唐津藩世子)  
小笠原圖書頭手勢

一小倉町

(茂昭、福井藩主)  
松平越前守手勢

一小倉城内

(慶頼、熊本藩主)  
細川越中守手勢

一大里

(貞全、播磨安芸藩主)  
小笠原幸松丸手勢

溝口耕雲齋・長岡監物大小砲隊

細川越中守先手

一門司浦并田之浦

小笠原幸松丸先手

一木屋之瀬

松平肥前守

右総督尾州殿ヨリ列藩へ布達セラレタリ、

右総督尾州殿ヨリ列藩へ布達セラレタリ、

五二九 天賜御剣之御拵書

一螺銅御太刀一腰備州國分寺住助園嘉保月日、但在銘

一御鉾一重金無垢十文字御紋透松皮苔、

一御鍔金無垢分銅形十文字御紋唐草、

一御柄絞白金無垢菊数八ツ、

一但頭へ紫革緒占三ツ、其外金無垢数四ツ、

一御目釘金無垢菊之細工、

一御サヤ梨子地鳳凰蒔絵、

一御袋蜀紅錦、

一箱一桐白木緑生掛金錦十文字、

但御紋付、

近衛忠熙公御染筆、

一御掛物一軸、

御色紀此国ヲ御書出シ、

一一文字風帶紫地金錨角竜之模様、

〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編  
元治元年十二月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」  
(紙数八五枚)の記載あり〕

## 目録

- 江戸在勤市來次十郎報告
- 長防征討出軍伊地知正治届書
- 染川五郎左衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰蘆屋陣中ヨリ
- 大坂東町奉行松平駿河守赴任ノ報
- 小松帯刀報告
- 蘆屋在陣人数賄一件黒田嘉右衛門ヨリ問合
- 三條初請取方等ノ儀筑前へ御達

- 海江田信義ヨリ大久保一蔵へ書翰
- 薩州ヨリ岩國へ使節口上写
- 安田助左衛門日記抄
- 五卿月形洗蔵早川養敬へ依頼状
- 海江田武次ヨリ大久保一蔵江書翰
- 安田助左衛門日記抄
- 総督ヨリ以使者出軍ノ各藩へ通達
- 総督尾州侯ヨリ三條實美以下五名へ達文
- 両御旗本并御先手等ノ諸隊操練
- 常野脱走ノ浮浪登京ノ風分アルニ依リ洛中ノ警衛
- 御城下各所砲台操練
- 番兵各隊操練
- 築波山暴動ノ始末或人通報
- 毛利家所刑ノ届書
- 〔蘆屋陣中ヨリ在陣人数賄一件返書〕
- 物価届書
- 小倉出張吉井幸輔報告
- 柴山良助書牘
- 鹿兒島諏訪神社社司本田三位願書
- 総督尾張殿ヨリ達

黒田嘉右衛門同僚へ贈ル書牘

島津主殿ヨリ島津又六郎へ五卿請取一条之照会

城下士五人組ノ命令

諸郷大砲備一組

諸郷征討軍隊長以上人名

在陣人数へ被下賄料一件

征討軍出発宿泊割

戦地里程

鹿兒宿陣

長崎通信

五二〇 江戸在勤市來次十郎報告番頭兼用人

諸大名參勤之割前々之通前々通トハ壬戌冬改革前從來ヲ云フ被仰出、当年參

勤之分ハ參府候様可致、且嫡子并妻子御呼寄之儀モ被

仰出候ニ付テハ、御并家御并家トハ同ハ格式ヲ云フ勿論、諸国參勤并妻

子引越之儀何様相運候哉、当世体之儀ニモ候間、御留

守居へモ相達手厚ク聞合等申付、事実旁内情之処迄モ

深く探索致シ、形行急キ飛脚ヲ以テ早々可申越、左候

テ其後迎モ兼テ手ヲ付置候、聞合之形行其時々細々可

申越旨御内沙汰承知仕候趣モ有之、此段御内用ヲ以申

越候、已上、

子十月六日

喜入攝津高久

岩下佐次右衛門殿平方

市來次十郎殿業

朱書

本文承知仕、則御留守居へ相達、御并家等聞合候処、

別紙之通返答相達候段申出、外々へモ手ヲ付置候ニ

付、相分次第追々可申旨申出候ニ付、猶又精々手ヲ

付、聞合セ等無手抜イタシ候様相達置候ニ付、相分

リ次第可申上候、別紙相添此旨御返答申上越候条、

太守様 中將様 貴聞ニ被成御達候儀共、何分モ可

被成御取計候、以上、

子十二月二日

市來次十郎殿

喜入攝津殿高久

五二一 長防征討出軍伊地知正治届書

一昨日八ツ過伏見出船仕候処、淀川水勢宜敷、殊ニ無

類之早船ニテ、夜五ツノ太鼓ニハ浪花へ着船、同勢モ

追々其通眺前迄ニ皆揃相成申候、御賄其外之手当事等

向々ニテ分預候故、此節ハ更ニ沸騰之兵士中折節沸騰シ、軍事ノ役員ニ向テ議論ス

ナルコトアリ、元來士氣盛、様子モ無之、仕合之事ニ候、御用心金ナルカ故ニ出ルモノナリ

之儀ハ、諸隊へ御渡付之外、老万両御用意相成居申候、少々無心元存候得共、尚追々便宜モ可有之候故、先ッ其

俣ニ差置申候、朔日<sup>月十二</sup>之夜吉川ヨリ為使者用人兩人

着坂、高崎<sup>六五</sup>へ面会、此中ヨリ御懇情之一礼、且尔後

何様共御差図次第可奉畏、長防ニテモ正義党千余ニ相

及昼夜尽力候故、奸暴人追々微勢之模様、吉川ニモ今ハ

勅諭次第暴賊ニ手ヲ付キ候トモ無差支存候趣、一ト先

岩國へ曳取り奉待公裁候次第、仍テ偏ニ此御方様御指

揮奉願ト之趣ニ御座候由、高崎ヨリ西郷<sup>隆盛</sup>最早下向之

上ハ、此方ニハ別ニ御口合可申儀モ無之ト、是迄之御趣

意申述候処、両使モ十日余之船中ニテ弥惣人数繰出等

之事モ初テ聞取、一人ハ潜坂<sup>大坂へ潜居スルヲ云フ</sup>一人ハ帰国ト相

決シ候由、夫等之細事ハ不日高崎帰路可申上候得共、

全以無此上破竹之御時節ト、窃ニ大慶奉存候、然共是

等之事ハ一同ニハ秘置候様<sup>長州ノ降伏辭罪ハ西郷等カ謀ル旨アリテ、兵端開クニ及ハサルハ、伊地知モ予</sup>

知セリト雖トモ、兵ヲ圍繞ニ隨マシメ、而シテ彼レノ処分ヲ表視シテ後

和平發表セシノ密議ナリシ故、如此密ニ許リタルモノナリ、岩下方平親語、談仕

置候、昨日中大抵御用モ相仕舞候ニ付、只今ヨリ本船

へ乗付候賦ニ手当無残所相調候付、右御届申上度如斯

御座候、恐々敬白、

十二月三日

小松帯刀様

侍史中

伊地知正治

此文中西郷・高崎等吉川ト密談ノ云々ハ、降伏帰順ヲ説論シタル事ニシテ、大兵ヲ彼國境ニ臨シメ、然ル後ニ彼ヨリ謝罪ヲ表セシムルノ計画ナリ、故ニ烈藩ノ兵悉ク各所ニ進軍セシメ、本藩モ筑前蘆屋ニ大兵ヲ出シ、又京師ヨリモ数隊ヲ藝州マテ出サレタリ、此兵ニ參謀トシテ伊地知正治出軍シタリ、

五三二 染川五郎左衛門ヨリ黒田喜右衛門へ書翰

蘆屋陣中ヨリ

猶々諸先生へ宜敷御伝声奉願上候、

花輪二通之内一通御懇情之御存寄、殆心肝ヲ傾拝読仕

候、注文之儀実ハ鎧之下ニ着ル其一ニモ可相成考、筆

ニマカセタル也ケリ、兩日間在テ謂ク、兄必慨氣之報

至ルベシ、爾時ハ軍容ノ一ト返報セヌト案申到来遺憾

矣、シカシ兄ナレハコソ又有憑中ノ交哉ト歎笑ニ及申

候、此地物買実ニ奮激ニ余リアリ、然共御地へハ十ヲ

百、百ヲ千ニ伝ルニハ無別義、御地モ反ハ売切、切レ

売也抔相聞得、却テ当方有心者ハ不審ヲ起シ、コハ諸

藩之富顕者カ、将タ人足類之多ケレハ左モアリヌヘキ

カ、扱ハ伝者ノ誤ナルベシ、互ニ浮言ハ八分ノ処ヲ信可然コソト存申候、一昨日三島氏着、連日来臨、日モ暮安、乍毎々広言御笑ハ左ルコトナガラ、此蘆屋迄ニテハ千里ノ騏足ハ展不申、アワレ三都ノ間ニ出シ度人物哉ト自嘆仕耳、扱近來龍生ヲ聴ニ甲信之法守ニ近く、柴筑前之風ニ乏ク、恐クハ呉子ノ何スレハ伐、何スレハ罰ス言ニ泥ミ、毛唐人ト我薩昔代恩願ノ臣ト同觀セシニヤアランズラン、旧來ノ癖僕面說セハヤトノ愚存ヲ出シ申候、如來意中々手持無沙汰之余、深夜甲冑ト出掛、半時廻、衆ニ異ナレリ、吾カ様御笑察可被下候、先ハ御親切ノ奉復迄、龜毫如此、余ハ奉期後便候、不備、

十二月三日

應庵拜

慕楠兄

賁下

筑前蘆屋ヨリ

染川五郎左衛門

小倉在陣

黒田嘉右衛門様

平静奉復

五三三 大坂東町奉行松平駿河守赴任ノ報

二丸

大坂

御側役衆

木場

清生傳内

大坂

東町御奉行

松平駿河守殿

右ハ大坂江ノ御暇被

仰出、昨日着坂有之候ニ付、此段御届申上候、以

上、

子十二月五日

大坂  
木場 傳内

二丸

御側役衆

五二四 小松帯刀報告

尚々民部大輔様ニハ、草津へ人数御曳列御出張ニ相

成居申候、

筑波山浪士京師へ志シ、木曾路通行ノ儀ハ先便申越候

通ニ候、一橋公モ愈去ル三日<sup>十二</sup>午ノ刻御出馬ニ相成、

当分大津駅へ御滞在之由御座候、右為探索中村半次郎

桐野利差出置候処、浪士ノ方へ踏入情態承候処、王政復  
秋田名不相成候テハ、為

古ニ不相成候テハ、為

皇国不相成候間、其為メニ出京ノ心得、右ニ付テハ賀

陽宮被為入候テハ、逆モ何事モ不被行、次ニ會・薩滯

京候テハ大政モ不被行モ、皆除クトノ趣意御座候由、

竹田竹田武・田丸ノ兩人頭取ニ有之由御座候、当分ハ濃

州揖斐ト申ス処へ滞在、一昨日ヨリ越前境谷波大川原

辺へ曳取候向ニ御座候、千余人必死ニテ中々勢強キ由

シニ御座候、彦根へ相懸リ候へ共、喰留候儀如何可有

之哉、橋公之処モ内通有之候ト申事候へ共、突留候儀

不相分、追々探索モ差出置申候へ共、未進退相分リ不

申候、谷波辺へ罷居候事ハ四日朝迄ノ事ニテ、右通ノ

次第ニテ如何ノ姿武田等ノ據ハ初メ筑紫ニ在リトキ、長州人及ヒ押浪

ニ出立候會ノ二藩ヲ離ケテ、攘夷ノ妨ナカランメト謀リシ故、茲ニ至

リテモ尚ホ長人等謀ル旨アリ、從テ巻説モ起レリト云フ、吉井友実親話

モ難量候間、御屋敷御手当無手拔様仕置候、何トカ動

静可相分候間、其上ハ早々可申上越候、大垣余程氣張

候由、彦根其外近国之軍勢出張ニ相成候へ共、イツレ

モ因循ニテ滞陣相固メ居候由、右次第之形勢故如何之

變動モ難量御座候間、爰元ヨリ長州へ出張相成居候諸

郷一組、征長後ハ当地へ立歸ル賦御座候ニ付キ、長之

都合次第ニハ早々差返候様今日便ニ申遣候間、左様御

承知可被成候、イツレ兩日中ニ詳細ハ可申上候へ共、

今日江戸ヨリノ飛脚通行ニ付、今日迄ノ形勢申越候条

被達御聞候儀、可然御取計可被成候、此旨早々申越候、

以上、

十二月七日午ノ刻 小松帶刀

大久保一藏様

五三五 蘆屋在陣人数賄一件黒田嘉右衛門ヨリ

問合

爰許在陣人数江被成下候御賄、副惣督初其外一同一日

一人前白米六合・味噌十九匁ツ、被相渡候処、於其許

ハ渡シ方格別致相違候哉ニ相聞得、各地差別有之候テ

ハ第一人氣ニモ相拘、不可然事候間、為念爰元人数江

兵粮方ヨリ別紙通糺方相成候処、何レモ不足無之段申

出、然上ハ其許迎モ同様ノ事候半、幸三島彌兵衛通稱其許

江差越居候付、藝州出勢ノ振合モ御聞届、名・陣相並候

様被致治定、何分御評決ノ処承度、左候ハ、過分ノ御

失費被相省候儀ニ可有御座、致吟味副惣督江申出、島

津求馬・西郷吉之助へモ及熟談、此旨御問合申越候、

以上、

平松在陣

十二月八日

御軍賦役

黒田嘉右衛門(清綱)

蘆屋在陣

御軍役奉行

御軍賦役

五二六 三條初請取方等ノ儀筑前へ御達

三條實美初受取方等ノ儀夫々御書面ノ通ニテ可然候、  
五藩へ分配ノ儀ハ、其藩へ一旦請取候上左ノ通取計ノ  
事、

筑前へ

三條實美

肥後へ

三條西季知

久留米へ

東久世通禰

薩州へ

壬生基修

肥前へ

四條隆詩

五二七 海江田信義ヨリ大久保一蔵へ書翰

尚々かへすく御自愛御保養專一奉存候、人情を打  
明し相啻候方頓と無御座、御帰京御待申上候のみニ  
御座候、

追日嚴寒罷成、御塩梅如何被為在候哉と御案申上居候  
処、弥無御別条、御全快之段追々伝承仕、実ニ為國御  
悦び申上候次第、内田兄と始終御噂申上候事ニ御座候、  
御切裂後之処も、余程大事なる者之よし御座候間、能  
々御入念御保養奉祈上候、此御地頓と珍事無御座、梅(亮)  
澤より帯刀殿江御用之義有之、被罷出候様之達、先日  
より度々有之処云々御出無之、漸々今日七ツ時分より  
御出張、原市之進(定成、水戸藩士)も出会之賦之由ニ御座候、其機会を  
不失進退之決断脇々より窺ひ得さる者にて、いつれの  
面応答致し候御方之御見切、天下之安危、実ニ此時杯  
と申上置候事ともニ御座候、尊兄御帰京ハ如何之御事  
ニ御座候哉、内田兄頻ニ御慕ひ相成居申候、何分御煩  
再発いたし候様之事にてハ、如何之到ニ御座候間、其



御地暖氣ニも有之、寸切とハ御快氣ならてハ、御動なされぬ方可然、何事も御身在て之事と奉存上候、先ハあらくながら御安否御尋申上度、如此御座候、敬白、

極月十日

海江田武次

大久保一藏様

(大久保利謙氏所藏本にて校訂)

五二八 子之十二月薩州ヨリ岩國へ使節口上写

五二八ノ一

去ル七月京師變動ニ付テハ、長州侯朝敵之汚名ヲ蒙ラレ、京・大坂・東都等之諸屋敷悉ク闕処被申付、且又幕府ヨリ防長征伐諸大名江被觸出、就テハ岩府公ニモ種々御心痛被遊、藝・筑・因・備等之方々へ御配意之段奉恐察候、乍不及於薩州モ何卒御周旋申上度段、主人何卒存慮ニ付遙々以使者被申越候、然シ斯申上候共御疑念モ可有之ハ、御尤之御事ト奉存候ト申ハ、先年攘夷之

勅命被仰出、御互ニ皆相守来候処、於薩州ハ昨年来少々交易致候事モ有之、是ニテハ大ニ趣モ有之儀ニ御座候、実ハ薩州是迄武器大砲・小砲共ニ不用意之処、於手元調方致候テハ急ニ相調難ク故、交易致候品々悉ク

武器之外ハ一向無御座、最早存分相調上ハ自来交易必ス相止メ、

勅命之攘夷ニ無之テハ不相叶事ト深ク奉察候、楮昨年馬關ニ於テ薩州之交易船打沈ラレ、其節家中之者共其俣ニテ難捨置ト度々申募候得共、是ハ長州ヨリ薩州ヲ惡ムニ非ズ、何レノ国ニテモ交易船ト見タラハ打攘可致ハ御定法ニ候得共、決テ此儀不可然ト申定候、又昨年八月此御方堺町御門御警衛之節、會津ニテ争論之節供々合掌立ニ相成、既ニ戦争ニ及ハントスル勢ニ就キ、大乱ニ及ハス内ト相考、薩州ヨリハ心入ヲ以テ内使者ヲ立候位之事ニ御座候、猶当七月變動ハ會津ヲ祐御目当之事ニ可有之候、決テ

朝敵之罪ハ有間敷於薩州ハ相考申候、然シ其節會津之罫ニ切込及乱暴候得共、薩州へハ怨モ無之候得共、決シテ様子有之間敷ト何レモ覚悟無之罷在候処、不計モ乱入ニ相成、大ニ不意ヲ被打狼狽周章為体ニテ、少シ御相手ニモ相成候哉、ケ様之儀ハ有之間敷候様奉存候、如斯之次第モ有之、長州へハ怨ハ有トモ御恩ハ毛頭無之、薩州ヨリ何ソ周旋致トハ不思寄ト、御疑念モ晴間敷候得共、是ハ私怨ト申者ニテ、輕私怨ヲ以テ重キ大

事ヲ不可闕ト奉存候、実ニ恐多モ

勅命ヲ背キ、

神国之人ト生ヲ受得ル諸民ニ塗炭之苦ヲ懸シコト、甚以テ歎ケ敷次第不過之奉存候、依之薩州一ヶ国ニテモ御周旋申上、万一相叶次第一國ニテモ討手ヲ引受可申、扱只今幕府之卒暴絶言語候次第、第一

天朝ヲ蔑ニシ、益交易ヲ専ラトシ、且一端諸大名參勤ヲ免シ、御台所ヲ国々へ退去成サシメ候処、又已前之通リ人質可差出候様被申触候由、今更中々ケ様之儀決シテ出来間敷相考へ申候故、藝州・備前等中国・関西之諸大名令一致、向後ハ何事モ申合万事相計可申段令決着候、此上ハ早速諸国へ參上致シ、取約申積ニ御座候間、何卒長州公へモ御周旋申上、此区合へ御加<sup>掛カ</sup>リ被成度奉存候、是ニテ御疑念晴不申候ハ、御役人之内何様ニテモ国元へ御同道申度、尚亦当時防長之人諸国通行不自由之事ニ候間、是ニテ薩州ト御名乗御通行可被成候、又京・大坂・東都等へ之夫々屋敷留主居当之書翰相認メ指上置申候間、御持參可被成候、左候時ハ同藩同様之御扱可仕候、何卒々々御疑念御晴可被下候、

五二八ノ一  
京師騒乱之際ニ、吾藩ノ薩州ノ軍中へ生擒セシ十人ヲ還ス、

今日岩國ノ邸監山縣權左衛門ヨリ政事掌へ報告書如左、

京都變動之砌、過ル七月十九日薩州之手江生捕相成候者、此度薩州ヨリ送届相成候人柄左ニ、

周防之内長野之者

川上次郎吉

同 宮市

河村 一郎

富田勝三郎

國元初三郎

萩城下

中村金右衛門

笛屋友之允

長頼<sup>頼カ</sup>屋虎藏

長州万倉村

島屋 團吉

中津政次郎

同先大津

三吉屋吉蔵

右之通引渡有之、右ハ廣島迄連越被成、彼所ヨリ新港迄薩州大島吉之助ヨリ長尾清右衛門ト申者ヲ以テ送来、委細申来候ハ、右之者共口柄相調候処、元来卑賤陪從之輩ニテ是非モ不相分、全無罪之者共ニ候間、是迄弊藩差置御宗藩平定之上御引渡申上、銘々家族共江御引渡之上、苛酷之御所置不相成様致度トノ存意ニ有之、未夕成否モ不相成儀ニ候得共、當廣島迄連越候処、生国モ耳目之近キ処ニ相成候ヘハ、各帰心難留ハ通情之事ニ付、遲速ニ不拘此節才領之者相付ケ御引渡申候間、請取具候様、左候ハ、取扱之及時機候ハ、何卒薩藩之趣意汲取、助命之処方々周旋之程相願トノ趣書状ニ有之、猶又国法ニ任セ脇指ハ取上相成候段、此段付添參候長尾清右衛門申分ニ候事、

一新港迄連越候人数左ニ、

警衛

長尾清右衛門

外足輕四人

船頭三人

右孰レモ苦勞之段申間、清右衛門其外船頭迄聊之挨拶致シ置候由申来候、

右之人員ハ岩國邸へ来駐ストノ事ナレハ、乃チ町方手子黒羽織之者ヲ遣ハシ之ヲ受ケシム、而シテ其原籍等ヲ審カニ調査シケレハ如左、

一周防之内長野者トハ

周田七郎左衛門ナリ

右人ハ、古魚店町町人波多野屋梅次郎へ之ヲ交付ス、

一長州河上村

島團之丞

中津政次郎

右二人ハ國司信濃カ家来ニテ、主家へ交付ス、

一萩城下中村屋金右衛門ハ

下横目

金右衛門

右ハ平安古ノ自宅へ返ス、

笛屋友之進(允九)

細工人窪井文次郎弟

友之進

右其家へ還ス、

長瀬屋印藏ハ

北片河町人字兵衛弟

虎藏

右其家へ還ス、

一周防之内宮野之者

河村市郎

國元初三郎

富田勝三郎

右三人ハ國分寺ノ家来ニテ、瓦町田中屋五右衛門

へ交附ス、

一長州先大津ニテ三吉屋吉藏ハ

國司信濃カ采地万倉村ノ者ナレハ、

右領主國司へ交付ス、

### 五二九 安田助左衛門日記抄

子十二月十一日帰府ノ心組ニテ馬關田出立、吉松止宿、

右ニ付キ、四ヶ郷役々へ左ノ通申渡置候事、

一御備組御手当ノ儀第一ノ事候付、何モ無抜目様ニ吟味

イタシ取り計ヒ可有之候、其内桐油ノ儀人数ニ応小屋

取り仕立候テ、掛試便利宜敷様ニ製作可有之候、

一劍術稽古方一統出精可有之候、

一手習学文ノ儀組頭引受不怠様可被為致執行候、

一所中失費小事タリトモ相省、武備充実候様心掛肝要ニ

候、

一宗門沙汰ノ儀、以前ヨリ度々煩有之場所ノ儀ニテ候間、

若哉取違有之候テハ無申訳事ニ候間、役々申談少々ニ

テモ右様ノ見聞有之候ハ、早速手ヲ付多人数不相成様

取計可致候、

一調練ノ儀正月中旬迄ニ可致候、

一当四ヶ郷ノ儀全体質素ノ風俗ニテ、益々質素ニ有之度

事候処、追々鹿兒島ヨリ市井ノ商人トモ多人数入来候

ニ付キ、自然ト侈靡ノ風ヲ見習、夫レヲ宜敷事ノ様存

候テハ取違ノ事候間、役々初一統家内中ニモ右ノ風ニ

不移様可致教戒候、

右ハ拙者事暫時致帰府候間、追々申聞置候通り相替儀

ハ無之候へトモ、猶又此段申渡候間、何篇無緩疎申談

取計可有之候、

十二月十日

右ノ通り四ヶ郷年寄組頭召呼、ケ条毎ニ丁寧反復致

理解、右ヶ条書モ為書写相渡候事、

五三〇 五卿月形洗蔵早川養敬へ依頼状

西郷吉之助へ極密談合之件々委細聞届候、当藩内輪之紛乱鎮静之功驗相立次第、筑藩へ渡海ノ儀令決定候ニ付、吉之助儀早々出帆、岩國へ立寄反正之説得相尽、藝州へ罷越、此上精々周旋致呉候様通達頼入候事、

十二月十二日

群、筑前藩古  
月形洗蔵へ  
眞、同上  
早川養敬へ

五三一 海江田武次ヨリ大久保一蔵江書翰

御国元

大久保一蔵様

京都詰  
海江田武次(通巻)

尚々時分柄無御痛様奉存候、

一筆路上仕候、寒中御無事御動可被成御座、大慶御儀奉存候、下拙事も無意相動居申候間、乍憚御休意思召可被下候、常野浮浪追々京地近く押寄、当分越前之内今城と申所江滞陣、然処一橋様此内より大津駅まで御出張相成候故、京地乱入ニは至るましく奉存候、しかし油断ハ相成不申、折角氣をつけ罷在申候、細事ハ大

夫様より可被仰上奉存候間、別段不申上候、下拙義ハ当分諸処取会ともいたしおり、懇意者より追々承り候得は、薩を疑ひ候義甚々ニ御座候、何分薩・會を離間の策も可有御座候、何分薩の勢ひ相振り候故、何欵此末のそミ可有之抔とおかしき事とも承申候、此方より申開きいたし候事ハ却て面白候故、我藩之事ハ何とも發言不致黙止居候得は、間ニは向より問かけ候者も御座候間、其節此方より申答候にハ、其義云々下拙抔も折々承居申候、しかし此方より申出候てハ何欵言訳致すよふな心持にて、態とだまりおり候、計策におひて諸藩と見込ハ違ひ候事ハ多分可有御座、しかし天下の御為筋不忠相働き義ハ是迄露程無之、色々申立流言等ハ(はつちらかしの方言)置候義然るべく、何事もか様く〜なと、嘸共いたし候得は、格別異論を申立候人も無之、安心の様子と相見得申候、稍もすれハ嫉妬の心より誰軟色々申触し候者可有之、左候得ハ正義の者すら疑を生し、誠にきたひ千万ニ御座候、乍去何一ツ動揺いたし候義ニ無之、天理に不恥のミニ御座候、且又愚弟事、此中御近習番御役被仰付候由、何とも恐入候次第、誠ニ不足成る者にて、此上之処無御遠慮御教諭なし被下

候処、偏に〳奉伏願候、母の難有さ遙ニ案し罷在申候、返々恐入候次第申つくしかたき事ニ御座候、先ハ幸便ニ付一筆如此御座候、乍毎乱筆御仁免可被下候、恐惶謹言、

子

十二月十三日

海江田武次

信義

大久保一蔵様

〔大久保利謙氏所藏本にて校訂〕

### 五三二 安田助左衛門日記抄

〔給長部〕

〔同上〕

一十二月十四日吉松出立、加治木泊り、十五日帰府、

私居地頭所馬關田并加久藤・吉田・吉松トモ御領内一

二ノ衰郷ニ御座候処、近来追々 御仁慈ノ御救筋被仰

付、当分ニ至リテハ郷士・百姓トモ一統人氣競立、追

年宜敷向罷成候付、今通ニテ五六年モ相立申候ハ、屹

ト御救ノ詮相見得延立可申儀ト奉存候、

一郷士ノ風儀全体辺鄙ノ衰郷故、海辺ノ郷々ヘ引競候ヘ

ハ、余程素朴野陋ニテ、此風最通被行候様有之度相考

申儀御座候、武芸ハ吉田ハ飛太刀流・大刀流相学ヒ、

外三ヶ郷ハ真心影流三四年前ヨリ相流行、飯屋々々ニ

道場相立、余程相励致稽古事御座候ヘ共、文学ノ者ハ

一人モ無之、庭訓往来・商売往来抔教申候テ生長仕候ニ付、学文ニ付テハ手ノ付様モ無之次第御座候、加久藤ニハ四書ノ素読少々出来候者モ罷居候ニ付、二才トモノ内人柄見合、両三人聖堂ヘ出候テ致稽古候ハ、追々ハ学文モ相開可申、吉松ニハ加治木ヨリ素読ノ師匠相頼候テ、是以学文ノ道折角相励候付、追々聖堂ヘ差出可申候ヘ共、外武郷ハ其取計モ出来兼、当分折角師匠相尋申儀ニテ、辺鄙ノ場所故可參吳申人無之、困リタル事御座候、

一学文ノ儀日用彝倫ノ道、義理名節ヲ明ラメ候ハ勿論ノ事候処、私地頭所惡郷迄モ先年一向宗相流行、年寄組頭初一郷中無残右宗旨ニ被迷儀度々有之、向後ノ儀別テ痛心仕儀ニテ、役々初一統ヘモ丁寧反復諭戒仕儀御座候、右ハ畢竟文盲ニテ、義理名節夢更存不申処ヨリ、御大禁ノ宗旨所中致尊崇候時宜ニ相成候儀ニテ、学文ノ道大概弁知候得ハ、役目ニテモ相勤候者看、御大禁ヲ犯候儀ハ於義理仕間敷、役目ノ者御法度ヲ守居候ヘハ、仮令民間ニ少々被行候テモ、郷内一統ニ致延蔓候様ニハ相及不申儀御座候、然ハ学文ノ道相開候儀ハ御政事ニ関係スル事甚々多ク、其益少カラサル儀ト奉存

候間、馬關田島内村ハ吉松ヨリ一里半、吉田ヨリ半里、加久藤ヨリ一里位、四ヶ郷ノ中央ニテ便利敷場所御座候間、学文手習ノ郷学校一字造立仕、十二三才ヨリ廿才内外ノ郷士共物学被仰付、右師匠ハ造士館句読師等ノ内御見合ヲ以テ被仰付度奉願候、左様御座候ハ、往年屹ト其詮相見得候様取計仕度奉存、(候脱之)

一当所ニ於テ酒造被仰付候儀莫大ノ御救筋ニテ、真幸五ヶ郷共加治木ヘ数通往来転輸ノ上相納候御米、居ナカラ致上納屈竟ノ時節、数十日ノ手障ヲ得候上、諸雜費ヲ省候儀ハ勿論、人馬共寒夜野宿ノ艱苦ヲ免レ、前後難尽筆紙御仁政、実以人意ノ表ニ出候御良策ト乍恐奉存候、然ハ郷士・百姓共追々ツロキ出来可申候間、其内段々曠野相開、野稻・粟・麦・唐芋類ノ作職可致成熟、農人共右ノ雜穀ヲ飯料ニ仕候様罷成候時節ニハ、真幸五ヶ郷ニハ過分ノ米穀出増可申候間、酒造被仰付候テモ中々禿取候丈有之間敷奉存候間、追々積倉被相立、土地時勢ニ応候簡便ノ御良法御下有御座度奉存候、且又酒造ノ儀右通奉感佩次第御座候ヘ共、府下市井ノ商人類余多入込候付テハ、辺鄙ノ者共自然ト伶俐ノ風ヲ見習ヒ侈靡ノ風習ヲ被移可申、是レニハ遺憾不少御

座候間、折角其心得ヲ以申渡仕置儀御座候、

一他領境御取締追々嚴重被仰渡、当分ニテハ随分宜御座候ヘ共、一向宗相流行候儀モ、右取締緩セノ処ヨリ十カ八九ハ災ノ根ニ相成申儀ト奉存候間、追々御取締ノ儀向々へ被仰渡度奉存候、

一茶植殖方ノ儀被仰渡、当四ヶ郷ノ儀全体茶ニ致相応候土地故、植殖ニ付テハ最安御座候ヘ共人少ノ郷内、過分ニ生育仕候テモ取揚方相調不申、残念ノ至御座候、其内加久藤ノ儀ハ茶相少候付、折角植殖方下知仕置候、此上格別御用途罷成儀御座候ハ、別段御趣法被相立度、人員沢山相成候ヘハ、茶ハ何程モ生産可仕奉存候、右ハ私地頭所四ヶ郷ノ儀、前文ノ通段々難有御救筋被給付、一統競立罷居申儀ニハ御座候ヘトモ、全体衰郷ニテ疲郷士共賃取体ニテ渡世ノ者余多有之候付、往々衆并々御奉公相勤候様成立セ度、就テハ所中ノ失費纒タリトモ相省、武備充実ノ処ヲ目当ニ仕、武芸執行調練等ノ儀折角無懈様申渡仕儀御座候、且又鉄砲數ノ儀ハ、全体狩場ノ故壯健ノ郷士人数文ヶハ持合居申候間、仕合ノ事ニ御座候、所役ノ邪正進退民間ノ疾苦ヲ除候類ノ儀、差当申上程ノ儀見及不申候、此段申上候、以上、

十二月九日  
子十月

安田助左衛門

本文式部殿・右衛門殿へ入御覽、猶又市來正之丞・伊地知宗之丞へモ致示談、左候テ右衛門殿へ御直ニ差上置候、

五三三 総督ヨリ以使者出軍ノ各藩へ通達

一毛利大膳父子山口ヲ開キ、萩へ移リ寺院へ蟄居イタシ候事、

一五卿・諸藩士一旦三田尻へ集リ、猶又五卿ヲ山口へ移候処、今度他藩へ御転座申出候事、

一三暴臣ヲ斬リ首級差出候事、

一三暴臣參謀之輩モ斬首申付ケ候段相届候事、

右尾州惣督使者申出候事、

五三四 総督尾州侯ヨリ三條實美以下五名へ達文

三條實美

三條西季知

東久世通禧

壬生基修

四條隆謨

此方共移転之儀明十六日ヨリ十日之猶予ヲ以テ、萩表反正之成否ニ不拘、必其藩へ可令渡海決定ニ付、解兵之儀早々周旋有之度頼入候事、

十二月十五日

萩表へ幽困ヲ解候儀被 仰付置候ニ付、長府清末へ猶又御督促被遊候得ハ、五日之内御答可申上候、右申上候次第厥然御転座被遊候テハ如何可有御座哉、若及遲々候ハ御期限通御処置被遊度奉希上候、乍併其内ニモ諸隊沸騰ニモ及候ハ、乱之魁ト被為成候儀ハ素御心外之御儀故、直ニ御転座可被遊、為其内分長府清末ニ御発船之御用意迄モ被 仰付置度奉存候事、

但期限可為七日事、

五三五 両御旗本并御先手等ノ諸隊操練

元治元年十二月十五日

両御旗本并御先手等ノ諸隊操練砂場ニ於テ催サレ、  
太守公ハ九ツ時御出城同場ニ臨レタリ、

五三六 常野脱走ノ浮浪登京ノ風分アルニ依リ

洛中ノ警衛



松平修理大夫

常野脱走之浮浪共今度登京之風分有之候ニ付、万一当地へ罷登候ハ、御所御門御警衛之人数ハ相除キ、残人数早速差出不洩打取候様、尤其節可相達哉ニ候得共、

京地へ踏込候様及見聞候ハ、不取敢人数差出候様兼テ其心得ニテ用意致置候様、此段相達候事、

十二月六日

五三七 御城下各所砲台操練

十二月十七日

御城下各所砲台操練催サレ、太守公ハ辨天砲台ヨリ御覽アラセラレタリ、

五三八 番兵各隊操練

十二月十八日

番兵各隊ノ操練砂揚場ニ於テ催レ、太守公御出馬アラセラレタリ、当時長州征討出軍ナルカ故、後援予備ノ為メ諸郷十二ヶ郷ノ兵城下ニ屯集セシメ、臨機応援ノ設ナリ、此兵員凡八百人、又各郷毎ニ後備ノ兵ヲ定メ、号ヲ定メテ出軍ノ準備ヲナセリ、本日操練セシ隊ハ則第二番

備ナリ、

五三九 筑波山暴動ノ始末或人通報

十二月十八日

上・下野州辺暴徒当月初方ヨリ益増長、日々諸所城下等へ押掛乱妨致シ、何ニ寄ラス掠奪、殊ニ米穀・金銀・反布ノ類ヲ奪ヒ候由、尤モ暴徒ノ人員モ相重ミ、初ノ程ハ八百余人ト申ス事候処、今ニ相成テハ、殆ント一万人ニ余候由、左候テ下総ノ内天神山ト申ス山中ノ寺院ヲ陣所ト致候由、右天神山ト申スハ刀根川ノ流近キニアリテ、一方ハ沼湖アリテ、四方数十里ヲ眼下ニ見テ、彼辺ノ要害ノ地ニ候由、依テ川舟ヲ悉ク取り占メ、近藩討手ノ人数ト見レハ、直ニ大小砲ヲ以テ遠近ニ打立テ候故、天神山へ近付クコトヲ得ス、手ニ余リタル勢ニ相聞得、夫故討手ノ人数并近村農兵等遠卷キニ固メ候ノミニテ、今ニテハ手ノ付様無之、暴徒ノ方ハ右通思フ俛ニ金銀・米穀等ヲ掠メ貯へ居、殊ニ諸所ニ砲台ヲ築キ、守防嚴重ニ撰撰へ、古寛永ノ島原一揆ニ甲乙ハ無之ト申スコトニ候、又此外ニ上総ノ内久良々ト申ス所ニ百五六十人許ノ一揆起リ、之モ天神山ノ暴徒ト

同党ノ由ニテ、其モ強ク近小藩ノ城下ヲ夜打ニ致シ、  
武器兵食ヲ奪ヒ、追日近辺ノ浪人モ加リ掠奪ヲ專ニ致  
スニ依リ、豪農商人トモ困入り候由、

一先日ハ黒羽ノ領主<sup>正方八</sup>大關榮之助殿江戸ヨリ帰国ノ途  
中、天神山ノ暴徒押掛、武器類悉ク追剝致シ候、大名  
ノ追剝ニ逢ヒ候ハ前代未聞ノ事トノ大評判ニ御座候、  
右通武器兵糧ヲ貯へ、要害ノ地ニ抛リ、次第二人数モ  
重ミ、追々近隣ニ押シ出シ、又江戸近辺ニモ内応ノ者  
有之トテ、捕へ方近日嚴重ノ手配ニ相成、大小名二箇  
メ被仰付、品川口ニハ八ツ山へ番所出来、内藤新宿・  
板橋・千住ヲ初メ、刀根川筋ノ諸所、奥羽街道松戸・  
葉柴・中川、又ハ東橋・兩國大川橋・永代橋ヲ初隅田  
川筋ニモ守衛人数張出シ、兩國橋ニハ芝居木屋ニ守衛  
ノ人数屯致シ、大小名又ハ御先<sup>手九</sup>年人数ニテ固メ居候、  
依テ往来ノ人男ノ分ハ悉ク名ヲ糺シ、様子ヲ伺ヒ差通  
シ申候、一方ナラヌ騒動ニ相成申候、  
一十五日ニハ下房<sup>總</sup>佐倉ノ堀田<sup>尾橋</sup>候人数三番手迄天神山退治  
ニ出張有之候由、武州川越候モ三番手迄張出相成り候  
由、此暴徒ハ専ラ水戸人ニテ、加フルニ諸国浪人入り  
交リ居、水戸ヨリノ届書モ有之義ヨリ触達相成り、容

易ナラサル様子ニ相聞得申候、

一水戸ヨリ届書ニ、家老武田伊賀<sup>正生</sup>ト申者頭取ニト相見得、

通例ノ一揆ニ無之、重キ趣意アル趣ニ御座候、右武田  
事ハ昨年上京致シ居、攘夷一件ニ付帰国致シ、公義へ  
向ヒ段々建言モ致シ、前中納言様趣意ヲ継キ、勤王  
ノ志アル人ニ候由、右ニ付今十八日十九日兩日ニ、水  
戸ヨリ右武田ヲ初メトシテ数百人江戸へ出、建言ノ趣  
申立ルトノ説ニテ、一統惡マサル向ニ相聞得申候、

一江戸近頃ニハ押込強盜茲彼ニ多ク、取締モ恐レス拾人  
モ二拾人モ組合居、中々強情ニ候由、去十二三日頃ノ  
事ニ、淺草御蔵前町人<sup>御指シ</sup>宅ニ押入り、一家ヨリ千  
四百兩余ツ、奪ヒ取り、其惣金二万兩余ニ及ヒ、又寺  
院へ押入り掠奪ヒ、手向フモノハ打捨テ逃隱ハ不致、  
軍中ノ分捕同然ノ仕方ニ候由、

一江戸千田<sup>敏</sup>ヶ谷ト申ス処ハ井伊家ノ領地ニテ米倉有之、  
此所ニ浪人大勢押入り、米ヲ多ク奪ヒ、船七艘ニテ玉  
川筋ヲ徐ニ曳取候由、

一水戸ヨリ取鎮メノ人数出張相成候ハ、大軍ニ可相成ト  
ノ説ニ御座候、然ルニ此御方ニ御預リノ浪人モ此事ヲ  
聞キ候ハ、必ス飛ヒ出サント致スベシト懸念ノ事ニ御

座候、世説ニハ老公氷戸烈存生ナリト申立候由、兎角遠カラス血臭キ世ノ中ニ相交シ可申ト、皆人眉ヲヒソメ居申候、

一御国ノ蒸氣船去ル九日高輪海へ着致シ、鹿児島出帆ヨリ五日目ノ速ナル事ニテ、誠ニ弁利ナル事ニ相成リ候、

此節ハ東海道ヲ乗候由、見物人夥ク、近日中筑前候・

南部侯・有馬侯御見物ノ御掛合モ有之候、又其近所ニ魯国軍艦二艘碇泊致シ、是ハ又大ナル船ニテ、砲門左右三二十四有之候、以下略ス、

十二月十八日

五四〇 毛利家所刑ノ届書

罪魁益田右衛門介・福原越後(元側)・國司信濃(親指)嚴刑ニ行ヒ、

首級実檢差出、其余參謀之者共斬首申付候旨申出候事、

一暴臣共於 輦下騷擾之始末、大膳父子平生之緩セ罪科難遁、依之寺院蟄居恐懼罷在、何分之御沙汰奉待候、

自判証書國司信濃へ軍令状相渡候始末恐入之趣、書付添指出候、

三末家之者共ヨリモ恐入候段、自判書付指出申候、

一山口ハ新觀(規力)修築之事ニテ破却可致旨申渡、則為見届家

老石川佐渡守指向、并立会之為御目付戸川鉦三郎指出候処、破却之体異儀無之旨佐渡守・鉦三郎申渡候、

一三條實美初五人松平美濃守・細川越中守・有馬中務大(鳥津茂久、薩州藩主)・松島直大、佐賀藩主(黒田齊博、筑前藩主)・熊本藩主(慶順、熊本藩主)・久留米(久留米藩主)・松平修理大夫・松平肥前守へ分配、各国元へ引取御預ケニ為取計候筈ニ候事、

一大膳父子萩城立退寺院蟄居之体、佐渡守初見届候処、

城中無異議、大膳父子萩城外天樹院へ蟄居罷在候、謹慎之体疑敷儀無之ト佐渡守・鉦三郎申達候、

一長防領内村市人民謹慎暴順之体疑敷儀無之趣、佐渡守・

鉦三郎申達候、

子十二月

五四一 〔蘆屋陣中ヨリ在陣人数賄一件返書〕

本文致承知攝津殿江申出候処、御賄主ノ儀最初爰元ノ

儀モ六合モ被相渡来候得共、段々引定兼候訳合モ有之、無拠他国出軍ノ御規則ニ基キ八合ツ、被相渡、当分其

通ニテ相弁来候付、於当陣ハ相替候儀更ニ無之候、尤各陣不相等候テハ人氣ニモ相掲(掲力)ルヘク趣被申越候付、

其元ノ儀モ爰元通可被取計候、乍然此上吟味之趣モ候ハ、猶被申越候様攝津殿ヨリ被仰付候、此旨及御返

答候、以上、

御別紙差返候、

蘆屋在陣

子十二月十九日

御軍賦役

御軍役奉行

諸色直成帳

小倉在陣

一種子油

壹盃

御軍賦役

一塩

壹升

五四二 物価届書

米穀其外日用之品々、現事売買之直成、別冊通銘々職

一小麦

壹升

屋共江為書出、町役共より申出趣承届候間、此段申上

一蕎麦

壹俵

候、以上、

一味噌

壹斤

子  
十二月廿一日

下廻方横目

一味噌小売

壹斤

松崎 助七

一生醤油

壹盃

村田長左衛門

一生醬油

壹盃

東郷六郎兵衛

一同式番小売

壹盃

町田孫太郎

一同式番小売

壹盃

上廻方横目勤

一生酢

壹盃

樺山五郎兵衛

一生酢

壹盃

右同横目

平田直一郎

坂本休兵衛

樺山彦太郎

代錢四百五拾六文

代錢八拾文

代錢百八拾四文

代錢四貫五百文

代錢百八文

代錢百文

代錢四拾六文

一 酢小売 壹盃

代錢百文

一 上松薪 百文二付八本

代錢拾三貫四百文

一 実酢小売 壹盃

代錢五拾八文

一 中松薪 百文二付拾壹本

代錢四拾貳文

一 小割薪 壹抱

代錢貳拾貳文

一 真白米 壹升

代錢貳百六拾四文

一 枯木丸太薪 壹抱

代錢拾四文

一 同納米 壹升

代錢貳百五拾六文

一 松之枝薪 壹抱

代錢拾四文

一 搗粟 壹升

代錢貳百五拾六文

一 上酒 壹盃

代錢貳百拾六文

一 荒粟 壹升

代錢百三拾貳文

一 中酒

一 下酒

代錢貳百八拾八文

右式行之儀は、当分市中小売仕不申候、  
上酒一式二売出仕申候、

一 下大豆 壹升

代錢貳百八拾八文

一 并焼酎 壹盃

代錢七拾五文

一 上薪 壹撻

代錢拾五貫文

一 生焼酎 壹盃

代錢百四拾八文

一 中薪 壹撻

市來并川内方限

一 生焼酎

加治木并國分方限

一 右同

右式行之儀は、当分御当地ニテ煮御免被仰付候付、

取寄壳買仕不申候、

一 上長口起炭 壹俵

代錢七百八文

但

三拾七八斤以上

一 中長口起炭 壹俵

代錢六百貳拾文

但

三拾貳三斤以上

一 上起炭 壹俵

代錢四百六拾六文

但

三拾斤以上

一 中起炭 壹俵

代錢四百拾四文

但

式拾貳三斤以上

一 上差拔起炭 壹俵

代錢五百文

但

式拾八九斤以上

一 松金鬢附 壹斤

代錢七百四拾八文

一 石割右同 壹斤

代錢六百八拾四文

一 梅ノ露右同 壹斤

代錢八百四拾八文

一 蠟燭 壹斤

代錢五百七拾貳文

一 黒傘 壹本二付

代錢八百七拾貳文

一 一定尺雨傘 壹本二付

代錢壹貫百文

一 壹寸延雨傘 壹本二付

代錢壹貫貳百文

一 貳寸延雨傘 壹本二付

一紺傘 壹本ニ付

代錢壹貫四百文

一紺蛇ノ目 壹本ニ付

代錢壹貫八百文

一皮緒桐操台 上 代錢貳貫五百文

一皮緒桐操台 中 代錢壹貫八百文

一右同堂嶋 上 代錢壹貫六百文

一右同堂嶋 中 代錢壹貫三百文

一右同堂嶋 上 代錢壹貫貳百文

一右同堂嶋 中 代錢壹貫百文

一皮緒操台杉 中 代錢壹貫文

代錢六百八拾八文

一右同堂嶋

代錢六百四拾八文

一右同平台

代錢六百四拾八文

一女皮緒杉堂嶋

代錢六百四拾八文

一右同平台

一女皮二重緒桐台

代錢六百文

一右同二重緒杉台

代錢壹貫文

一男同し緒杉平台 代錢六百四拾八文

一右同女 代錢三百八拾八文

一右同堂嶋 代錢三百四拾八文

一右同堂嶋 代錢三百四拾八文

右之通当分市中相場ニ御座候、以上、

上・下・西田町

十二月

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

五四三 小倉出張吉井幸輔報告

猶々、京師ハ混雑中にも鬱散も可有之、目タンダ銀  
右衛門がシャベリなど、当地之長在陣ニハ大ニ込り

申候銀右衛門トハ、小倉本陣村上銀右衛門ヲ、云フ、眼病目赤シ方言目タンダト唱フ、

前略、五卿一条并国内調和之為西郷岩國へ踏越候次第

ハ、松方義正帰国委細御聞取相成候筈、其後福岡表江小  
拙差越候一条ハ、蘆屋より御問合相成候間不申上候、  
是迄段々之情態も有之、漸々兎哉角運立候処、別紙西  
郷書状通、萩にて拙策を拙策三吉川等カ暴論先ノ処分奇態ニ出シ  
トシ、或ハ五郎ヲ疎外ノ意書シキカ故ナリ、  
吉井友施し、諸隊大ニ奮激、終ニ五卿も期限通御駈座相  
迦レ、昨今大ニ六ヶ敷成立申候、先日馬關江も罷渡、  
長府人江も面会仕候、筑藩ニも大心配御座候、何卒今  
一往岩國・萩江諸藩より説得いたし兵候様、尤御国本之  
儀ハ、萩表御慕申上居候間、相頼との事にて、越前江  
右之趣論判ニ及候処、同意にて、同藩より肥後江相談  
いたし候処、迂遠之策ト不同意之趣御座候、外ニ柳川・  
久留米江も申談、一同差入賦御座候得共、前文肥後不  
同意にて、諸藩も不承知可致欵、何レ之筋小生ニハ是  
迄仕掛儀ニ御座候間、成否ニ不拘差越之含御座候、  
今日ニ至り候てハ、萩之所置次第にて、兎哉角相治り  
候訳ニ御座候処、私怨を以報ひ候気味有之、いつれ往  
々内乱と相成可申、就てハ官兵引上ケ候程合無覚束候  
間、是非一時なり共鎮静之道相立候様、尽力仕度事ニ  
御座候、

一京師之一左右其後無之、如何ト始終案勞罷在候、就て

今一陣被練登候ハ、破レ候時ハ勢あり、治り候時ハ  
救応隊へ交代いたし候ハ、別段御国元より被差登候  
より、御都合相成可申欵と建議仕置候、

一江戸表ニハ、夷人江十五万石之地を鎌倉辺へかし渡候  
風聞、専当地ニ有之、越藩辺江は何方より欵申参候由、  
実ニ大変之次第、根本既ニ如斯罷成、在陣之諸家人心  
又一変いたし候、必一橋公之手と幕府両立可致、もふ  
こそ持重之策ニ極り可申欵、一日も早く上京いたし度  
候得共、一人ニ相成どふも難迦、心中御推察可被下候、  
此旨奉得貴意度如斯御座候、猶追々相変候儀共可申上  
候、早々不備、

吉井幸輔

十二月廿七日夜認

大久保一蔵様

貴下

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

五四四 柴山良助書牘

一筆啓上仕候、当年も已ニ無余日罷成り、寒氣嚴敷御  
座候へ共、愈御多祥被為成御座候半、恐悦御儀奉存上  
候、然ハ御注文之御軍艦一条、自此内御掛合申上置候  
通り、何分絵図面不示候ては、引続之談判も出来不申



旨、英商ハリソンより申訳にて、右到来次第早速其儀  
取掛り、何分之御首尾合可申上奉存候間、左様思召可  
被下候、

一 爰許爾來交替之儀も無御座、幕向ハ日増しと人氣ニ悖  
戻仕候様之御政事にて、今日言路ハ壅閉いたし、諸藩  
有志人之上何事も手指す事ハ不相成、只当惑いたし切  
候姿ニ御座候、其後幕府江対し上書建言等御座候向之  
事、更ニ承得不申、何分今成にては幕役之進退向、

朝廷よりして断然御決議無之候ては、不相叶と申処ニ  
着眼仕候説專ニ御座候得共、当分之処にては、長州之  
事未御首尾相成候様之角も相見得不申、且は又 將軍  
様之御進発向も上野之宮様御貰ひ候欵、申様之事ニ御  
取成し御黙止ニ相成、是全く將軍家之御身かまへ、只  
偷安之御所置ゆへ、是よりして

朝廷之御逆鱗、諸藩之憤怒必す一變事付申さんと相互  
ニ見合候形とも被伺申候、

一 水府之内情別紙差上申候、当分激論家之徒ハ、悉く脱  
走いたし居候由御座候得共、右書面ニも御座候様、奸  
徒より当公を廢し、幼君相立度との事件、(流カ) 流徒奸徒之  
間色々と紛乱仕り居、是よりして又必ず事を醸成んと

被考申候、水戸当公も当分御慎御伺ひ中とて、幕府よ  
り何分被仰渡候儀未承得不申候、

一 常野之浮浪党、当分飛驒之方江罷在候由、此節ハ余程  
究迫仕候姿ニ被聞申候、加州候へ何欵歎願之書差出し  
候て、当分歎願中と申事、先達て間部候御手より相洩  
れ候左右承及申候、戸田候之御届書別紙差上申候、

一 当分閩老方之上、何方も碌々之御事にて、大方奥御右  
筆・御勘定奉行等之上よりして、議論相立候事多く御  
座候向之由、

一 御勘定奉行小栗上野介殿、先達御軍艦奉行江被為転、  
委細ハ相分兼申候得共、此人随分働等有之候人之よし、  
全体才略ニ任せ諸事改革向ニ大ニ趣意有之、閩老間ニ  
忌諱ニ触小栗ハ當時幕吏ノ中ニハ頗ル有名ノ人ナリ、時勢モ弁識  
シ才略アリ中ニモ海陸軍興張セントカラ喝シタリト云フれ候様  
之事御座候て、如此と申事ニ御座候、講武所之歩兵隊  
ハ全此人之手よりして成りし由、右等之所より幕家之  
人よりハ望を掛られ候人物之よし、

右歳暮之御伺ひ旁、御左右如此御座候、恐惶謹言、

十二月二十八日

柴山良助

大久保一蔵様通利

玉案下

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

五四五 鹿兒島諏訪神社社司本田三位願書

御内意之覺

諏訪社附

社家

壹岐丹波守

有屋田下總守

右兩人先般上京仕、從五位下蒙

勅許御礼參

内、且関白様以下御礼參殿等無滞相濟難有奉存候、然  
処於吉田家毛丹波守儀ハ先般故宰相様思召ヲ以、水神  
社御取建付、吉田家へ勸請方御願相成候、社司之御取  
訳ヲ以テ権大宮司同様之振合、下總守儀ハ数十代諏訪  
社へ相付連綿、殊ニ幼年ヨリ稀成昇進故、是又別段之  
訳ヲ以権大宮司同様蒙推許被下候、上官位成之  
御礼奉願候処、壹束壹本進上ニテ

御礼、於御書院

御目見被仰付、難有仕合奉存候、然処五社其外

御參詣付大宮司差支之節ハ、外三家権大宮司同様名代

勤被仰付、何共難有奉恐入候、就テハ名代勤被仰付候

御取訳ヲ以、身分品能方ニ被仰付被下儀共御座候得ハ、  
重疊難有不願恐此段極御内意ヲ以奉願候、以上、

子十二月

本田三位

五四六 総督尾張殿ヨリ達十二月  
日

細川越中守

有馬中務大輔

松平修理大夫

松平肥前守

三條實美初五人之輩松平美濃守へ請取之上、壹人ツ、  
引渡候筈之処、内情運ヒ兼候次第モ有之候ニ付、当時  
之間ハ美濃守領分ニ被差置候条、受持之心得ヲ以守衛  
之儀共宜可被取計候事、

十二月

五四七 黒田嘉右衛門同僚へ贈ル書牘

前文略ス、然ハ長防御討正事モ干戈ヲ動スニ至ラス降

伏謝罪、暴臣共三人ノ首級差出、其外巨魁十余人ノ首

ヲ切り、大膳父子寺院ニ謹慎、國中恐縮罷在等ノ廉ヲ

以テ、総督御聞濟相成候由ノ趣御達有之、不日ニ陣払

ヒ凱旋可相成、寔ニ以大慶此事ニテ、御互ニ無上事ト奉存候、就テハ不遠拝顔、積ル御咄モ可申承候、然シ此節ハ些ト不与ノ帰陣ニテ、一発ノ砲声モ不聞リマ、<sup>(符丸)</sup>ニ帰陣仕ルハ、実ニ汗顔ト奉存候、素ヨリ干戈ヲ不動ハ何ヨリノ事ニ御座候得共、壯年ノ兵衆ハ甚タ残多ク被存、大膳父子カ首ハ我ニト思ヒ込シ故、総督ノ軍嫌ヒカト段々ノ説モ起り候、又西郷・吉井・高崎ナト取計振りモ今初メテ聞キ、夫故三先生達ヲ誹議ノ説モナキ無之候、御推察可被下候、右ハ全ク軍好ミノ壮士中カ、一発モ放タス空シク帰陣スルヲ残多ク存シテ事ニ<sup>(脱カ)</sup>候、私共ニサヘ一二戦ニテモアリテ後ノコトナレハ、心持モ可宜ト考ヘサルニモ無之候、御国人ノ氣質ハ右通ニ候処、之ニ引替テ熊本・柳川・福岡等ニハ降伏謝罪ノ報アリシ当日ハ、一同怡悦致シ、喜色表ニ顯レ、早く妻子ニ逢度ナト、申シ合ヒ候形勢ニテ、御国人ノ氣風トハ雲泥ノ相違ニ有之候、

一右通無事帰陣致スニ就テハ、不日拝顔御話ニ可及候得共、長州之儀ハ是マテニテ治リハ決シテ付キ申間敷、暴徒ノ内巨魁ノモノ未タ諸所ニ潜居致シ、勢ヲ見合セ居候モ少カラスト申ス事ニ候、則チ高杉ナトモ初メ福

岡ニ遁レ、夫ヨリ久留米へ匿レ候由、其上無頼ノ輩ヲ集メ、或ハ同国人モ追々集合致シ、早ヤ二百人程ニ及候由ニ相聞得、又小倉領分ニモ段々相見得候由、夫故小倉人ノ恐怖一方ナラス、此後官軍皆引払ヒ、殊ニ薩州ノ兵曳取ノ上ハ浪人共顯レ出テ、様々ノ暴悪ヲナスニ相違無之ト役筋ノ<sup>(脱カ)</sup>モモ末々ノモノモ心配致居申候、先日ハ小倉ノ役人共私宿陣へ参り段々ノ話ノ末、薩軍二百人位此涯小倉辺何方ニテモ御残り、長州ノ折合確ト相定ルマテ御在陣之儀、総督へ願出度評議之趣<sup>(符丸)</sup>以意ニテ申聞候、私答フルニハ、弊藩ノ人数ヲ指シテ御願ハ甚タ迷惑ナリ、長州ノ折合モ吉川等折角尽力中ノ事、三百ヤ五百ノ暴徒カ如何程ノ事仕出シ可申ヤ、又其位ノ輩カ暴ヲ働候ニモ、尊藩ノ御武力シテ御取鎮メモ容易キ事ニ可有之、又福岡・秋月等御隣藩モアレハ応援モ可致、夫程御心配ニハ及間敷旨申聞候処、又申スニハ福岡等之処ハ弊藩ト同様ニテ、以前ノ事ヲ以テ相考進ニ、中々頼ミサキ<sup>(子丸)</sup>人氣ニテ、当分モ長人多人數忍ヒ居候モ、実ハ恐レテ忍ハセ候ニ相違無之ナト、甚タ心痛ノ体ニ相見得候、何分此後ノ処懸念ハ絶へ申間敷、又五卿御軀座ノ処モ、吉川ナトノ処分ト総督ヨリ御処

置振りニ依リ動靜ニ相拘リ可申、然シ総督辺ノ処ハ西郷氏ノ意見次第ニテ、多分ハ嚴酷ニ過ル様ナルコト万々有之間敷、又乍不及私共ニモ乱ハ好ミ不申候ニ付、少々意見モ申述遣シ置候、尤御兩殿様ニ於テハ予テ寛大至仁之尊慮ニ被為入、其上外難目前ニ顯レ居候今日ニテ、兎角ニ内ノ治リ一日モ早く相付キ、外夷ノ御処分ニ御取掛リ無之候テハ、乍恐今日ノ形勢ニテハ、皇室ノ御動靜モ、難計時宜ニ御座候得ハ、大小輕重ヲ弁別致シ、内ノ忿リハマゲトメニテモ、一日モ早く被召付、外夷ノ御取扱サ向キニ不相成候テハ、一大事ノ御時節ニテ御座候半ト奉存候、尤モ一昨年来、

老國文云  
老國文云

朝幕へ度々ノ御建言モ、早く内ヲ調へ外夷ノ御処置第一ナル趣被仰上候由、其頃マテハ日本モ今日ノ様ニハ破レ不申、可也ニ弥縫モ出来ヘキ形勢ニ御座候、充分ニ内ヲ整へ、其上外夷ノコトモ十分ニ御処置アラセルヘキ尊慮ニ候処ニ、長人ノ私欲ヨリシテ今日ノ形勢ト相成リ、内外同時ノ混雜ニ立到リ候ニ付、兎角今日ノ処ハマゲトメニテ、早く治リヲ付ケ候外ハ有之間敷、西郷・大久保又小松家ナトノ御考モ果シテ其通りニテ

此様三暴臣其外十余人ノ巨魁ヲ斬リ候テ、大膳父子ノ罪ハ死一等ヲ允シ退隱サセ候位ニテ、五六万石ヲ削リ候マテニテ相濟セ度事ニ御座候、石高之内馬關・上ノ關・三田尻等ノ地ハ是非ニ削リ、公領トシ不申候テハ東西咽喉ノ要地ニ御座候間、此機會ニ引キ揚ケニ相成リ、官兵ノ衛所ヲ設ケ置度コト存候、何分ニモ長人ハ一体ノ習風狡黠ニ有之、利欲飽クコトナキ輩ニ候ハ、皆人知ル通ニ御座候間、是迄鎖攘ノ奉勅ヲ口実ニ致シ、無謀ノコトハ十分心得ナカラ、唯私欲ノ一ツヨリ討幕ヲ本志ニシテ人氣ヲスカシ、己レ將軍立テ天下ノ政ヲ取ラントスルハ、段々其証拠ニ有之由、殊ニ主人大膳ハ愚昧ニシテ、一口ニ申セハ馬鹿トモ申ス人物、長門ハ面体ト同様丸デノ馬鹿ナル上少シ氣荒ク、其上大酒家ニテ折節酒乱ニ有之、如此父子十分ナラサル人故、奸臣トモ自由ニ左右シテ、今日ノ姿ト相成リ候儀ト申ス事ニ候、依之此機會ニ乘シ領分ノ要所丈ケシテモ引揚ケ、其地ニハ官軍ヲ置キ取締ヲ付ケ、五六万石ノ石高ヲ以テ其官軍ノ入費ニ充候様有之度、何分ニモ效ニテハ胸ヲサスリマゲトメニ尾ヲ取り、外夷ノ御分ニ御取掛第一ノコト、奉存候、又此後格別是迄ノ様ニ頭ヲ

上ゲサル様ノ御仕向ケ有之度、何分三條初ノ四五輩ヲ此ノ御方等ニテ押ヘ置キ候ハ、京都ニテ有栖川其外ノミニテハ、格別ノコトモ有之間敷ト奉存候、

一長州ノ所鎖攘ヲ唱ヘ候得共、内実ハ開港ノ主意ニ相違無之ハ、先達テ二三人井上伊藤外國ヨリ歸リ来、外夷ト和陸致シ候由、其後外國船ノ通帆自在ニ相成リ、碇泊ノ折ハ求メノ品トモ交易取遣モ致シ、以前ノ向トハ打テ替リタル次第ニ候由、此等ノコトヲ以テモ鎖攘ハ口実ニ候証拠トスル処ニ御座候、全ク將軍職ノ望ミヨリ之レヲ口実ト致シ候コト、皆人申スコトニ御座候、万一彼ノ愚頓ノ大膳父子カ將軍ニ座シタリトテ、トヂマルモノニ非ス、此ハ臣下ノモノモ承知ノ前ニ可有之、就テハ又臣下ニ大事ヲ挾ミ居候姦物モ段々可有之ト申ス事ニ御座候、

一何分ニモ又込リタルモノハ幕府ニテ、將軍家ハ未タ御若年ニテ、漸ク東西ヲ分リタルノミトモ可申、閣老辺ノ処モ元来ノ御大名ニテ、上下ノ情ヲ知リタルハ無之、公用人ヤ臣下中ノ補佐ニテ今日ノコトトヂマリ候ニ付、都テ小吏ノ輩ノ議ニ出候事ノ由、小吏ト云ヘハ久ク其役場ニ馴レタル者ノ内ヲ能キト申ス位ニテ、其人

々カ旧格古例ヲ以テ当世ノコトヲ吟味シ、夫ヲ閣老ノモノトシテヤベリ候故、何事モ押シテ知ラレ候、就テハ幕府ノ根モ大ニヨロメキ候ハ申ス迄モ無之、此後如何ノコトニ可相成哉、其上一橋トノ間ニ嫌疑ヲ起シ、一橋モ十分力ヲ出サ、ルコトナキ由、内場ニ此様ノコト起候ニ付テハ、是モ又一難ノ基ト奉存候、

一堂上方之処ハ素ヨリアゲノ舟乘リトモ申ス様ニテ、口バカリハ立派ニテ、攘夷ノ何ノト口ニハ申サレテモ、砲声ヲ聞テハ、既ニ当夏ノ如ク皆青クナリテ、ガタ／＼震ヒヨナシ、婦女子ニ同ジキ次第ニテ、誠ニ氣ノ毒ナルコトニ御座候、ケ様ノ役者組ニテ能キ芝居カ出来ル訳ハ無之候、嘆ケ敷事ニ御座候、

一各藩ニハ夫々人物モ段々ト出候得共、何分大分ハ天氣ト風並ヲ見合セ居候方ノミニテ、振りハマリ一筋ニ風並ニ不拘ハ會津ト此方ノミカト被存候、會津モ君公ハ愚直一篇ニテ、別ニ是ハト申スコトハ無之由ノ評判ニテ、臣下中唯直実ニ動ムルト申ス氣味ニ相聞得申候、其他水戸ハ混雜極リ、君公ハ愚昧ニシテ今デハ一國ノ治リモ付カス、況ンヤ天下ノ事ニ心ヲ用ル所ノコトニ無之、紀・尾ノ処ハ尤モ人物ハ絶テ無之、矢張御三家

ト以前ノ尊ヲ今ニ持込居、君公ハホンノ殿様ニテ本人形同然、士氣ハ素ヨリ振ハス、尊重ト欲トノ二ツニ止リ、義勇ナト、ハ度外ニ置キタルカ如シ、幕府モ頼ムニ便リナキ世トモ申スヘシ、其外藝州・加州等又同様ニテ、口ハナカク立派ナカラ、一声ニ驚怖ストモ謂フヘキニテ、別ニ論スル程ノコトモ無之、右外諸侯ノ内小藩ノ中ニ却テ能キ所有之候得共、是モ風並次第ノコトニ可有御座候、誠ニ嘆ケ敷世ノ中ニ御座候、以下略ス、

十二月<sup>(1777)</sup>日

五四八 島津主殿ヨリ島津又六郎へ五卿請取一条

之照会

此節五卿<sup>三条美</sup><sub>以下四人</sub>受取方一条ニ付テハ、筑前ヨリ人数追々被差向置候得共、未ダ何分運モ相付不申候、然ル処同藩中喜多岡勇平<sup>元通</sup>先日帰着、西郷吉之助へ致面会申出候趣ハ、此方説諭ノ趣容易ニ不致承知勢ニ御座候、然処折柄猶又同藩中月形洗蔵モ被差向、右ヨリハ未何分返答モ相達不申候処、昨日長府ヨリ長州脱藩士等名貫大夫ト申スモノ、筑前藩士早川養敬同伴極密致到着、

西郷吉之助へ内分致面会及談判度事件有之、其趣委細ノ儀ハ同人ヨリ申越可相成候間、拙者ヨリハ別ニ不申越、左候テ此節出勢ノ人数へ被成下御賦金之儀致吟味、其段ハ御軍賦役へ申付越シ候、以上、

十二月

島津主殿<sup>久壽</sup>

小倉ヨリ

島津<sup>久明</sup>又六郎殿  
喜入<sup>久西</sup>攝津殿

五四九 城下士五人組ノ命令

一 小番・新番・御小姓与打込、拾五歳以上六拾歳迄五人組合イタシ候様被仰付置候得共、即ヨリ旅行等ニテ、五人組合居事不相整、現事最通兼候ニ、以来現人数不及組合、六組家部ヲ以新敷相交、勸善懲惡患難ヲ相救、幼少等ノ家ハ深切ニ教諭致候様被仰付、手続左之通、  
一 五家組合ニ付テハ、勝手ニ遠方ノ家等不致組合、可成丈小組中家統キヲ以、小番・新番・御小姓与無差別五家組合可致候、  
一 五家ノ内移代リ有之節ハ、移行候屋舖跡へ引移候家ト五家ノ組合イタシ、其届可申出候、

一何ノ訳合有之、五家ノ内相忝候家有之節ハ、其屋敷へ引  
移候家ト五家致組合届可申出候、若又家屋敷無之節ハ  
三家迄ハ其通ニテ不苦候、二家ニ相成候ハ、近所ノ五  
家へ致組添、其届可申出候、

一近在<sup>〇</sup>刃副ノ場所へ致分散住居ノ者モ、可成丈ケ其刃ノ  
家ト五可致組合、尤遠郷等へ住居ニテ迎モ五家ノ組合  
難相整者ハ、触支配又ハ親類共ヨリ形行届可申出候、  
且御城下へ帰宿ノ節ハ其近所ト五家致組添、其届可申  
出候、

一五家致組合候テモ、訳ニ依テハ不致増減候テ不相協儀  
モ可有之候ニ付、三家ヨリ七家迄ハ増減不苦候間、其  
形行時々届可申出候、乍併御定通可成五家不致増減候  
様、移代リ等ノ節時々無手拔致組合、其届可申出候、

右之通此節被仰付就テハ、五人組合ノ節ハ直触以上  
奥向並御供目付・御目付・御軍賦役・御裁許掛見習ノ  
儀ハ不及組合、其外奥表之差別ニテ組合有之事情得  
共、此節都テ直触以上ノ奥向又ハ右御役場ニテモ奥  
表之無差別、小番・新番・御小姓与打交リ五家組被仰  
付候、寄合以上ノ儀ハ二男三男又ハ家内之者ニテモ  
不及組合作条、此旨組中へ不洩様可申渡旨、大番頭・

御小姓与番頭へ申渡可承向へ可申渡候、

十二月

<sup>〔久徳〕</sup>丹波「島津」  
<sup>〔久徳〕</sup>右衛門「桂」  
<sup>〔久徳〕</sup>龍衛「川上」  
<sup>〔久徳〕</sup>但馬「川上」  
<sup>〔久徳〕</sup>式部「川上」

五五〇 諸郷大砲備一組

一上下人数百拾四人

内士以上 八拾人  
主殿夫 四人  
從 卒 八人  
夫 丸 式拾式人

一上下人数百四人

諸郷備一組  
士以上 八拾人  
主殿夫 四人  
從 卒 八人  
夫 丸 拾式人  
右同惣物主備一組

一上下人数百五拾三人

内士以上 九拾七人

主殿夫 四人

從卒 三拾式人

夫丸 式拾人

右同一陣

一上下人数六百八拾三人

内士以上 四百九拾七人

主殿夫 式拾四人

從卒 七拾式人

夫丸 九拾人

御城下大砲備一組

一上下人数百貳拾六人

内士以上 七拾六人

足輕 六人

主殿夫 八人

從卒 拾壹人

夫丸 式拾四人

御城下備一組

一上下人数百拾六人

内士以上 七拾七人

足輕 六人

主殿夫 八人

從卒 拾壹人

夫丸 拾四人

御城下一陣

一城下人数七百六人

内士以上 四百六拾式人

足輕 三拾六人

主殿夫 四拾八人

從卒 六拾六人

夫丸 九拾四人

右之通御規模帳ニ相見得申候付、此段申進候、以上、

五五一 諸郷征討軍隊長以上人名

穆佐

談合役  
什長兼番

中村 敬介

小岩屋武右衛門

二見 覺兵衛

大口



伍長	小林	谷山	什長	小根古	指宿	山野	什長	清水	伍長	倉岡	伍長	末吉	有村隼太	大脇宗八郎
井上嘉兵衛		佐藤金次郎	鳥濱六郎左衛門		寺田新次郎	前田幸太郎	岩切七之丞	神崎新助	佐竹次郎左衛門		檢見崎剛右衛門			

曾於郡	甌島	長島	山川	志布志	高山	谷山	鹿屋	伍長	小田源之丞	伊地知喜兵衛	平田量助	松田誠介	市來平右衛門	柏原直右衛門	坂本助七	養田佐五右衛門	日高誠一郎	長山壯之丞	久保正一郎	日笠山隼太
-----	----	----	----	-----	----	----	----	----	-------	--------	------	------	--------	--------	------	---------	-------	-------	-------	-------

伍長

細山田幸左衛門

綾

今吉孫四郎

御兵具方足輕

川畑嘉藤太

中村利助

田中彦二

中村十蔵

永谷仲之丞

田中瀬右衛門

五五二 在陣人数へ被下賄料一件

在陣人数江被成下候御賄米ノ儀ニ付及御問合候処、御返答ノ趣委細致承知候、於其許モ他国出軍ノ御規則ニ被基、一日老人前八合ツ、被相渡候付、爰許ノ儀モ其通可取計旨被申越候得共、一人前六合ツ、ノ賦ニテ聊不足無之ニ、看々余計ノ御失費相及候儀ハ、如何ニモ從前ノ分難致事ト存候、勿論右ノ御規則モ、敵地踏入夜討<sup>備脱也</sup>朝掛等可致時ノ見切ト臨事之作法ト、拙者共ニハ相心得居候ニ付、此節体自国同様ノ宿陣ニテハ、強キ右ノ

御規則ニ不相振方可宜ト致評議、爰許ノ儀ハ猶是迄ノ仕向通ニテ召置候間、左様御合置給度、此旨形行申越候、以上、

平松在陣

黒田嘉右衛門

蘆屋在陣

御軍賦役衆

書添申上候、惣勢繰込ノ御手当ハ相調候共、其末敵地討入ノ手配ハ如何御着眼相成居候哉、既二十八日ノ期限モ不遠、然処蘆屋ヨリ黒崎迄ノ間道程三里ノ路程ハ、先日罷通熟見候処、迎モ大砲押立被行地形ニ無之、船路ヨリシテハ道遠ク、蒸氣船ナレハ格別、倭船ニテハ迎モ及其宿敵地討入ノ先トハ六ヶ敷、適早日出勢之薩軍敵地討入ノ期ニ臨ミ、諸藩ニ相後レ候テハ実ニ千載ノ遺憾此事ニ可有御座奉存候、

五五三 征討軍出発宿泊割

上下千人

伊集院泊

市來港屋

元治元年(1864)

向田

西方

阿久根

高尾野

米之津

一朝夕 上一斗漬物

下一斗

一昼 上一斗

下束飯

五五四 戦地里程

一小倉ヨリ安岡江

貳里

一蘆屋ヨリ安岡江

七里

一小倉ヨリ島戸浦江

拾壹里

一蘆屋ヨリ島戸浦江

拾五里

一小倉ヨリ角島江

拾四里

一蘆屋ヨリ角島江

拾八里

一角島ヨリ島戸浦江

貳里半

一角島ヨリ向津江

三里位

一角島ヨリ仙崎江

五里

一仙崎ヨリ萩江陸路

四里

一安岡ヨリ嶋戸浦江陸路

十一里

一島戸浦ヨリ萩江陸路

十二里

一御国船頭水主二拾四人小倉江差留置

五五五 鹿兒宿陣

高山物主

三原傳左衛門

右長昌院

妙正院

大崎物主

益満與右衛門

右源舜菴

高嶽院

清水物主

武宮十左衛門

右月松院

中本庵

大口物主

山田 司

右隆盛院

上山寺

國府物主

川上左大夫

右正建寺

能嶽寺

志布志物主

福崎助七

右桃仙院

雪光院

伊集院一組

惣物主

島津隼人

右實相院 吉祥院

高城郡高城 長 東 十 郎

右延壽院 西壽院

田布施 喜入雄次郎

右放光院 隨嶽院

末吉 川 田 掃 部

右了性寺 西田寺

帖佐 伊集院喜兵衛

右松本寺 善聚院

阿多 柳 半之丞

右柿本寺 大徳寺

右之通宿陣ノ賦

### 五五六 長崎通信 (外国新聞紙抄案)

先日各ニ報告スル如ク、日本ノ麥リシ様子ハ、我高官ノ人ノ中ヨリ報セシ書信ニテモ、亦我見聞スル所ニテモ知ラル、且佛良西人ノ報告ニ、和議知ルベシ、薩侯稍ク悟リ貴戚三十人ヲ英国ニ送り、諸学ヲ学バシメムトスト、薩侯ノ徳追々頭ル、ベシ、余コルネルニールノ説ニテ、大君ノ下士ト薩侯ト力ヲ合セントシテ、已ニ

事ヲ發セントスル時ニ至テ、薩侯夜中引退クト、大名薩ヲ惡ム所以ハ規則ニ触ル、タメナラス、彼レ外国ト交易シ莫大ノ利ヲ得ル故ナリ、諸大名ノ増々富強ナルヲ羨ミ懼ル、薩商鹿兒島ニテ貿易ヲ開ント欲スルニ當テ、此事条約ニ戻ルトアルニ、彼等曰フ、大君ノ人薩摩ニ入ルコト能ハス、我等何ゾ大君ヲ懼レント、薩摩又七万五千ドルヲ以テ蒸氣船ヲ買フ、余謂フ、薩侯西洋流ヲトリ、蒸氣船ノ航海ニ利益アルコトヲ知ル、當時大名薩摩ト少シク不和ナリ、薩侯又ハ其親戚ノ人ナルカ、蒸氣船ヨリ神奈川ニ赴カンコトヲ欲セリ、然レトモ大君之レヲ許サスシテ云ク、他ノ大名ノ如ク宜シク陸行ノ不便ヲ知ルト雖トモ、已ムコトヲ得ス之レニ從フ、薩侯壯者ヲ教育ノタメ英国ニ送ラムトスル意志驚クベシ、薩侯能ク予メ變ヲ図ルト云フベシ、先日ノ書信ニ、今薩侯大君ノ為メニ、長州ハ外人ヲ惡ム大名ノ中デ尤首タル者ナリ、亦下ノ關ヲ固メ、長崎ニ行産物ノ運送ヲ妨クル、已ニ淡路島ノ台場ヨリ大君ニ属スル蒸氣船ヲ砲發シ、後其船ノ重タチタル役人ヲ下ノ關ニ引留メタリ、其余ハ江戸ニ遁帰レリ、薩州大ニ長州ノ我慢ヲ怒ル、余謂フ、日本使節我國ニ来リシト

元治元年(1864)

モ、薩ノ人其中ニ加ハリテ我国ニ留リ、諸学ヲ学ブ者  
二人アリ、此人々和戦トモト(ナルカ)後必ス其君ニ大功ヲ立ツ  
ヘシ、

右去年十二月ノ新聞紙ニアルヲ長崎ノ人訳セルヲ借  
リ写ス、

薩摩

伊地知彌平太

〔表紙〕

忠義公史料

元治元年

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

五五七 〔近衛忠房忠熙ヨリ島津久光へ書翰〕

封

〔近衛〕

忠熙

忠房

〔久光〕  
嶋津少将殿

御右

尚以幾久しく祝入存候事、

春色催候、弥御安康珍重ニ存候、抑過日は御推任叙

宣下、幾久敷目出度祝ヒ入存候、就右此流儀之冠一頭、

指貫一領御祝之為進上候、此流儀之袍一領、是ハ内府

より目出度御譲り申入候、尚度々御参

朝之節、御用ヒ之様存候、荒々如此候也、

正月十六日

嶋津少将殿

忠熙

忠房

御下

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

五五八 〔島津久光茂久褒賞〕

五五八ノ一

甲子正月十七日参  
内之節被仰渡候書付

〔茂久〕  
薩摩少将

昨年七月領内江英夷渡来之節、早速攘斥、不墜

神州之威名、家来共ニモ粉骨碎身、格別尽力之由被

聞召、

叡感不斜、依之未上京不致、在国中之儀候得共、以厚

思召御馬一疋賜之候事、

五五八ノ二

〔久光〕  
島津少将

昨年七月薩摩国鹿兒嶋江英夷渡来之節、早速攘斥、不墜

神州之威名、格別尽力之由被

聞食、

叡感不斜、依之鞍置御馬一疋賜之候事、

五五八ノ三

薩摩少将

其方家来共、昨年領内江英夷渡来之節、粉骨碎身早速攘除、叡賞不斜、依之判金拾枚賜之候事、

〔由義公史料影写（東京大学所蔵）にて校訂〕

頭弁之御方当分

中御門様

清閑寺様

五五八ノ四

島津大隅守

年来国家ノ御為励精尽力致シ、当節ノ御場合ニ至候段、御満足ニ被思召候、依之御鞍置御馬被下愈精勤可致候、

五五九〔近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰〕

元治元年正月史料

弥御勇猛珍重候、扱今夕伊豫守御同道御出之旨、今朝御申越何モ承候、然ル処今日退出遲ニ可及模様ニ付、明日未刻頃愚亭へ伊豫守御同伴、御出可給候様、尹宮

前殿下被命候、仍早々右申入候、豫州へモ從其許早々御申遣シ、御頼申入候事、

忠房

〔久光〕  
早々  
島津大隅守殿

御下

於 禁中認、其上大乱書免可給候也、

五六〇〔野宮定功島津久光へ書翰〕

五六〇ノ一

過剋以中條伝達候書状、御披見と存候、右申入候、幕府より被言上候書取、弥今日差出ニ相成候哉、又ハ今日之処延引ニ相成候哉否承度、御一筆貴報待入候、匆々不具、

二月五日

定功

大隅守殿

五六〇ノ二

愈御安康万賀候、然ハ幕府より言上之儀有之、今日ニも被差出候状之旨、今朝前関白殿江内々御申入候由ニ候、幸今日関白殿初御集会有之候間、弥今日被差出候儀ニ候ハ、唯今早々御差出之様致度存候、明日ニ相成候ては、自然御評議可及延引候間、何卒宜御勘考御

頼申入候、早々不備、

二月五日

島津大隅守殿

野宮宰相中将

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

松平備前守

小笠原大膳大夫

阿部主計頭

脇坂淡路守

右之者共ニモ相達候間、諸事可被談候事、

〔残り一通は記載なし〕

五六一〔長州征伐事件書付〕

五六一ノ一

長州征伐事件御書付  
三通ノ内

松平修理大夫

五六二〔坊城俊克野宮定功ヨリ島津久光へ書翰〕

此度松平大膳<sup>〔毛利慶親、元徳〕</sup>大夫父子江御糺問ノ筋有之、万一承服不

致節ハ、御征伐可被遊

思召ニ付、其節ハ為討手其方人数差出候様、被

仰出候間、用意可致旨

御内意被

仰出候事、

五六一ノ二

長州征伐事件御書付  
三通ノ内

松平阿波守

松平相摸守

松平出羽守

細川越中守

松平安藝守

二月十三日

野宮宰相中将

坊城大納言

鳴津大隅守殿

〔島津忠承氏所藏〕

五六三〔野宮定功坊城俊克ヨリ島津久光外二名

へ書翰〕

差急候御用被為有候間、唯今早々御參可有之

御沙汰候、仍申入候、一橋殿江も申入御伝達可有之候

得共、御急ニ付、尚又申入候也、

二月十三日

坊城大納言



野宮宰相中將

松平春嶽殿

伊達伊豫守殿

嶋津大隅守殿

〔島津重豪氏所藏本にて校訂〕

五六四〔坊城俊克野宮定功ヨリ島津久光へ書翰〕

弥御安栄珍重存候、然ハ今日被為召候得共、不參被致候趣ニ承候、併參予御用候間、乍御苦勞何卒被繰合、早々御參可給之旨関白殿被命候、仍申入候也、不具、

二月十五日

野宮宰相中將

坊城大納言

嶋津大隅守殿

〔島津重豪氏所藏本にて校訂〕

五六五〔小笠原家留守居山田平右衛門覚書〕

此式通上包、

小笠原大膳大夫留守居

山田平右衛門と有之

春暖相催候処、弥御堅固珍重存候、然は過日山名次郎兵衛殿為御使者、合図打被相止度段御相談之趣、早速申達候処、被入御念候儀委細被致承知、元より大里表

之儀は、御領分御借地之儀、殊ニ昨年

勅命も御同様之振ニ有之哉ニ付、猶更御一和御戮力ニ無之候ては、皇国之瑕瑾ニも可相成儀ニ付、以来弥以御親睦諸事無御覆蔵御相談、何れ共

天朝 幕府之御趣意 御遵奉ニて、

皇国之御為誠忠被相尽度儀ハ申迄も無之儀ニ付、任御相談合図打之儀被相止候、此段為御答以御使者申入候、

覚

萩表本藩之内三人申談之上、御家中申合京都表へ罷出、公辺之御下知ニ随ひ可申、尤人数相揃候上は殿様江公辺御下知ニ御随ひ被申候様可申上旨、三人発頭人ニ相立候段、本藩之内より奇兵隊江致内通、奇兵隊之内五人萩表江罷越、右三人争論之上相互ニ切死、八人共深疵ニて即死致し候、尤酒狂之上争論之由、風説致し候得共、内実は右之通意味有之趣ニ御座候由、当月十一日萩表ニて、右之次第ニ付いづれも取捨ニ相成候趣ニ御座候、

一長州表異船手当は専ニ候処、当正月より当節は、第一小倉先陣、筑前・肥後・薩州一同押寄可申趣ニて、下雷火道具専用意有之候事、

但薩州表よりも、右同断有之趣にて、内用意専ら二候事、

一京都御公家衆之内より内通節々有之趣ニ御座候、

一小倉表之様子、下之關より委敷申出候事、

但小倉御家中着船・乗船之手前、一々下之關より注

進申出候事、

一筑前表之様子委敷相分り、右隠密之者博多町へ罷在候

趣相分、筑前表召捕手当相成候事、

一地雷火能出来候分ハ、六拾間又は百間位卷丈程打上申

候、尤不出来数々御座候事、

右之通風説之趣申上候、以上、

二月廿八日

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

### 五六六 〔近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰〕

口述

弥以御勇猛珍重ニ存候、抑長州説客一条ニ付、昨日来

彼是致、大ニ心痛致候、何分以 勅命被 仰出候へハ、

尚更説客モ行届候半欵、其上一端大樹へ從

主上御沙汰被遊候義ニも候へハ、旁是ハ以 勅命説客

被 仰付候方可然、下官ニハ存候、其許如何被存候哉、

内々御所存承度候、今日ハ各参集、其許ニも何レ御参

之様存候、一橋・春嶽之処六ヶ敷、実ニ困り入候、其

許ニハ何レ御参在之、御尽力御頼申度候、荒々要用計

如此候也、

二月十五日

二白

吳々今日ハ是非々々々々々々々々御参在之候様存候事、

内々早々

嶋津大隅守殿

忠房

御下

〔島津忠承氏所蔵〕

### 五六七 〔御賜物覚〕

五六七ノ一

封御馬毛附

覚

御鞍置

一陣ヶ森栗毛六歳 四寸五分 仙臺立

以上

二月

五六七ノ二

御道具目録

浪二碇千鳥模様

一御鞍 壹背

宮備中守時道作

塗御鞍同前

一御鏡 壹足

同人作

一御手綱 晒染壹筋

一手紉(マ) 紅糸壹掛

一押掛 紫守山壹掛

御紋附 十文字壹間

一御馬衣 十文字壹間

御紋附 十文字壹間

一轡 熊壹刺

一泥障 熊壹刺

一切附(符之) 壹口

以上

二月

五六八〔近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰〕

口述

弥御勇健珍重ニ存候、扱先時以藤井御申越之一橋へ之御沙汰書写為持上候、扱々延引之段御断申入候、今日ハ有馬遠江守暇乞ニ来、彼是卜遲延ニ相成候、先ハ午夜中如此候也、

三月廿五夜

嶋津少将殿

御下

忠房

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

五六九〔近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰〕

尚以御染筆別て希入候、以上、

弥御勇猛珍重候、扱先達て来臨之砌承候舞楽之節之玉詠、実ニ感吟不斜候、何卒此短尺へ御染筆給候様希度候、只々御斟酌無、何卒御染筆被下候様希入存候、先ハ大乱書御推覧可給候也、

卯月六日

大隅守殿

忠房

御下

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

五七〇〔近衛忠房忠熙ヨリ島津久光へ書翰〕

口述

愈御勇猛珍重候、伊達伊豫守昇進之義甚々六ヶ敷く、今朝来色々と兩人周旋致、先少将御推任と御治定ニ相成候、仍申入置候、扱々心配も致候事ニ候、先々御治定ニ相成安心候、一寸申入置候事、

四月八日

内々

忠熙

嶋津大隅守殿

忠房

御下

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

五七一〔大原重徳ヨリ島津久光へ書翰〕

其後ハ御無音無申条候、兎角不揃之時氣、愈御清康珍重此事ニ候、陳は此度御暇御願之御模様仄ニ承及大驚、是ハいかなる御事哉、兼ての 叡慮御貫徹と申ニても不被為在、又貴兄御献言之接海防備辺、於幕採用御掛りと申二も無之歟、何之沙汰も承不申候、尤御一和ハ相違も被為在間敷哉ニ候候へとも、とをか武江公から御和順の様ニ存られ、扱々敷ケハ敷存候折柄、貴兄御帰

国ニて、迹ハ如何相成候哉と、実ニ心配無此上候故、

御様子御尋申ニ参り度候へとも、先差扣書中ヲ以御尋申入候、何分 皇国之御大事、今此時と実ニ憂苦ニ不堪候俣御尋申入候、御様子ニ寄不時ニ罷出候も難計候、扱此品信龜末赤面ながら御旅館日長之御見舞之印迄ニ御目ニ掛候、御笑味ニ於ハ本懐候、早々不典、

初夏十日

二白

不時候御自愛專一と存候、乱毫御免被下候也、

嶋津少将殿

重徳

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

五七二〔大原重徳ヨリ大久保利通へ書翰〕

五七二ノ一

大久保殿

大原

口上

昨夕ハ実ニ早々気毒ニ候、其砌ノ写漸出来為持進し候、申入候通り高評腹蔵無之、御教諭可給旨中將殿へ御申可給候、要用以上、

四月十四日

二白

五七二  
別紙

差急乱書ハ元より、落手字等其俚御推覽可給候、

愚昧小臣殊ニ非役ノ身分、重大ノ御国政諫誨ケ間敷言上仕候も深恐入存候へとも、此節ノ形勢実ニ憂苦ニ不堪、微衷言上仕候、抑夷舶入港、一度攘夷被 仰出候以來、確乎ト御動搖不被為在ニ付、有志慷慨ノ徒 叡慮ノ程 恐察シ奉リ、往々主ヲ辞シ、家ヲ棄テ流離顛覆シ、身命ヲ亡歿仕候者幾千人、皆是神州固有ノ正氣ノ然ラシムル所ニ候、殊ニ一昨年以來遵奉勤王ト称シ、多少ノ大小名登京、又ハ東西ニ奔走シ周旋仕候も、全攘夷ノ叡慮遵奉セズンバ不可有ト、神州ノ大義ヲ存シ候テノ儀ニ候ヘハ、則大樹再上洛、尤御一和ヲ先トシ、攘夷御一定ノ為ニテ可被為有ト、天下仰望シ奉リ居候処、今ニ攘夷御一定無之ニ付、乍恐天下ノ人々攘夷ノ 叡念被為弛候様ニ存上候テ、実ニ天下人心向フ処ヲ不知、洵々トシテ薄氷ヲ踏カ如ク罷在、誠ニ以苦心仕候、然ルニ横濱鎖港ノ事、更ニ御尋ノ砌、不経数年征夷ノ実相行ヒ、 叡慮ヲ奉安候様トノ 御沙汰モ被為在、御請ニハ是非共成功可仕候、就テハ沿海ノ武備充実可致ト

ノ言上モ有之候故、 叡慮不被為弛御儀ハ奉畏候、此鎖港ト申モ、攘夷ト同様ト存候、子細ハ鎖港不承服トテ、一旦談判ニ及候儀、中道ニシテ廢シ候事ハデキ又事ニ候、其上是非共成功可仕トノ言上有之候上ハ、不承服ノ時ハ必戰爭ニ可相成候、或ハ償金ヲ遣シ候積リニ候 軟、償金遣シ候儀ハ、神州振古未曾有ノ恥辱、天下ノ人心關係可仕、決テ不宜儀、元より償金ノ事可有咎ハ毛頭有之間敷、何レ談判ヲ以鎖港ニ可相成候、然ハ若不承服ノ節、戰爭ニ到リ候ハ、掌ヲ指カ如ク候、則御請ノ辞、事情測リ難ク候間、沿海ノ武備ニ於テハ益勉勵ト有之候、然ハ攘夷ノ心算内ニ相蓄ヘ、鎖港談判仕候ニ候ハズヤ、攘夷ノ策略有之候ハ、鎖港ト被申上候よりハ、攘夷御請被申上、扱鎖港談判ニ取掛リ候ハ勿論、防備ノ事ニ到ル迄、速ニ布告ニ相成リ候ハ、実ニ倒懸ヲ解置郵シテ命ヲ伝フル如、武備不日ニ充実シ、士氣一時ニ振起可仕、且世上ノ人心モ折合、 叡慮モ從テ被為安候場合ニ可到ト奉存候、根元攘夷ノ議論ハ、是迄人々言上も有之候事故、今更申上ル迄も無之候ヘハ差置、全体ケ様ニ天下紛々仕、大樹一年日數モ不過ニ兩度モ上洛、諸藩モ多分滯京候所以ンハ、本

来ノ 叡慮ヲ洞徹安置シ奉ランカ為ニ候ハズヤ、然ルニ幕府攘夷一定無之、鎖港ノ事是非共成功可仕ト言上有之候、則前条鎖港攘夷同様ト見込言上仕候、則重徳見込ニ違ハズ候ハ、攘夷可為候ヘトモ、攘夷一定トノ御請無之候テハ、攘夷ノ 勅諭御貫徹トハ難申、勅命遵奉上下安堵ト申場合ニ無之候、重徳見込ニ違ハズ候ハ、何卒攘夷一定トノ御請言有之候様トノ 勅諭被為在度奉存候、左候ヘハ從來ノ 叡慮御貫徹、君臣ノ大綱相立、大樹再上洛御一和順ノ詮ニテ可被為在ト奉存候、尤幕府再上洛仕候カラハ、天下ノ人心ノ帰向ヲモ洞察シ、新政ヲ施行シ、 叡慮ヲ可被奉安ノ処、米金ノ利ヲ以人心ヲ和ケ候迄ノ儀、是只縉紳数家ノ事ニシテ、天下人心ノ感服仕候儀ニ無之候、乍併貢獻手厚并ニ為ス所等、

朝廷尊崇ノ意ハ顯然、皆人ノ知ル所ニ候ヘ共、只斯国体タル攘夷ノ一事一定無之故ニ、人心折合不申候、人心折合不申テハ如何様ノ貢獻有之候トモ、実ニ詮ナキ事ノミナラズ、人心却テ相激シ可申、相激スルノ余リ、和州・但州一件ノ如キハ小事ニテ、諸藩ノ有志等各々望ヲ失ヒ、自国ヲ固守割拠ノ勢成リ、上ノ命令ヲモ輕

ンスルノ際ニ到リ候テハ、應仁ノ鑑ミ、不遠大乱ノ源ト相成候ハン欵ト深ク憂慮仕候、應仁ハ我邦内ノ事ニ候ヘとも、此度ハ外夷ニ渡リ候事故、別シテ憂惱仕候、乃大樹御請ノ辞ニモ夷情測リ難ニ付、海岸武備充実可仕トノ事共被申上候カラハ、前条内ニ攘夷ノ心算有之候テノ事ニ可有之候、左候ハ、鎖港ト名ヲ易ヘ候ヨリハ、矢張攘夷ト言上ニ相成、天下ニ布告有之候ハ、則勅命遵奉、人心自然ト相治リ、一致仕、彼有志尽忠執義ノ徒奮踊シ、皆競テ先鋒タラン事ヲ願可申、則尅々武夫、

皇国ノ干城ト成リ、内憂日消シ、外患モ畏ル、ニ不足様可相成ハ必然ノ理、仰願クハ只幕府言上ニノミ御隨順不被遊、 綸言如汗キノ儀ヲ以テ、攘夷速ニ一定仕リ候様、 勅諭被為在候様ニト奉存候、且又鎖港ノ為使節差遣シ、夷情測リ難キ節柄ニ候ヘハ、軍艦ヲ率ヒ何時渡来モ測リ難ト存候、是夷情ノ測リ難キ処ニ候ハズ哉、沿海ハ勿論ノ儀、浪華海岸ノ処ハ、神速トノ被仰出モ有之候ニ、漸一橋中納言江、接海防禦指揮被申付候迄ノ儀ニテ、今ニ衆人耳目ヲ驚シ候程ノ手段ヲモ不承候、何レ遠方ノ者、眼ニ見候事ハ無之候得共、手

段ヲ聞候テモ、真実ノ事ニ候ハ、感服可仕候、此感服仕候処、則人氣ノ治ル処ニ候、嚴重ハ勿論神速ニ可致、尤始より御沙汰ノ事ニ候間、御催促被遊候様ニト奉存候、前言狂直ニ渡リ、忌諱ヲ不憚ノ罪恐々惶々仕候、愚忠深御涵容奉希候、

四月六日

重徳百拜

右一紙

小臣重徳昏昧無智申迄も無之候へとも、先年より国家ノ御大事ヲ苦心仕候儀ハ、今以一日ノ如クニ候、既勅勸ハ被免候得共、非役ノ身分ニ候へハ、所謂不在其位不謀其政ト有之候故、先達て以来差扣罷在候得共、此節ニ到攘夷ノ 叡慮被為弛候欽坏と風説仕、万一天下ノ姦雄諸道ニ割拠シ、天変ヲ相待候様ノ次第ニ可到欽ト杞憂ニ不堪候、伝ニ工執芸事以諫トモ有之候得ハ、苦心ノミ仕候テハ、君臣ノ実情無之ニ似候間、不顧恐別紙言上仕候、何卒御海恕ヲ以御一覽之上不苦候ハ、叡覽ヲ経候ハ、生前之本懐無此上候、乍併言狂直忌諱ニ触レ、樽俎ヲ越へ候罪謝地無之候、頓首、

四月六日

重徳

右ノ一紙ハ、殿下江書添ニテ上ル、

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

五七三 〔伊地知正治ヨリ伊地知貞馨へ書翰〕

〔頭註〕

「元治元年」  
尚々今晚醉上ニ任セ認申候間、乱筆御免可被下候、

早々蒸気船ヨリ浪華迄ニ御出張之由、御英断ニハ閉口仕候、末弟依旧無事、此節ハ御留守ニテ、在京不肖之者禁裏御警衛人数ニ相加里、武門之冥加無此上次第、難有仕合奉存候、仍テ承及候処、御国許ニモ諸僣沸騰、且御用金等至極御差支之由、先生御老人万何之御大任ニテ、御配慮之程奉察候、扱テ鳥渡ナリ共得拜願候テ、彼是申承度山々存候得共、迎モ其儀モ相叶申間鋪候得ハ、折角御自愛御尽力被下度奉願上候、愚者千慮或一得モ候半軟ト奉存候間、追々御留守中閑暇ニ任セ、先生大印等へ所存之趣モ出来候ハ、可申上含御座候間、是又宜敷御周旋奉希候、先ハ御見舞得貴意度、荒々如斯御座候、尚期後音候、恐惶敬白、

子四月十七日

伊地知正治

伊地知壯之丞様

参人々御中

五七四 〔大原重徳ヨリ島津久光へ書翰〕

五七四ノ一

追日快晴薄暑相催候、逾御壯健珍重此事ニ候、陳は此

度御暇御願之通り相濟御帰国、今日ハ御発興御安慮可被成、是亦珍重存候、猶海上無異御帰着、御吉左右御待申候、長々御滞京聊無御障、万事御周旋御勤功ニ付、段々御昇進并ニ御拝領物等幾久敷芽出度存候、猶又不相變御勤、王御尽力所祈ニ候、仍早々要用耳、御見送迄呈愚札候、謹言、

四月十八日曉天燈下認

重徳

嶋津中將殿

五七四二一  
副啓

此度御帰国之事、今日杯とハ実以思ヒモ寄ぬ事、先日大久保ニ一寸承候、実ニ無拠御訳柄、御むりならざる御事なから、御帰国にてハ迹之処実以不安心、如何相成可申哉、小子一人御案し申上候も、所謂杞人之憂欵ニハ候へとも、心配無此上候、御遺策ても御申上被置候と存候、御面会申候得ハ、其辺も篤と御尋申承り度心得ニ候江共、其期ハ不来候へとも、日月ハ不待今日と相成、実以残念千万ニ存候、且又献言之事披露之後ニ候へハ、別ニ御存意不被示との

儀、昨朝大久保より御念示御尤ニ承候、従之披露後之事ニハ候へとも、猶又御高評非難も承候へハ、後來之心得ニも相成候事故、何卒矢張高評非難も御面働ニハ候へとも、相願度存候、且又去冬以市蔵、内々被下物之事厚辱存候、御請申からハ、夫々相応之御挨拶御答礼等も可致筈ニ候へとも、元来小家ヲ御憐察にて之事ニ候へハ、左様ニいたし候てハ、却て御心切ヲ空敷いたし候訳柄ニ候故、総て行と、かぬ事共、是亦御面会候ハ、心底可述尽之処、左もなく残念ニ存候、御量察御海恕可被下候、呉々もくだく敷候へとも、将来之処御案し申候、迺も此俟平天下とハ存られず候、御勤、王御依頼無他念候、攘夷ノ御献言真ノ攘夷と御申上、実ニ感服仕候、何卒々々真実之事ニ相成候様祈申候事ニ候、是等之儀ハ、いつ迄申ても尽ぬ事筆留候、何も御量察候、追々暑ニ向時氣、御自愛專要候也、

重ての時をはいつと白瀟を

へたてゝ帰る君をしそ思ふ

口上

尤即答ヲ不勞、船中御徒然欵、御帰国之上ヲ期候、



以上、

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

五七五〔近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰〕

従

内丞相公御書

口述

弥御勇健珍重候、抑明烏は御発途今更残懐ニ候、昨烏は  
来臨、不相交何之御風情も無之、其上実ニ長御引留申  
入、嚙々御困りと存候、其砌一寸申入候麓青毛の馬、  
何卒々々御所望申度候、其許御領之由ニも承候へ共、  
何卒不苦ハ御所望申入度候、御領掌給候ハ、深々忝存  
候、先は要事而已如斯候也、

卯月中七日

嶋津中将殿

忠房

御下

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

五七六〔近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰〕

五七六ノ一

尚以、毎々御所望申入、甚申入兼候得共、何卒々々  
宜御頼申入候事、

薄暑之節、弥以御勇猛珍重候、誠ニ旧冬来長々御滞京、  
段々不一方御粉骨御尽力、実ニ御苦勞々々ニ存候、先  
々御滞無御帰国ニ相成、嚙々御畏と存候、誠ニ時々刻  
々国事切迫之形勢、

朝憲御衰頽、実ニ此末如何可相成哉、唯々心痛之事ニ  
候、前殿下、愚拙国事御用掛辞退候処御差上、前殿下ニ  
ハ再三之御辞退ニ付、被 聞召畏入候、愚拙儀ハ不被  
聞召、甚々痛心之事ニ候、御察シ可給候、尚又此末御  
上京、勤王ヲ被尽候程祈々入存候外無他候、扱先頃  
九寸三分之短刀御所望申入候処御恵給、早速ニ拵申付、  
度々重宝致樂シミ居候処、此頃舎弟一乘院門跡上京ニ  
て、段々所望無抛譲り候事故、甚申入兼候得共、九寸  
三分之古刀之短刀御所望申入度候、何卒恵給候ハ、  
深々大慶ニ候、仍申入試候、扱此茶菓御一笑ニ進入候  
事、

五月六日

嶋津中将殿

忠房

御下

一箱修理大夫殿へ進入申入度、宜御伝希候、以  
上、

副書ニ申入候、先達てハ修理大夫殿へ御所望申入候反  
物類、早速惠給、深々喜悅候、早速より色々ニ致、深  
々喜悅候、宜御伝声可希存候也、

忠房

嶋津中将殿

御下

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

五七七 〔大原重徳ヨリ島津久光へ書翰〕

二白、時氣御自愛專要所祈ニ候、万々後便ヲ期候也、  
風説書一冊ハ御家来へ渡し置候、御覽可被下候、以  
上、

其後ハ打絶、御無音無申条事ニ候、追日暑氣逾御清康  
珍重存候、陳ハ当節時勢大ニ切迫いたし、心痛のミの  
事ニ候、就てハ関東之模様風説書、風と手ニ入、甚數  
事共大ニ仰天いたし、虚実之程吟味いたし候へとも、  
更ニ相分り不申、実ニ心配如何可致、当惑之処へ幸輔  
来り、段々咄しいたし、虚実不相分候へとも、先書取  
ヲ為見候処、何卒真偽吟味治定、御国元へ可達との事

二付、追々吟味候へとも不相分、其内愚案ニ逆も分明  
ナルコトハ分ル間敷候へとも、風説ハ風説ニシテ、全

体之処一帳ニ認候通り之事故、虚とも定メかたく、実  
とも定メかたく候へとも、自然真実ノ時ニハと存候へ  
ハ、何とも御六ヶ敷と御案し申上候ニ付、貴兄御上京  
ならてハと存候ニ付、一帳ニ認候次第ニ候、何卒御勤  
弁所願ニ候、巨細御使之仁可申述、先小子之存意荒々  
申入候、勿々要用而已如此候、不典、

五月八日燈下認、乱書御免御推覧

嶋津中将殿

重徳

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

五七八 〔大原重徳ヨリ島津久光へ書翰風説書〕

〔別紙風説書〕

愚忠

関東之令ニ長州征伐ト云々、征伐之不可ハ言ニ不及事  
也、付若又進発々々ト鳴シ置、臨期所勞ト致ニテ進發上落セサル時ハ、  
築幕府ノ好更正サレ候、コトニ大落滞京ナレハ御都合ニナリ候也  
但シ内存ノ趣風説アリ、風説ノ真偽ハ不分明ナレトモ、  
幕府従来之所置ヲ以テ量察スルニ、近比別シテ大凡  
朝命ニ応シタルコトナシ、此レヲ以テ考フレハ、道路

ノ風説モ偶言ニ非ル歟、但シ偶言ニモセヨ、

朝廷ニテ其御心得方在セラレズテハ、叶ハヌコト也、  
(萬カ)

然ルニ恐レ多キコトハ、云迄モナケレドモ、恥モ云ハ

ネバ、理カ聞ヘヌ類ニテ、包ンデ居テハ、却テ御為ナ

ラズ、止ヲ得ス申述ル也、 朝廷徳川氏ニ、天下ノ政

事ヲ御委任此方、何事ヲモ凡申シノ俛ニ、 勅許ニナ

ル遊シ来リニテ、御否ミ遊シタル事凡ナシ、幕府モ申

シ乞フ事ハ、其俛 勅許ノ事ト、思ヒ込テ居ル仕来リ

也、夫故ニ外夷ノ事モ申乞ヘハ、何レ 御免ニ成事ト

心得、堀田備中守上 京シテ、相伺タル処、

皇国ノ御大事タル故ニ如何ニシテモ、勅許遊バサレス、

夫ヨリシテ段々行違トナリ(註此間三種々有レトモ事長ケレハ略ス)、既ニ別紙

ノ様ニ風説ス、道路ノ流言採ルベキニ非ザレトモ、従

来ヲ以テ考フレハ、虚言トモ思ハレス、ヨシヤ虚言ニ

モセヨ、捨置ルヘキニ非ザレトモ、彼御仕来リノ上ニ

事ニハ馴レ玉ハズ、ヤ、モスレハ幕ノ勢焰ニ御恐ニ

テ、柔弱ノ御評議ニ落入ル事ニテ、タマ<sup>レ</sup>確乎タル

御議論有トモ、暴説杯ト御採用ニ成兼、有志ノ徒切齒

扼腕スルコト也、然ルニ此度ノ模様ハ、先日二月廿一日 関白

殿ノ御糺問ニ、老中衆当席ニテハ至当ノ仰故ニ、一言

ノ答ヘ申上様モナク、恐入テ退シナレトモ、(註既ニ休所)

殿ハ荒々敷テイカ)内心如何有リシニヤ(註幕府恩顧ノ者カ、国事掛リ)

スト云シトナリ) 豊州カ又イカナル大奸ヲ金候哉モ難計、(過慮ノ余)

テ、此趣大樹ニ申入ヨト命セラレタルニ、其御請返答

モ一言モナクシテ進発、 御満足ニ 思召ストノ事

ニ、御請ヲ申上タルハ如何ノコトナラズヤ、左スレハ

何様ノ工ミ有モ知ルヘカラザルコト故ニ、弥以 朝廷

ニテ、此度ノ御心積リハ格別ニ御評議ヲ尽サレネバナ

ラヌ御事也、然レハ愚蒙ノ小臣ト雖トモ、急度千方思慮

ヲ尽シ、献言モ致スヘキナレトモ、此度ノ事件深ク思

慮ヲ回ラセハ、中々容易ナラサル模様ニテ、浅慮ノ及

ブ処クコレ無ク、然レトモ黙止ニ堪ズ、情思フニ 朝

廷ニ御後楯サヘ有レバ、何ゾ恐レ玉ハンヤ、此後楯ト

云フハ、則チ外藩衆ノ上京ニテ、大樹公上洛ノ砌リ、

尊奉勤 王ノ道ヲ主張セラレ候ハ、幕府何ゾ手ヲ出

スコトヲ得ンヤ、然レバ偏ニ大祿ノ外藩衆上京ヲ希フ

所也(一藩ニテモ)、然レバ大祿外藩衆ヲ 召寄せラレ候

テ、然ルベキ処ナレトモ、 朝命ニテ召トナリテハ

(付箋此度ケ様ノ御朝議ト云フニ非ラス、御平常ヲ以テ奉置察処ケケ様ナル)

何トノフ幕府ヲ向フ座ニ遊バサレ、相手取テ事ヲ始メ

玉ヲ振合ニ相当リ(是前条御任来リ)、幕府モ是ハト存スル  
意味モ生ズル筋合ナレバ、召寄ラル、コトノ成ガタ  
キ次第也、願ハクバ藩主々々自分ト心付上京ナサレナサレ(註大  
氣燄等ト云フ趣ニシテ、并天氣伺ト云  
フ氣味、但シ断然ト、天氣何歟存意次第)、乍去自分心付出ルト云  
フコトガ、彼因循家又ハ時宜ヲ考フル藩ハ、迎モ出間  
敷考ヘラル、也、ソコヲ断然ト出ルハ、薩藩ヨリ外ニ  
ナシ、ヨシ出タ処ガ、至極宜敷ト云フ場合ニ至ルトモ  
存シ兼ラル、也、右故ニ偏ニ薩藩ノ出ラル、ヲ頼ムコ  
ト也、薩藩断然ト出ラレタレバ、因・備ノ類押切テ出  
ラルベシト思ハル、扱上ノ屋敷ニ居ラレテ(但シ屋敷ニ只シ  
テモ)、尊奉勤 王ノ道ヲ彼是周旋ナサレ候ハ、幕府手  
ヲ出スコト有間シ、是何ヨリ十分ノ御後楯ニテ、幕府  
ノ失政モ改マルヘク覚ユ、泰平ノ基本ト存スル也、然  
ルニ断然ト上京ニ付テ案シルコト有リ、彼諸藩ガ目ヲ  
付、會杯モ疑テ居ル故ニ、サレバコソ薩ガ出タ、是ハ  
一趣向有ツテノ事ト云フベシ、是甚困リタルコトナ  
リ、サレトモ此度ノ事件ハ、風説モ実ニ道路ノ風説愚  
案モ実ニ愚案ニテサシタルコトモナケレバ、真ニ無益  
ノ心配(付箋 若シ後悔改心ノ模様ナレハ、夫コソ重疊ト  
分ニ尊奉ヲ行ナハシムヘキ機会ナラスヤ)若シ実事ナル  
時ニ、其御用心ナキ時ハ、実ニ大御狼狽、其時ニ臨ミ

誰ヨ彼ヨト 仰出サレテモ、時ノ間ニ逢ハヌノミナ  
ラズ、其内ニ強請ニ怖縮遊バシ、和親交易モ 勅許、  
兵庫開港モ 御聞濟ト云フコトニナリタランニハ、実  
ニ 皇国ノ恥辱、一度 勅許之旨夷人ヘ申聞候ハ、  
遂ニ挽回スベカラズ、臍ヲ噬ムトモ及バジ、所謂瓦ト  
成テ、全キハ実ニ無念ノ至極ナラズヤ、是ヲ思ヘバ人  
口ハ兎モ角モ、至誠懇情ヲ以テ、只一心ニ 皇国ノ御  
為ヲ尽サレンコトヲ希フコト也、小生等如何ニ思ヒテ  
モ、無力ノ者何トセン、只々歎息仰天ノミ、一橋ノ極  
意ノ処、如何トノ事モ至極当り前ノ事ナリ、然レトモ  
一通リ誠忠勤 王ノ積リニテ不都合ハアルマジキコト  
也、若此人不所存ナレバ、諸共ニ誠忠勤 王ニスルト  
云フ程ノ心ニナツテ見レバ、一橋ガ不所存デモ、皇  
国ノ大事ニハ替ラレヌコト故、カマハズ断然ト行フガ  
ヨイ、ソコ迄断然ト決心シテ勤 王ヲスルニ、何ノサ  
ハルコトカ有ランヤ、 朝廷御微弱ト雖トモ、カク迄  
(是カ御後  
種ナリ) 精忠ヲ尽スニ、夫デモ一橋ノ申分ニ御随ヒニ  
テ、薩ヲ捨玉フ道理ハナキコト也、夫迄勤 王忠節ヲ  
尽サル、トモ、小藩ニテハ万事行届カヌ故ニ、兎角薩  
州デナケレバナラヌト存ル也、何卒此辺ヲ差斟ミ、厚

ク御勤弁有テ、大樹公上坂迄ニ上坂ニ成リ、連イテ上京祈ル処、是小生ノ 皇国ヲ思フ微忠也、

此条ハ総小子ノ心ニテ、 朝議ニテ無之、思俟ラ認シ故、不都合ノ文言御免可被下候、

重徳

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

五七九 〔伊地知貞馨ヨリ大久保利通へ書翰〕

巻封

大久保一蔵様

伊地知壯之丞

御着相添

御安着後弥御清福奉恐賀候、然処御母堂君御煩之由、御着涯より嚙御配慮之筈奉察候、即御祝義且御見舞ニ参上可致筈之処、小子ニも船中より風邪氣ニテ、御届も強て罷出、一兩日ハ致連勤候得共頭痛甚敷、一昨日より引入、其故御不沙汰仕候、随テ

御着 一折

右は別て輕少分ニ御座候得共、御安着ヲ奉祝印迄ニ進上之仕候間、御笑留可被下候、平愉之上参上拝接、可

奉得高意候、以上、

(慶応三年乙) 五月十二日

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

五八〇 久光公ヨリ小松帯刀へ与ル書

不文推覧頼入候事、

此冊ハ過日從長州差出候書付写ニテ、右ハ御委任之事故、幕府へ可差出様トテ被差返候事ニ候、為心得内々入覧候、大島并宮内へモ為見度存候、大嶋へハ過日一寸仮写之俣入覧候得共、尚又為見置度存候、宜敷頼入候事、此書付返却ニ不及申候、以上、

五月十四日夜認置

小松帯刀殿

為

五八一 〔新納嘉藤ニヨリ吉井友實へ書翰〕

包紙

京都

江戸

吉井中助殿

新納嘉藤ニ

五月十九日

阿部侯藩福村繁次郎、江川殿方鉄炮手次中濱万次郎儀、

五月十九日

新納嘉藤二

御問合之趣致承知候、両人共尚又脇田市郎を以直ニ引

吉井中助殿

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

合心底間糺候処、別儀無之候間、万次郎事ハ御名内之

五八二〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

願書仕立、先板倉侯江罷出、御用番ニては無御座候へ

〔包紙なし〕

共、別段之願書ニ候間、御落手被下候様申候処、いつ

御側役

自京都

れ御談合可有之、篤と御差合被成候、願書ハ御用番井

大久保一蔵殿

大島吉之助

上候へ差出候様致承知候間、井上候方は知人之佐藤八

十郎殿へ、無拠筋申聞候て差出候、大かた相済可申候

追て、水人吉成方江、佐久間修理も近日引付候由ニ

年限ニて、御借人之筋ならてハ急埒六ヶ敷候間、三ヶ

御座候、是等ハ当分暴客之恐れも有之、且他日用ひ

年ト申立置候、済候上ハ如何様とも仕安事ニ候、尤万

候賦と相見得申候、

次郎も年限ニて申出候方よろしと申候由、白川侯之方

兩度書面差出置候処、淀川満水ニて出帆出来兼、滞坂

は御留守居金澤才右衛門と中人江面会、得と申込候処、

之段申遣候間、又々申越候、今朝承候趣ハ、因州益田

十分聞取被申、当分御在府之事ニも候間、不遠決て御

正人と申者、一橋より被召呼被相達候ニハ、此節長州

承知之御返事可被為在と申候、是は無子細相済可申と

江襲来之儀無相違候得共、いまた日限之儀ハ不相知由、

考候、未為何儀も無之候、若御延相成候ハ、催促い

然処隣国之訳を以、因州より援兵被差出候てハ不相済

たし可申候、万次郎事ハ、御勘定奉行も調下り申候も

候付、得と君侯江申上、ケ様之御計無之様、尽力可致

の、由候間、其筋へも御内意申置候、乍序申上候、細島

との事ニ御座候処、益田御返答之趣ハ、於此儀ハ何そ

之儀は、今朝も奥御右筆江出申候、其事ニ付足輕差立

長州を相救ふと申ニハ無之候へ共、最初 朝廷より攘

候、田中より細事申上候間、おのつから御聞可被成候、

夷之筋も篤く被 仰出、且 皇国之土地彼等ニ汚され

候てハ、

此由迄早々、以上、

神州之御恥辱と相成儀ニ御座候間、 皇国之御為ニ応  
援被為成賦、御決心相成居候間、如何ニも御受ハ出来不  
申段、申切り候由ニ御座候、就てハ備前之儀ハ、先ツ  
一橋之口ニはかり候半欵と申事ニ御座候、右益田之説  
ニ、外両藩ハ応援之方も有之段、申居候由御座候得共、  
何方欵ハ不相分事ニ御座候、○一橋之説ニハ、只今幕  
府ニおひて、是非長州江ハ異船不差向様談判之事ニ候  
得共、聞入候欵無覚束、いまた期限ハ不相知との事ニ  
御座候由、日限いまた不相定処江、援兵不差出様御伺  
共いたし候儀ニ御座候へハ、是等之御決着相居候ハ、  
襲来之日限を極め候事欵と申説ニ御座候由、援兵不差  
出様御達相成度との御願申上位にて、襲来を止候談判  
央とハおかしな咄ニ御座候、何欵其辺之処ニ見合候廉  
有之ての事と被察申候、只今ニ到りてハ、各藩一橋を  
悪シ候勢ニ成立候次第ニ御座候、是非一橋ニハ長州を  
挫て、其上攘夷之筋を相初め候存慮と被相伺候得共、  
夷人之手を借り長を挿候始末、可悪之業ニ御座候、此  
旨今朝迄之形行早々申上候、尚追々形勢ニ依申上候様  
可仕候、恐々謹言、

大島吉之助

六月朔日

大久保一蔵殿

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

五八三〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

巻封

御側役

京都より

大久保一蔵殿

大島吉之助

急手  
六月朔日仕出、同廿七日落手

霖雨難晴候処、愈以御安福令欣賀候、抑過日一往御評  
議ニも相成候備前建白御返答一件、議奏之方にては別  
紙書取草稿も出来候得共、今一応不十分存候間、乍不  
都合別紙草紙之方両様無きと認試候間、先々御内談申  
入度、何卒無御腹蔵、殿方ニも御深考之上、御添削希  
入候、過日来一橋より達て申出居候別紙書面、認直し  
申来候間、先々令入覽候、併文面之替り候丈にて、何  
も趣意ハ替り不申候間、其辺精々申聞候得共、何分右  
様之達シ書不相成デハ、幕府之為にては無之、 朝廷  
之御為ニ不相成旨、達て申出居候付、尚又御勘考希入  
候、何れ両三日中再心御評議物哉と存候、先ハ荒々用

要而已如此候也、謹言、

六月朔日

〔備大寺公純〕  
右府公御始

二條關白  
齊敬

当節浮浪之輩、当地徘徊致シ候哉ニ相聞候間、兼て被仰付置候巡邏致候者共江、尚又嚴重相心得、聊ニても怪敷もの有之候は、無用捨速ニ召捕、町奉行所江可差出候、尤手余り候者、切捨候ても不苦、且捕違候分も不苦候間、夫々江可相達旨、年寄共申聞候付、為御心得申進候事、

五月

御所向為 御警衛、上

京罷在候兩番頭四組共、非常之節ハ

東山院御旧地前江相詰、

御警衛相勤候様申渡置候間、其段御三卿江御達可申旨

年寄共申聞候事、

五月

大樹上 洛列藩建議之趣も有之、国是論御治定ニ付、

先達て被 仰出候通、一切幕府江御委任之通、政令一

途ニ出候様ニとの

御趣意候間、列藩より直ニ建言等致候てハ、御差図不

被遊候間、関東江可申立、尤関東往復之時日を難待事柄は、所司代江申出、都て先前之如く、幕府之指揮ニ随ひ可申旨御沙汰ニ候事、

野州太平山ニ屯居候者より、歎願候書取を以、備前少将より歎訴有之、則 言上ニ相成候処、水戸贈大納言遺志を統、報国之趣神妙ニ被

思召候、是非共鎖港之成功可有 奏上折柄、尽忠之士可令為先鋒者欵、尚人心居合候様取計可有之御沙汰之事、

或ハ

野州太平山ニ屯居之者より、歎願之書取を以、備前少将より歎訴有之、則

言上ニ相成候処、水戸贈大納言遺志を継願出候段、神妙ニ被

思召候、幸方今總督之儀ニも有之、且ハ水・備共親縁之間、旁一橋中納言江御任ニ相成、早々人心居合候様可取計、尚又幕府ニも可伝達被

仰出候事、

備前少将

野州太平山屯居之徒、愁訴ニ付歎願之趣、神妙之儀被



聞召候得共、先達て幕府江

御委任、屹度可有攘夷成功儀と 思召候、各於幕府不能成功候は、

叡慮之御旨も被為 在候間、其節奉

叡旨、為 皇国可致忠節、当今之処暫猶予、幕府之処

置可相見合様被 思召候ニ付、右

御趣意篤と相心得、可示諭

御沙汰候事、

右之通被 仰越候付、御廻被成との趣にて、

内府様より大夫江参、いまた御内評欵相考居候処、

浪士御取締向之御書付ハ早出候由、

内府様ニも跡以御聞被遊候御事ニ御座候由、余程御

立腹之御様子と被相同申候、就てハ諸侯方之建議も

御差留之儀、頻ニ御不同意之段被 仰置候由、然共

御引留被為出来候丈ケニ無御座候由にて御座候故、

是等之廉を以御辞職之 思召ニ御座候由、只今にて

野宮幕吏ニ被欺、二條公江申上国事掛之御方々江

御談し有之候へハ、必異論も出来候間、直様御達相成

候様申上、一々跡以為御知相成筋と被伺申候、左候て

野州之浪士輩ニハ左之通書面相直り出候由ニ御座候、

野州太平山ニ屯居之者より歎願之書取を以備前少将より歎訴有之、則

言上ニ相成候処、右建白中去年八月一挙之文意ハ甚

御不審候得共、其余水戸贈大納言遺志を継、報国尽忠

之志神妙ニ被

思召候間、尚早々人心居合候様取計可有之御沙汰候事、

西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰

五八四 西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰

尚々〔采〕〔正風及ヒ五六ヲ云〕両高崎之儀、今ニ暴客之徒悪ミ甚敷事ニ御座候

間、暫時ハ御引止相成候様御計被下度、是又御頼申

上候、

暑氣相催候得共、

御両殿様益御機嫌能被為遊御座、恐悦之御儀、御互大

慶之御事ニ奉存候、次ニ御賢母様御持病差起、御配慮

之段、御着涯嘸哉御苦心之筈と案劳此事ニ御座候、乍

然御快方之段大慶之御事、我々共ニも嬉敷次第ニ御座

候、時分柄折角御加養奉祈候、陳ハ

尹宮之御一条追々申上候通、是そ御悔悟之御姿無御座、

伊丹ニも已ニ退隠之賦にて、引込候位之御事にて、抑

も御用ヒ相成模様ニも無之、

朝廷ニおひて、堂上之御受も不宜、何篇幕府江御媚被為成との事ニて、一同悪敷申上候御事、残念之次第第二御座候、貴公あれ程堅を御碎き被為成候詮も不相見得、込入候次第第二御座候、非藏人之者手寄出来候間、朝廷向段々相探候処、何篇幕府江御委任と被仰出候儀、諸藩より色々と難したる建白共有之、畢竟

尹宮之御策と申事ニて、尚又御評判近來悪敷御事ニ御座候処、只御恐怖而已ニて、御改心と申廉も不相見得、少し御助りニ相成候処ハ、

主上之御親ミ不御難計ニ御座候、此処些違ひ候て、如何成行候も難計儀ニて、御危き御事ニ御座候間、今暫時ハ御見合被下候てハ、何様可有御座候哉、

尹宮江も小松氏より宜敷御申上相成居、御不都合之儀も無御座候間、当年中位ハ御引延被遊候方、御宜敷ハ有御座哉と奉存候、御倚頼被遊との御事ハ、表通ハ今ニ相替不申候、

一 献錢之御一条ハ、暫時御見合相成候方宜敷ハ有御座間敷哉、当分ハ

朝廷ニおひてハ幕意相塞、此御方様御受も不宜筋ニ被

伺申候間、無益之場相成而已ならず、却て何と欺御不都合之事も到来も難計御座候間、少し御見合之方可宜欵と奉存候、此變動ニ依り、自然と如何ニ欵機會を持起候事も御座候半欵と奉存候(朱)「(琉球通宝及ヒ天保通宝十万両丈ケ献上ヲ云フ、市來カ献言ニ出ツ)」

一 帯刀殿御儀ニ付てハ、別紙御問合申上候通、今ニ御下り相成候てハ、頓と此方ニおひてハ込入次第第二御座候、然しそふ計も申居候てハ、不相濟儀と奉存候得共、此機會ハ御見合相成候て、御帰国之処起て御願ニ御座候間、左様御含可被下候、いづれ御下り相成候ニ付ては、御跡ニ備り候御方御周旋被成下度、其御人体迄申上候てハ、余り恐入候得共、岩下佐州上京相成候御手数ハ、相調中間敷哉、旁御熟考奉願候、

(朱)「猶心ニ御一兵也」  
中原儀木脇着次第第二ハ早々罷下候様取計可申候、折田(朱)「靈」ハ、幕府向都合ハ如何様共いたし可申候間、先不罷登候様御計可被下候、

一 長州襲來候儀、別便ニ細々申上越候間、此便よりハ何も可申上廉も無御座候間、左様御納得可被下候、

右之通御返答旁如此御座候、恐々謹言、

六月二日

大島吉之助

大久保一蔵様

包紙

二通入

京都より

大久保一蔵殿

大島吉之助

六月二日仕出、

同廿七日朝落手

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

五八五 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

芳翰難有拜誦仕候、陳ハ熊本藩之義御説諭被成下候趣、必静り可申事と奉存候、今日ニ至り官省ハ勿論、藩々之情実も有之、六ヶ敷成立候処、今始て思ひ当り、心配之様子ニ御座候、破れ立候欵いまた不相分、少し動揺いたし候ハ、瓦解相違有之間敷と奉存候、驚愕先生方之事候間、如何ニ形行候哉モ不被測候、今日ハ議事之開帳、余程優長之風景ニ御座候、長ニても段々議論も起り候半、昨日ハ山縣も頭痛いたすとの事ニて罷帰申候、井上至極心配之体ニ御座候、此旨御礼答迄、荒々如此御座候、頓首、

〔明治四年カ〕

七月六日

追啓上、別紙之通昨日申来居候間、任序ニ差上申候、

直太郎之所行驚入次第二御座候、

大久保様

貴答

西郷拜

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

五八六 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

小松帯刀殿

右御内用之義有之、仕廻次第早々被罷下候様、乍然暫時滞京無之候て不相濟、機会も候ハ、時宜次第可取計旨、

御内沙汰被為

在候段、御問合之趣致承知候、於御当地ハ、御留守之御訳ニも候得は、事柄軽き御事ニ候得共、只今京地之形勢ニ付ては至極差迫、長州襲来之一条ハ勿論、一橋侯之隠策、旁不容易時態罷成、如何變動可致哉も難計、且攝海開鎖之決議も無之、紛々之勢ニて、差当り之禍難相見得申候間、当月中も機会御見合相成候様有御座度、私共よりも御願ニ御座候、少し静穩之向成立候ハ、決て油断ハ不仕候付、其辺之処宜敷御汲取給候て、都合能被仰上置被下候様御頼申進候、以上、

大島吉之助

六月二日

大久保一藏殿

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

五八七 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

兩三度長州江異船襲來之事件申上越候間、一々御聞取被下候半、其後之処も、弥襲來いたし候儀ハ、慥ニ不相分候得共、長州之説ニテハ、朔日二日兩日之間ニ參賦之由ニ申居候由ニ御座候得共、慥成一左右ハ不承事ニ御座候、然処長州援兵之國々拾貳藩ハ、有之段申居候由御座候得共、一國を以て援之処ハ決て相少く御座候半、有志と欵申人数脱藩等ニテ、行向候事欵と相考居申候、藝州よりハ最早六百騎之人数を押出候由ニテ、因州江相知れ、在京之者ハ皆々引払、援兵之為ニ帰國之筋ニ相見得申候、是ハ定て一國を以て援之事と被伺申候、筑州よりも小倉辺江援兵被差出候賦と被相伺申候、右等之次第ニ御座候得共、長人在京人数貳百計ハ一段伏見迄引取候処、又々繰登候筋ニ被相聞申候、是ハ何様國元之方及大破候共、不動筋ニ決定いたし居候向ニ御座候、此処ハ一物有るものと相見得、若哉自分國大破いたし候ハ、此怨を何方ニ欵可報賦ニテハ有之間敷哉、長州ニおひてハ何様之事ありとも、幕命

ハ不奉決心と相聞候間、長州及破とも勝ニなりてもどふとか、變動之事到來可致欵と相考居申候、当分ニテハ段々御國之処も、暴客辺よりも宜敷説を申立模様ニテ、一橋侯之悪られ方一ト通ならざる事ニ御座候、御察可被下候、今日ハ公子御迎として、大坂迄參居候付、荒々大坂より申上候間、左様御汲取可被下候、恐々謹言、

大島吉之助

六月六日

大久保一藏様

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

五八八 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

包紙

大久保一藏殿

大島吉之助

向署之砌御座候得共、御両殿様益御機嫌能被遊御座、恐悦之御儀奉存候、次ニ貴兄無異儀御勤務之由奉賀候、陳ハ御当地物騒之次第ハ、先日申上越候通、毎日一兩人ツ、之捕方ニテ、拔身を携市中往来、人間達ニても不苦との訳ニテ、氣味わるき事ニ御座候、土州人を間違鎗突、股ニ疵付、

大ニ六ヶ鋪成立居候由ニ御座候、長州ニおひてハ、早速早打を以国元江申遣、御末家又ハ大臣之内耆人早々被罷登候様、急を告候由ニ御座候、其内差迫候事も有之候ハ、速ニ可打破との決心と相聞れ申候、畢竟何等之企有之、浪士召捕相始候哉、段々手を付候処、正親町三條へ申合、

有栖川様江打合、達

叡聞、前関白鷹司様を御復職ヲ相計り候由ニ被相聞申候、又一橋御付原市之進等之説にてハ、洛中ニ火を懸御遷幸之節、

鳳輦を奉奪候謀計と申説ニ御座候、是等之処ハ、実ニ拙策と申ものニ極り候事ニ御座候へハ、決て名を替候半欵、一橋其外目差処を焼打可致含欵も不相知事ニ御座候、近此長州比にてハ、頻ニ討幕之説相起り候由ニ御座候間、異人襲来ニ付、援兵各藩より不差出様、

朝命相下候処を願置候事件、余程怨深く成立候訳と被相聞申候、今当分にてハ禍齋墻之内ニ相起候半欵と、昼夜安き心も無之次第ニ御座候、

尹宮之処、一橋刃之御結合深成立居候故、暴客頻ニ怨ミ居候姿ニ御座候、何様之暴発可致欵も不被計とノ説

にて、大きニ苦心仕候事ニ御座候、右ニ付大夫江得と申上、外ニ可奉救之道も無御座候間、いつれ御辞職被遊候て、暫時之処、鋒を御避不被遊候てハ、外ニ道も無之候、如何様御評判悪敷成立候迎、夫形被捨置候御場合も不出来御間ニ御座候へハ、御辞職之処、私より御進め可申上筋ニ相極め置申候間、左様思食被下候て、

其刃之処宜敷被仰上置可被下候、○浪士召捕方ニ付、同腹之処ハ一橋・桑名・彦根・加賀・會津五藩之由ニ御座候、○長国江異人襲来之儀ハ、いまた不相分候得共、江戸ニおひて幕役より長留守居へ相達候ニハ、異人江何様相諭候ても、聞入候丈無之候付、異船参り候ても不苦哉と為申由ニ御座候、○園田五助と欵申して、亡名いたし居、清明と名乗法体之者、大坂御留守居江長州辺聞合、内命を蒙り候訳申出候由にて、私方迄参候得共、何分慥成儀も不相知、其上大津辺にて盜等いたし候次第、おそろしき者御座候て、大津より爰許御留守居方迄、訴出候事も有之候儀ニ御座候へハ、又欺謀欵も不相知と、不審を懐き候事ニ御座候間、何も打合不申、御国元にて御承知之通、御手を付られ候て、可宜と申置候事ニ御座候、弥聞合方ニ被差出候者ニ御

座候哉、為御知置可被下候、○中村半次郎と申者、追々暴客之中間ニも入込、長州屋敷内ニも無心置召入候て、彼方之事情は委敷相分り、外ニ段々手を付候得共、夫程相分り候手筋も無之候、中間と見込候故、内情相分候事ニて御座候処、長州襲来ニ付、長州国元迄踏入度との事ニ御座候間、大夫江申上差出候事ニ御座候、本道之暴客ニ相成軟ハ不知候得共、又々罷帰候へハ、委敷情態之相分事と相考申候間、左様御含置可被下候、いつれ脱藩之姿ニて、長州江ハ入込候手段ニいたし候様、相達置申候、先度申上候通、松田東園と申者、脱藩之姿ニて差出置候得共埒明不申、第一私を落し、暴論を立候様申込置候得共、とふも中村程ニハ請かなり筋と相見得申候、此旨形行迄如此御座候、恐々謹言、

六月十四日

大久保一蔵様

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

五八九〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

晒御買下之一条、大夫江御取越相成候処、公子御迎として大坂迄罷越候様被仰付、下坂之節御留

守居江引合、御買入一条可取計旨承知いたし候ニ付、大坂ニて得と吟味仕候処、商人手ニて買入為致候てハ、いつれ成手術ハ差見得候間、詰見聞役呉服所江踏込、直様買入候へは、法外之事も無之、御買入可相成候付、反布差出候様相達候得は、直ニ正札を繰替候事も有之由ニ候間、踏入買入候へハ、右等之手術不相調候付、左様之計可宜と吟味いたし、縞白晒千五百反丈御買入、近便より御方江振向被差廻候様、大坂御留守方江も談置候間、左様御納心可被下候、自然大夫より御申越相成賦ニハ御座候得共、今日病氣ニて御出勤も無之候付、為念此段も申上越置候、以上、

六月十四日

大久保一蔵殿

大嶋吉之助

追て時節取後不相成様、早便より差廻候様、委敷相達置申候、

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

五九〇〔木場傳内ヨリ西郷隆盛へ書翰〕

茶其外長崎交易品々、買入候者ハ無之哉、猶又聞合為致置候処、濱崎太平次手先之者共、五月中旬茶積下候

風説有之、同人手先入來利平次相札候処、最初ハ偽り居申候得共、嚴敷せり詰申候処、去ル五月十二日、自船保壽丸船頭徳右衛門船より自物茶五百箱、調保丸船頭喜三郎船より自物茶三百七拾箱、壺入八拾七本抜積いたし候段誤り出、兼て交易品積下候儀不相成段は、嚴敷申達置事御座候処、別て不届之至御座候、就ては下之關筋通船之筈候哉相札候処、東目筋通船いたし候様下方に貼、申付置候段申出候得共、大胆不敵之奸商共、実否承知難成、中途掛念之事ニ御座候、且買入方之儀、於何方何頃買付候哉、相札申候処、去冬時々於伏見買入候段申出申候間、手先三橋休八儀、何篇頭取取扱いたすもの、由御座候間、今夜早々乗船下国いたし候様申付、入來利平次儀は、御商法綿・茶当所并兵庫へ有之由申出、下国為致候てハ首尾相成不申候間、右片付迄之間御屋敷長屋へ召置、右茶・綿売片付候上、帰国申付置申候、且亦柿元彦左衛門倅并手伝貞右衛門儀、茶・綿商売いたし候間得は無之候得共、何分藝州交易ニ付音高ク、長崎交易相混シ申候間、兩人共帰国申付ケ其外往来持參不致、商人共都て帰国申付申候、依之先達て申上候通、蒸気船より便船ニて罷登候ものは迄無往

來にて、上坂之者のミ有之由御座候間、屹と取締向被仰渡、且長崎江一往ニても差越候大商人は勿論、手先たり共此涯上坂不致様被仰渡度奉存候、此等之儀於御国元、屹と御取締向無之候ては、商人共内々之咄合ニは、御物様より茶御交易被成候間、差支ハ有之間敷位ニ申居候由御座候、此段申上候、以上、

子六月廿一日

禮告  
木場傳内

大嶋吉之助殿

(貼)

一長崎御交易方にて買入置候茶千三百箱之内、百七拾箱一昨日伏見江積登せ、跡残りは追々伏見より請取ニ、船差下候筈ニ御座候段申出申候、為御見合申上候」  
(天久保利謙氏所蔵本にて校訂)

五九一 (西郷隆盛ヨリ国許御側御用人衆へ書翰)

包紙

御国許  
御両丸  
御側御用人衆  
御側役衆

大島吉之助

於其御許

太守様

中将様

障姫様益御機嫌能遊御座、其外 御惣容様弥御安泰  
被為成御座、恐悦御儀奉存候、於爰許 貞君様益御機  
嫌能遊御座、重畳恐悦御同慶奉存候、今日表ヨリ御  
用候付、足輕兩人極々急飛脚被差立候付、御左右申越  
候条宜被申上候、以上、

六月廿五日

大島吉之助

御国許

御側御用人衆

御側役衆

五九二〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

追て、若又長州勢を得候事も御座候ハ、朝廷江  
相迫候儀ハ差見得候付、是ても又難題ハ到来可仕儀  
と相考居申候、しかし死ものくるひと申塩梅ニ御座  
候間、逆も尾をとり候考と相見得不申候、

去ル廿日より追々長州人着坂いたし候段相聞得候付、  
方々探索方いたし置候処、相分候次第柄全五日晩長人  
召捕一件より相起候儀にて、多人数出張之趣ニ御座候、  
大体千人と申事、惣幸ハ福原越後と申者之由ニ御座候、

左候て廿三日出坂にて、枚方一泊、廿四日着伏相成申  
候、暫ハ滞在ニ候半、大坂にてハ町奉行方江届申出候  
趣ハ、江戸表江罷通候筋ニ御座候得共、決て左様之含  
にてハ無之由ニ御座候、然処廿四日昼過御留主居御呼  
出有之、淀辺江人数差出警衛いたし候様御達相成候処、  
即刻御書付を以て御断相成候儀ニ御座候、此度之争戦  
ハ、全長・會之私闘ニ御座候間、無名之軍を動候場合  
ニ無之、誠ニ 御遺策之通、 禁闕御守護一筋ニ相守  
候外、無余念事ニ御座候間、左様御含可被下候、いつ  
れ長人之儀、内ニハ外夷之襲来を待、外ハ出軍之次第、  
実ニ死地ニ陥候窮闘と申ものニ御座候ハ、定て破立  
候儀欵と相考候得共、旧怨を懐き候事ハ、素より之儀  
ニ御座候得共、差迫り候処を幸ニいたし、兵を動候儀  
可存之業にて、誠ニ無名之軍と相成候てハ、後來迄之  
汚名と相成儀ニ御座候間、断然と御断切ニ相成候筋ニ  
申上、其通御届相成候事ニ御座候、一度長州掛け候ハ  
、幕命ヲ不奉処を以難論相掛候儀ハ差見得候得共、  
夫等之煩を顧て、無名之兵を拳後來之恥辱と相成候儀  
共にてハ、却て其罪も可重と相考居申候、此上ハ 朝  
廷何様之御災難到来いたし候ても、御安慮ニ相成候処



丈ヶハ相尽賦ニ御座候間、左様御納得可被下候、いづれ之筋長州より若哉 朝廷ニ奉対御怨ミ申上候様之儀も御座候ハ、其節ハ不戦して相済申間敷事と相決し罷在申候、右等之趣意ハ御賢慮を以、宜敷 御執奏被成下候様奉願候、尤も幕府より之御達書并御断之御書付ハ、表通之御問合可相成候間文略仕申候、然処宮之城公子之御儀、廿八日御出立之筋ニ御極り相成居候得共、劍鎗或ハ切火繩等にて、陸地又ハ船上より罷登候付、御下坂之処御見合不相成候てハ、相済申間敷儀と、吟味仕置候処、公子思食も、此變動御見捨御立帰被為成かたくと之御趣意之事御座候へハ、却て幸之事と奉存、暫時御扣相成候方可宜、少し居合相付候ハ、早々御帰国相成候様御都合可仕儀と吟味仕申候、此一挙ニ付、御国許より早々御人数被差出候時機ニも有御座間敷候間、左様御合可被下候、若御人数不被差出候て不叶機會も御座候ハ、其節ハ蒸氣船も罷居候ニ付、急々申上候様可仕と相圖置申候間、是又同様御合可被下候、此旨要事迄如此御座候、恐々謹言、

六月廿五日

大島吉之助

大久保一藏殿

(大久保利謙氏所藏本にて校訂)

五九三〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

包紙

大久保一藏殿

大嶋吉之助

近比長崎より御取寄之本込小銃、其許御格護相成居候由、内田・吉井一挺ツ、拝借仕度願出候間、此節蒸氣舟便より御差登可給候、此旨御頼申進候、已上、

六月廿八日

大島吉之助

大久保一藏殿

(大久保利謙氏所藏本にて校訂)

五九四〔議政所之事 認者不明〕

議政所之御事、

右被召立候段、被仰渡趣承知仕候、右ハ夫々遂吟味候上、御政府へ申上、御政府ヨリ御命令有之筈ニ付、格別其弊ナキヤウニ候得ドモ、向々ヨリ大小ノ御役ニ掛被仰付候へバ、自然正権モ相付申サハ、御政府両立ノ姿ニ流レ、ヲノヅカラ其弊萌シ可申哉、右等疾ニ御吟味モ被為在、

決テ御掛念可奉申上御筋ニハ被為在間敷、素ヨリ大頭御名目拝聞仕候、自己ニテ猥ニ得失ヲ奉論哉ニ相当、如何ニモ多罪至極恐怖ノ至ニ候ヘトモ、速ニ御掛ノ御役々入代有之、汲受ノ厚薄ニヨリ、実意ヲ失フトキハ、必其弊生シ候ハ、和漢古今ノ通情ニ候ヘハ、新ニ御取替ノ御義ハ、能々御吟味被為在度御事ト奉存候、就テハ御決定後ニハ候ヘトモ、本立テ道生トモ御座候ヘハ、御眼目之御政府、夫丈ケノ正権屹ト相立、御命令一途ニ出、無大小ト御用筋御重ミ有之ヤウニ、アラマホシク奉存候、然ルニ向々ヨリ掛タク、自然彼是混雜イタシ、諸ノ疑惑ヲ生シ候様罷成候ハ、実ニ御政道ノ御大事、不容易御義ト奉存候、右ニ付、同シ道理ニ落可申欵モ難計候ヘトモ、誠ニ申サハ、是迄通階級ヲ経、登庸セラレ候奥掛ノ面々ハ、御規模ヲ標的ト仕、御吟味ヲ尽シ可申候ヘトモ、時世ノ形勢活道モ有之義ニ候得ハ、御家老衆御談合役トカ申ヘキ非常ノ人才ヲ御撰挙、十人位モ奥掛被仰付、時勢相当ノ吟味ヲ遂、一座和熟治乱興廢ヲ論弁シ、格ヲ正シ經緯ヲ立、双方合体シ、幾重ニモ練熟ノ上申上、猶亦御熟考、御前江御披露相成候様御座候ハ、条理相立而立ノ弊生候後患モ薄、御政府嚴然ト重権有之、御政道一

新シ、名分大義モ明ニ相成、序席追々其風ヲ習候ハ、頗ル人傑モ出可申欵、

右通ニカマヘ厘ンモ私ヲ構候ハ、二場ノ気味相興候ハ自然ノ勢ヒ、況ヤ席ヲ二ツニ被為分、重キ御名目ニ候ヘバ、其弊可興ハ眼前カト、深恐懼ノ至ニ御座候、是非一途ノ御政道ニ被召替被下候様、謹テ奉歎願候事、

一御両殿様被為揃、御出座云々ノ御事、

一御両殿様御附御打込ミ云々ノ御事、

一御直伺云々ノ御事、

此三ヶ条荒増奉伺、実ニ御美事、是非トモ御懸力御成功幾重ニモ奉願度候事、  
〔明治元年頃の史料カ〕

五九五〔飛鳥井雅典野宮定功ヨリ島津久光へ〕

書翰〕

大暑之砌、愈御安康珍重存候、陳は頃日長州家老福原元朝越後出府之趣申唱上京、伏見表ニ一兩日滞留、又同藩并浮浪人相交、凡五六百人山崎ニ滞在候処、去廿七日山崎滞在之面々、携兵器押て入京、嵯峨天龍寺ニ屯聚、不容易形勢候間、右輩引払各令帰国、福原越後儀ハ伏見表ニ於て、若出願之儀有之候ハ、穩ニ経其筋可申

出様可有説得旨、一橋中納言へ被

仰付候間、不日鎮静とハ存候得共、万々一

帝都御危難之程も難計、其節は乍御苦勞、神速上京有  
之候様被遊度旨

御沙汰候、仍申入候也、

七月三日

定功

雅典

島津大隅守殿

〔島津忠家氏所藏本にて校訂〕

五九六〔西郷隆盛ヨリ木場傳内へ書翰〕

楠公社御建立ニ付、石類御見合相成居候様被申越候趣

相達候、宮之城公子御下坂無間も事候間、其節ハ兵庫

刃迄差越賦ニテ扣居候処、此度騒動紛れニ失忘いたし

居、始抹不申越御断申上候、右石之儀ハ、其許御蔵御

修甫方ニ御仕相成候て可宜、迎も急ニ一社御取掛難相

成事ニ御座候間、差当之御用途ニ罷成、御当然と吟味

いたし大夫江申出候処、其通可取計旨御差函有之候付、

宜敷御取計可給候、以上、

七月九日

大島吉之助

木場傳内殿

〔天久保利謙氏所藏本にて校訂〕

五九七〔島津久光ヨリ飛鳥井雅典野宮定功へ

返翰〕

去三日之芳翰十九日相達、謹て拝見仕候、先以残暑之

砌御座候処、御両所様愈御安全被成御座奉恐寿候、陳

は今般長州家老福原越後出府之趣申唱、伏見表ニ一兩

日滞留、又同藩并浮浪人相交、凡五六百人山崎ニ滞在

之処、去月廿七日山崎滞在之面々、携兵器押て入京、

嵯峨天龍寺ニ屯聚、不容易形勢候間、右輩引払各令帰

国、福原越後義は若出願之義有之候ハ、於伏見表穩

ニ經其筋可申出様可有説得旨、一橋中納言へ被

仰付候間、不日鎮静之筈候得共、万々一

帝都御危難之程も難計、其節は神速上京仕候様、被

遊度

勅命之趣被 仰下、不肖微臣恐入難有謹て奉拝承候、

朝家之御為尽死力周旋仕候は、臣子之当然御座候間、

御危急ニ被為臨候節、傍觀仕候所存毛頭無御座候間、

此旨厚御汲受、可然様御執

奏被成下度奉伏願候、先は右御請奉申上度奉呈愚札候、

恐惶謹言、

七月廿一日

島津大隅守

飛鳥井中納言様

野宮中納言様

御請

再白、帝都變動之趣承知仕候ニ付、早速修理大夫申談、蒸気船より警衛之人數上京爲仕候間、最早着京仕候義と奉存候、尚亦御用も御座候ハ、追々登京申付候考ニ御座候、此旨御答迄ニ申上置候、以上、

〔島津家承氏所藏本にて校訂〕

五九八〔近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰〕

尚以 朝廷之御様子実以恐入々々候事ニ候、併御別条不被爲在、恐悦之事ニ候也、

残炎難凌覚候、弥勇健候哉承度存候、然ハ去月十九日之形勢最早篤と御承知之事と存候、誠ニ不容易次第第二候、十八日夜世上騒々敷ニ付ては、関白殿初申合セ、早速参

朝致候処、世上追々騒々敷、伏見辺ニテ戦争相始メ候勢ニ付、小御所へ

出御之上、以 勅言一橋へ追討被 仰出候事ニ候、最

早其内追々発砲、

宮門外混雜ニ及、鷹司家も焼失、大火ニ及実ニくく

絶言語候、既ニ

宮門打破候勢ヒ、

禁中大混乱、実ニく被惱

宸襟恐多事ニテ候、下拙共十九・廿日両日ハ、抛身命相動居候事ニ候、中々筆紙ニ難及次第ニ候、先々御動座不被爲在、恐悦々々之事ニ候、十九日より詰切居、聊透無之、先々兩三日前より夜分計ハ下宅ニ及、少しハ休息出来候事ニ候、実ニく

朝廷へ発砲致候儀ハ、開關以来古今未曾有之朝敵ニテ候、防長追討被 仰出候事故、其内ニハ追々相運候事と存候、先々当方ニハ別条無之、一統無異御安意可給候、中々実事筆紙細密難認取、真ニ荒々如此候也、

八月五日

追申、十九日・廿日両日其許藩格別之粉骨尽力、実ニく感佩候、実ニ其藩之力ニテ

朝廷御無難ニ相濟、実ニ恐悦々々之事ニ候、上京藩士之処、格別御主人よりも被賞候様存候、扱其許ニも此上ハ御上京之程待入存候、圖書殿〔島津久光〕・備後殿〔島津忠雄〕格別

御精勤感佩候事ニ候、以上、

三白

先達てハ御所望申入候短刀早速ニ恵給、深々喜悅候、寸法も至極々々、早速拵申付候事にて、不取敢右御礼申入度候事、

内々

鳴津大隅守殿

忠房

御下

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

五九九〔近衛忠房ヨリ島津久光茂久へ書翰〕

朝夕ハ凌克寛候、其地ハ如何ト存候、先以御勇猛候哉、尚承度存候、先々京師少シハ御静謐ニ相成候へ共、此末之処如何可相成哉ト深心配候、防・長へ、異舟渡来、右ニ付テハ深心配候、何分方今夷狄ト戦争ニ相成候テハ、追討之折柄内外之混乱ニモ及候儀、其上防・長モ皇国之地ニ候へハ、夷人ニ討セテハ、不容易、皇国之恥無此上候、旁厚幕府ヨリ夷人説得可在之様、被仰出候事ニ候、扱小松帯刀帰国之趣申出、何共当惑無此上候へ共、国許之差支ニモ相成分、是非一応帰国仕度段申出、兎モ角モ致方無之痛心候、何卒御国許御用

急々相濟セ、折返シニ帰京仕候様ニ致度候、方今帯刀

滞京無之テハ、大ニ差支当惑無限候間、厚々御含被下、

急速引戻シ候様ニ致度、呉々急速帰京之処、飽迄御頼

申入度存候、先ハ御用繁中右而已荒々如此候也、

八月十二日認置

忠房

内密々

島津中将殿

薩摩少将殿

御下

尚以、前殿下ヨリモ宜敷々々可申入被命候、小松帯

国ニ相成候テハ、前殿下ニモ深御懸念ニ思召候間、

本文之通前殿下ヨリモ被 仰入度由ニ候事、

呉々帯刀儀、五六日ニテ早々出立帰国候様厚々御頼

申入候、左無テハ心痛無限存候事、

今度帯刀帰国ニ付、幸便ニ任セ申入候、当節之儀故

何卒具足拵置度存候ニ付テハ、式正腹巻御所望申度

候、外ニ六丸銃短筒モ御所望申度宜敷希存候也、

六〇〇 西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰

大久保一蔵殿

大島吉之助

御両殿様益御機嫌能御遊御座、恐悦之御義奉存候、陳ハ 公子御下坂ニ付、御供ニテ参居候処、（志）（善助）森岡等之人々着坂相成、御問合之趣一々承知いたし候、御褒賞之義ニ付てハ、引続戦争相成模様にて、一戦之処ハ直様被賞置候様之事ニ不運候てハ、兵氣も不相振、御名代之兵權丈ハ、非常之節ハ不相付候てハ、一体之御指揮もをくれ候事而已罷成へく候付、戦功丈ケハ当座被相賞、軍威相立候様御所置為相成事ニ御座候処、些早まり候訳ニ到り候半欵、細事ハ大夫より御直ニ御聞届可被下候、○両公子御褒美ニ付てハ、先年 龍伯公御ふたりの御舍弟様江御褒美之御例ニ被准候てハ、何様可有御座哉、其辺之処大夫御相談も可有御座候半、相略し申候、○兵庫表出張之人数故障申立、御免相成候処、段々御申立相成引払候付、至て之大幸ニ御座候、異船も必攝海江乘廻候半との趣ニ候へハ、若哉変を生候様之義も到来いたし候へハ、兵庫真一番ニ破れ候場所柄、其上兵庫江乘廻、異人事を破らす迎も、横行を

見て居るさへも、又因循の名を蒙り候半、只今にてハ因循之名ハ、とこにか飛去たる事ニ御座候間、余計ニ念を遣候事ニ御座候、○御国元よりハ、筑前之内江御出軍之由、就てハ爰許よりも、救応之一陣ハ被差出度ものにて、段々手筈仕居候、此度之戦迄目覚しき軍をいたし、混と乙名敷いたし居候ハ、天下中之人も如何程か恐れを成し候半、軍威四方ニ輝き候事と奉存候、（志）（慶久念）○中将様御上京之義、いまた御早く御座候半、如何様とも見留之付候上ならてハ、御宜敷有御座間敷と奉存候、將軍も此度ハ、上洛之筋ニも有之、攝海異人之参る説も有之事にて、段々大難差迫候義ニ御座候間、（志）（小松）大夫之処此度ハ何卒早々御帰京相成候処、平ニ御願申上候、○長州之義、異人より攻禿候てハ、人心之居合誠ニ六ヶ敷相成可申、後難今より世話を煎候事ニ御座候、定て幕吏之策を以、異人を募り候事欵と相考申候、又是より暴客盛ニ起立候半、始終世運をちゝめ候策計ニ御座候、

右之通荒々奉得御意候、細大大夫より御聞取可被下候、恐惶謹言、

大嶋吉之助

八月十七日

大久保一蔵様

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

六〇一〔島津久光上洛ヲ促ス建言書〕

一四藩御談合ノ上、屢

御登宮被為在、兵庫開港、防長事件順序區別ヲ以御処置

相成、第一幕府御反正ノ実跡相顕、和同一致ノ道相立、

皇国挽回治久ノ大策被為立候様、精々

御尽力被為遊候得共、先月廿三日大樹公参

内言上ノ趣ヲ以、二件

御沙汰ニモ相成、全

御趣意ニモ齟齬イタシ候次第ニテ、四藩御連名ニテ、

朝廷江御伺書モ被差出候、畢竟幕府ノ意、四藩ノ御公

論ヲ採用、悔悟反正、

勅命奉戴、正大公平ノ道ヲ以、

皇国ノ御為ニ尽力可致トノ趣意、毛頭不相顕、是非私

権ヲ張、暴威ヲ以正義ノ藩トイヘトモ、庄倒畏伏セシ

ムルノ所為顯然明白ニテ、実ニ不可助ノ次第ニ御座候、

今般

御上京ノ儀、

皇国未聞ノ

御大節ニ被為臨、

御進退ヲ名義ノ上ニ被決候御英断ヲ以

御上京、

詔命ニ被為応候上ハ、前条時宜合ヲ以、

御帰国被為在候様ニテハ、是迄天下ニ大義ヲ被為唱候

無二ノ

御忠誠、全水泡ト相成而已ナラス、

皇国ノ大事去終幕府朝廷ヲ掌握シ、邪ヲ以正ヲ討、逆ヲ

以順ヲ伐ノ場合ニ至リ候ハ案中ノ勢故、今一層非常ノ

御尽力被為遊度、此上ハ兵力ヲ備声援ヲ張、

御決策ノ色ヲ被顕

朝廷ニ御尽シ無御座候テハ、中々動キ相付兼候故、為

御引会長州江モ御使被差立御賦ニテ、就テハ兼テ依御

模様、

太守様 御出馬被 仰出置候得ハ、此度ハ自ラ

御上京可被為在事候得ハ、一先軍艦三艘ヲ以、一大隊

ノ兵士被差出、右帰帆ノ上直ニ御乗船、御上京ノ御

用意ニ被為遊度、決テ神速

御上京ナラテハ不為濟段、衆論モ相起可申候得共、篤

伊東彦助

ト御熟考ニ被為及候上、兎角一大隊人数往復ノ後ナラ  
テハ、御秘籌ニモ相違シ、事ノ成否ニモ關係イタシ候  
故、分テ被仰進候間、呉々

御趣意無

御汲取違、十分

御統御被為 在候様有御座度奉願候、

一右一大隊兵士出帆期限ノ義、長州ノ模様ニ依、寛急モ可  
有之候間、西郷吉之助被差越、同人ヨリ何分御国元江

報知可仕候間、其内御待合、如何様流説ト有之候テモ、

一步モ動キ不申候様可有御座度、〔候カ〕

尤同人義、近々三邦丸ヨリ被差越、同船ヲ以報知仕候、

島津備後殿

右一大隊兵士惣督被

仰付度、

右ノ參謀

右人物御家老方ヨリ問合可仕候事、

桂右衛門殿

山内作次郎繰替

島津求馬

伊集院左中

右

太守様御供被

仰付度、

右木藤角大夫為 御使被差立候ニ付、本文ノ大意同人

江被

仰合、

御直書ヲ以詳細被仰進候様奉願候、御大事ノ儀ニ付、

必異議モ相生可申候得ハ、乍恐第一

太守様大成ノ

御趣意ヲ以御動揺不被為在候様、御確定ノ処專要ニ奉

存候、

但

太守様御供兵隊等別紙ニ申上候、

六〇二〔西郷隆盛ヨリ島津主殿求馬へ書翰〕

尚々下拙ニは、時宜ニ依兩日中早船より渡海可仕候

間、左様御含置可給候、

去十五日迄之形行は、伊地知正治より、御聞届相成候

半、然処三條初五人之公卿方、去十五日暴激党五六百



人余相卒、長府之方江動座有之候由相達、子細不相分  
候得共、定て類を集暴挙之企にて可有之との事ニ候、  
就ては今日別紙之通惣督府より御達相成、一先筑前よ  
り五卿方江説得いたし、其上御承引無候得は、可救道  
も無之候、臨機之所置不相成候ては、相濟間敷、右ニ  
付拙者ニは、早く其許之様致渡海管候得共、伊地知正  
治ニも未帰着無之、爰許之所差支候間、幸今日越藩某  
兩人、飛船取仕立渡海之賦、形行荒増得御意候、左候  
て当所之人数も、惣て其元江差渡、合力之賦候間、蒸  
氣船式艘早々御差廻可給候、大坂より当所迄、荷方船  
四艘にて乗船相濟候得共、当時之天氣柄難取究候間、  
二艘文御差越給候へハ、都合三艘にて可也相濟可申、  
筑前江は今日御達相成候間、暫は間も可有之候付、当  
所引払可申、左候て蘆屋江当所人数入込丈陣取、御手  
当御取計可給候、飯料は当所より持越申候間、左様御  
含可給候、此旨旁御掛引申進候、以上、

十一月廿日夕

西郷吉之助

廣嶋より

島津主殿殿

島津求馬殿

追て、前以飛脚差立、是迄之事情も委細申進管候得  
共、折節幸便有之、相託申候間、此仁より何も御聞  
取可給候、当所より之人数ハ、上下千人位にて候、  
(天久保利謙氏所蔵写本にて校訂)

六〇三〔島津主殿ヨリ島津又六郎外二名へ書翰〕

別紙式通、藝州表より到来いたし候間、安行丸小幡丸  
之儀藝嶋江罷居候ハ、飛船ニても相引立、早々爰元  
之様相廻候様御取計可給候、其外委細之儀、只今西郷  
吉之助ニも到着、明朝其許之様差越賦候間、同人より  
申上候様可致候、此旨早々申越候、已上、

十一月廿三日

嶋津主殿

小倉より

嶋津又六郎殿

喜入攝津殿

嶋津求馬殿

六〇四〔近衛忠房ヨリ島津久光茂久へ書翰〕

上封

書添

嶋津大隅守殿

松平修理大夫殿

忠房

御下

(付箋)

元治元年款  
別紙アリ致

別紙ニ申入候、呉々帶刀歸国之儀ハ困り入候、近頃ニ  
てハ一橋より帶刀を厚依頼之様子ニて、彼是相談等も  
在之候事ニ候へハ、旁帶刀在京候へハ、惣体之都合ニ  
も宜敷、旁是非急速登京御申付、分て御頼申入候事、  
大乱書御免可被下候也、

大隅守殿

修理大夫殿

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

元治元年(1864)

〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編

慶應元年  
至四月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」  
(紙数七九枚)の記載あり〕

## 目録

舊邦秘録

各所砲台大操練

道島家記抄藩内雜報

〔橋口吉之丞外六名歎願書〕

復古記

諸大名參勤交代復旧達書

大久保一蔵ヨリ西郷吉之助蓑田傳兵衛へ書翰五卿太宰府へ移住

吉井幸輔ヨリ西郷吉之助蓑田傳兵衛へ書翰五卿太宰府へ移住

西郷吉之助蓑田傳兵衛へ書翰

舊邦秘録

五卿御預ケノ達書

海江田武次ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰

道島家記抄

道島家記抄京撰雜報

小松帶刀ヨリ西郷蓑田へ書翰

大久保一蔵ヨリ西郷吉之助蓑田傳兵衛へ書翰(阿部松平西閣老上京事件其

外)

吉井幸輔ヨリ西郷吉之助蓑田傳兵衛へ書翰

舊邦秘録

三條初御呼寄ノ儀暫御猶予ノ儀幕へ御達

道島家記抄

舊邦秘録

高島右衛門ヨリ小松大久保へ書翰

大久保一蔵ヨリ西郷蓑田へ書翰

道島家記抄鹿兒島ノ形勢

舊邦秘録大久保一蔵ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰

寺島宗則自記抄

道島家記抄藩内雜事

小松帶刀ヨリ大久保一藏へ書翰

道島家記抄

和田權五郎外二名ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

久光公御登城

慶應元年乙丑清曆同治四年  
西曆一千八百六十五年

神武天皇御即位紀元二千五百二十九年(マ)

孝明天皇統仁第百  
二十代御即位弘化四年  
丁未十月十九年御宝算  
三十三

將軍家茂公第十襲職  
安政五年八年年二  
十三

藩主忠義公第二十九世當時  
修理大夫ト稱ス知政安政五年  
戊午十月八年年二  
十四

藩祖忠久公薩隅日三州及琉球國受封(八皇八十二代  
後鳥羽天皇壽永五年即チ文治二年)六百七十八年

関白左大臣二條齊敬公

右大臣徳大寺公純公

内大臣近衛忠房公

政事総裁松平直克十一月  
罷免元治元年六月罷免九

大老酒井雅楽頭忠績十一月  
罷免

老中

(山形藩主)  
水野和泉守忠精

(長岡藩主)  
牧野備前守忠恭四月  
罷免

(薩藩主)  
稻葉美濃守正邦四月  
罷免

(白河藩主)  
阿部豊後守正外十月依  
事罷免

(高島藩主)  
諏訪因幡守忠誠四月  
罷免

(岡崎藩主)  
本多美濃守忠民十二月  
罷免

(榑倉藩主)  
松平周防守康直十月  
罷免

(唐津藩世子)  
小笠原圖書頭長行

(備中松山藩主)  
板倉周防守勝静

(浜松藩主)  
井上河内守正直

若年寄

(敦賀藩主)  
酒井飛驒守忠毗慶應元年十一月免

(沼田藩主)  
土岐山城守頼之慶應元年十二月辭

(苗木藩主)  
遠山信濃守友詳

(長島藩主)  
増山對馬守正修

(榑山藩主)  
稻葉兵部少輔正巳

(田野口藩主)  
松平縫殿頭乘謨

所司代

(桑名藩主)  
松平越中守定敬

京都町奉行

小栗下総守政寧慶應元年十月  
勘定奉行へ転

瀧川讚岐守元以

長井筑前守昌言慶應元年十二月辭

大久保主膳正忠恕

伏見奉行

(譜西藩主)  
林肥後守忠交

困老

喜入攝津久高

川上式部久美

川上但馬久運

小松帶刀清廉

桂右衛門久武

町田内膳久憲

岩下佐次右衛門方平

諏訪伊勢武盛一時島津ノ  
稱号ヲ許ス

新納刑部久脩

川上龍衛久齡

以上十名前代ヨリ勤統  
ノモノハ、印ヲ付ス

六〇五 舊邦秘録

正月

元日ヨリ十五日ニ至ル迄、年首ノ御式先規ノ如シ、略

ス、六日操練場ニ於テ、御先手并兩御旗本大小銃砲隊

操練催サレ、太守公正午過ヨリ御出馬アラセレタリ、

六〇六 各所砲台大操練

八日御城下各所及ヒ櫻島諸所ノ砲台、遠近射擲操練張

行セラレ、太守公ハ辨天砲台ニ御出馬アラセラレタ

リ、

六〇七 藩内雜報(道島家記抄)

六〇七ノ一 西郷吉之助事、丑正月九日大番頭ニ勤方、

右ノ通御刀拜領被仰付候旨致承知候、

但御側役御用取付ニテ候、

御感状左ノ通、

今度長賊

御征討ニ付、官軍惣督尾張前大納言殿ヨリ御委任ノ

趣有之、直様藝州表へ差越吉川監物(經幹、岩國藩主)へ申諭、賊主降

伏ノ儀致教解候処ヨリ、毛利大膳父子是迄不臣ノ次

第致悔悟、降伏賊党ノ根本福原越後等伏誅始終ノ次

第、専ラ尽力ノ故ヲ以、不血刃ニテ使乎治解兵ノ功

勞無比類、大勤ノ程令感入、為褒美正真ノ刀一腰遣之候、仍如件、

元治二年乙丑正月十五日 久光公御判

茂久公御判

西郷吉之助殿

六〇七ノ二

旧冬給人クツレニテ御役被差免候松方・森岡兩人ハ、寅正月十五日、郡奉行へ兩人共ニ御役被仰付候、珍敷所置ニテ候、奈良原モ旧冬上京被仰付候、是モ上ヨリ被仰付テハ全ク無之、其身ヨリ頻リニ相願候テ被仰付候ヨシ、慥ニ承候事、

正月十五日記ス、

六〇七ノ三

当正月廿日、新納刑部殿・町田圖書殿其外拾七八人異國へ渡海イタシ候様被仰付、当日朝六ツ過打立有之、串木ノ羽島へ滞在ニテ差越管候由、尤刑部殿年内御内用之儀有之迎、長崎迄被差越、日数三十日計被居候処、矢張其事ニテ被差越候半ト相考候事、

但

島津織之助〔久遠〕・高橋要人〔種秀〕ニモ被仰付候処、兩人申談御

前へ出、第一公辺ニ聞合モ有之候ハ、如何御返答可被為在候哉、何分其御所置承知イタシ度申上候処、格

別御返答モ無之、左様ノ事ナラハ遣ニモ不及迎、即

御免被成候由噂有之候処、丑二月廿日頃評判ニ、御

手許御用ニテ京都辺へ被遣候由、下人一人ツ、召列、

凡五ヶ年程罷居管之由、決テ前条ノ折檻ナラント申

事ニテ候、〔本〕（島津・高橋ノ両士旧守党人等ノ説ヲ取りタ

ルモノナラント云フ）

六〇八〔橋口吉之丞外六名歎願書〕

當時内外難題ノ事、別テ令心配勞致愚案候処、兎角國家ノ基本ハ、追々申聞候通、何レ礼義廉恥ヲ以風俗ヲ正シ、上下心ヲ一ニシテ、君臣和平シ、古代之國風ヲ振起イタシ候事、今日ノ急務ト存候、然ルニ本ヲ勘考イタシ候ニ、仲尼ノ所謂名正言順ナル所、第一政事ノ綱紀治道風化之本ハ、乍汗顔拙者之一身ト存シ、朝夕相勵候得共、本来不肖之身甚致心痛候、左候テ重富之美子ニテ、〔香彬〕順聖公ノ御眷顧ヲ蒙リ、家督相統被仰付候処、當時ヨリ武鑑ニモ、実ハ島津周防嫡子ト有之、下ニ押出シテ顯然ノ事ニ付、然ルニ只今ニテハ、所謂名不正言不順ト可申哉、親

子之情於孝義難止次第二候間、拙者之内存ニハ、当家督ハ又次郎(次郎幼名)へ申付、重富之家ヲ出テ国父ト云所ヲ以、朝夕自ら定省イタシ、為子之礼ヲ取テ孝道ヲ尽シ、臣子ニ先シ度候、左候ハ名義モ相立候事ト存候、右一条以前ヨリノ宿意ニ候処、未 順聖院様御三年忌モ不被為立内ハ、於孝義可奉憚筋モ可有之ト存候得共、當時ニ至候テハ一日モ難止至至情ニ候事、

右之通 御筆 御書取ヲ以テ、文久元酉四月廿二日被仰渡候事、

謹テ愚按仕候処、凡天下之禍莫大於忠奸分党、奸人不足責乃所為忠臣者度量狹淺不能包容、小人使其革面供己之用徒、忿狃トノ争以惹起大禍者自古多、有胸中吞雲夢八九嘗不蒂芥、君子度量当如是、当今者外夷通商以来 国家多難、加之幕府列藩皆忠奸分党、各自己之私意ヲ挾ミ、確然一定之見識ヲ持シ、

神州之為ニ国是ヲ議スル事ナク、遂ニ外患ヲシテ内憂ノ原因ヲ惹出シ、其蓋未ダ測ルヘカラス、此上ハ諸国拳テ割拠ノ勢ヲ醸スハ、案中ニ御座候ヘハ、今日之事ニ於テハ、徒ニ一朝一夕ノ儀ニ無御座、何レ先我

神州之根基ヲ定メ、終始其揆ヲ一ニシ、古今ニ貫徹不致

候テハ、其実効相立申間敷、依之私共小人賤陋之身ヲ以テ、万分ノ一ヲ補ハン為、粉骨碎身奉報無窮国恩度心願奉存候得共、性固ヨリ愚頑妄昧、才芸至テ乏敷、殊更官途ニ從事シテ、相応之 御奉公勤リ兼、空敷悠年月ヲ送り、傍觀仕候儀ハ、実ニ臣子之至情、此危急存亡之秋ニ当リテ、難止儀ト奉存候、故ニ同友共甲合、国家ノ為メニ身命ヲ抛チ、各国動静機會ヲ探索仕度、經歷ノ志願ヲ励シ、一封ヲ作り、一心決定之存慮ノ趣逐一相認メ、坂木六郎へ相頼、山之内・大久保之二氏へ相付差出置申候、然ル処此探索ノ任ハ、実以至大至重ノ事件ニシテ、固ヨリ其人ニ乏カラス、故ニ中々私共小人之企及ヘキ儀ニハ無御座候得共、実ニ螻蟻之誠不得已儀ニ罷成、且又治平之久風俗時ト汚隆シ、士氣日ニ委靡不振、各国往々猜忌多キ習ニテ、何レ此上ハ全ク家國ノ国情ヲ離レタル者ノ姿ニテ、諸処ニ徘徊不仕候テハ、其得宜申間敷奉存候、就テハ 御免許之上、進退可仕ハ当然ノ事ニ御座候得共、時勢切迫ニ罷成私共小人平生冥頑無智ノ性質、迎モ十分ノ志願難被容、左候テ近今草莽中ニ閉居シ、天下ノ形勢ヲ伝承仕候ヘハ、猶更感慨悲憤ニ不堪、遂ニ恐多モ奉犯御国律、

直ニ発足仕、今般大坂へ着、早速上京一同存慮ノ趣嘆願仕度、不奉願犯罪之身奉呈一封候、伏テ惟レハ追日幕威強張再ヒ昔時ニ復シ、戎狄ニ親近シ、貿易益盛ニ罷成候処、哀哉時勢変革、此騷擾之時ニ当リテ、即チ天下ノ為ニ国是ヲ議シ、内外ノ守禦極テ嚴密ナラズンバ、不待数年戎狄ノ為メニ掠奪セラレテ、被髮左衽ノ俗ニ習ヒ、恩ヲ変シテ疎トナシ、親ヲ変シテ仇トナシ、陷阱ヲ踏ミ、釣餌ヲ食、其導誘懽惑ノ術中ニ墜チ、徒ニ尺寸ノ利ヲ貪リ、後日ノ患ヲ願ミス土崩瓦解、何ヲ以カ赫然タル哉、

神州ノ威光ヲ外蕃ニ示スニ至ランヤ、此ノ時ニ当リテヤ、臣子ノ分トシテ永代無窮ノ 国恩ニ浴シナカラ、徒ニ一家ノ生計ヲ営ミ、国家ノ遊民無用ノ者タランヨリ、寧万死ヲ犯尽心力可申ハ必然ノ儀ト奉存候、然則近今ノ要務ニ於テヤ、先第一各国ノ人氣風俗ヲ精察シ、山川路程之峻易ヲ經歷シ、甲兵軍卒ノ強弱ヲ弁別シ、更ニ深く戎狄ノ情実ヲ洞識可仕ハ、全今日ノ機会ニ可有御座ト奉存候、縱令他日非常之挙動ニ至リ、俄ニ其臨時ニ奔走仕候テハ、却テ紛紜異変ヲ生シ、彼是良全ノ実効相顯レ申間敷、乍恐奉存候間、何ソ私共小人存慮

之趣委曲御聞届ノ上、万死犯罪之身上深御憐察被下、寛仁大度ノ御処置ヲ以、平生ノ志願十分ノ尽力相遂得候様、御周旋被下度奉願上候、頓首百拜、

丑正月

橋口吉之丞

加藤雄助

追田甚七

大重壮次郎

森 良之助

竹崎仲之丞

横山姓之休之進中井弘藏旧名

### 六〇九 復古記

明治元年カ

長崎縣記ニ云、正月十四日、長州脱走之浮浪士三十五六人、豊前長州ヨリ上陸、同夜四日市へ乱入、陣屋並莊屋一郎右衛門宅・西本願寺出張所一ヶ寺・百姓家三軒・町家三軒焼払ヒ、金錢衣類盜取、陣屋詰久留米家來小者式人討取、武器大砲式挺玉菓共盜取、宇佐八幡御許山へ楯籠、台場ヲ構、同山坊中ヲ本陣ニイタシ、近辺之士民三十人計手下ニ付、翌十五日、中須賀御米藏ヲ開キ、米千石計盜取、此内少ハ四日市類焼之者ト



モヘ分遣シ、余ハ山上ヘ持登リ候事、

一大砲一丁・小銃三拾丁計船ヨリ送来候由、

一右之趣、追々日田永山郡代陣屋へ相聞候付、右探索

トシテ窪田治部右衛門・日田製勝組田島團次ト申モ

ノ、十五日、四日市表天分處ヘ差遣候処、同十七日、宇佐

宮境内ニテ被見頭、取子ニ相成、終ニ手下ニ付ケ、

山上ヘ被相伴候ヨシ、

窪田次部右衛門在勤已来、日田ニテ百姓町人等取

交、製勝組ト唱、千三百人程小銃隊取立、郡中大

困窮之由、右田島團次ハ製勝組ニテ、日田大原八

幡宮下杜家田島村團次ト申モノ也、

一十八日夜、花山院様長州ヨリ御渡海ニ付、御迎ニ罷

越候様、豊前中津表ヨリ申来候由ニテ、賊徒共四拾

人計、下山脚原文申所ヨリ、長州勢六拾人計上陸有之

候付、賊徒共ハ直ニ引返、右六拾人計之人数ハ、長

州本藩之人数ニテ、同二十日、四日市東本願寺出張

寺へ宿陣、夫ヨリ山上ヘ使ヲ以賊徒頭立候モノ罷出

候様申来候ニ付、平野四郎其外兩三人下山、萩勢之

宿陣へ罷越、一旦宇佐迄引取、

一同二十三日七時頃ヨリ、御許山山下ヨリ、大勢小銃

打掛、段々押登リ、追々賊等討取ラレ、同夜五時比、

山上火之手相見ヘ候、

一同日八時比、宇佐ニテ平野四郎被討取候由、

一同夜、團次ハ御許山逃下リ、翌二十四日朝、東谷之

方ヘ落行、同二十六日、在所日田へ帰郷イタシ候由、

一賊徒萩勢ニテ討取、頭分四人四日市梟首イタシ有之

由、

一萩勢ハ其俣、四日市下宿陣之由、

一山上ニテ賊徒共之言ニ、花山院様、最早当地ヘ御出

有之ソフナモノト、度々申居候ヨシ也、

一賊徒共、中須賀弦屋七左衛門方ニテ、金千両押テカ

リ受候由、

### 六一〇 諸大名參勤交代復旧達書

覚

今度參勤交代之儀、前々之通被

仰出候ニ付テハ、当年參勤年ノ面々ハ、前々參勤ノ期

限遅々不致候様、参府可被致候、且長防追討之面々モ

帰邑ノ上ハ、四月・六月前々割合之通參勤可被致候、

右之趣万石以上之面々へ、早々可被相達候事、

正月

六二一 大久保一蔵ヨリ西郷吉之助蓼田傳兵衛へ

書翰 五卿太宰府へ移住

御向殿様益御機嫌克被為遊御座、恐悅奉存候、各様御安康被成御勤奉恐賀候、扱小生事先月廿八日未明長崎出帆、同夜五ツ時分博多江着、翌朝筑藩帆足彌殊次兵衛之二右衛門江引合、五卿御軛座後之形行等及尋問候、筑前より則御分居之義等申上、当分は赤間ト申宿江御滞居ニ候処、別て茅屋ニて最初より御疑念も有之、末之事ニて種々不都合成立、内情甚混雜之次第ニ御座候、一昨卅日西田彌四郎急ニて出立之由候間、委曲形行可申出候間相省候、

一 筑前江は御内輪御使相勤候方可宜と之事ニて、其段引合候処、下野守様拜謁被仰付、年内就長征、大勢御領内江滞陣、種々御手数数ニ預り候御礼申上置、序ニ五卿折合之義、何分此未混雜不相成様御処置可然と之趣、委曲幸輔金目也一緒ニ申上候処、御承諾相成、尚 美濃守様被仰談、何れ御安心相成候様処置可致と之御事ニ候、一 去ル廿九日晚博多発足、久留米江差越、御使者之趣引

合候処、御側向戸田謙二郎參向ニ付、拜謁之義申入候処、差急之事候得は、今日中之処拜謁難相運候付、万端機事御談合相成候、今井榮江引合具候ては如何ト尚亦承り候、右今井義は村上同腹之者之由候間、返て同人江熟談いたし候方可然相考、

御書相渡、且

御趣意之形行委曲申合候処、昨朔日御返詞相成候は、大隅守様別段 御深意ヲ以被仰進候趣、厚忝被思召候就て、則御決答可被為在誤候得共、全体幽囚人数之義、次第柄ハ外々江被為対候迄之御処置振ニ無之、入込之内情も有之事ニて、則 御断決も出来兼候訳ニて、甚御本意ニ被為背候事ながら、篤と御勘考之上、追て御返詞從彼御方可被成と之御事ニて候、段々承候得は、直様

御英断之処如何可有之や、自ら近々御答可有之奉存候、一 久留米昨日七ツ時打立、博多江夜半着いたし候処、西田彌四郎云々之次第ニて、罷下り候段承知いたし、混雜と申も別段訳有る事ニ無之、別て御疑惑之処より、右式ニ及候訳ニ御座候、筑前之方ハ何分俗論不相止、沙汰之限りニて、只今ニ成候ては思ひ当り候向ニて、近

々宰府之方江御移居之筋ニ相決、此上は程克折合不附候ては不相濟之之向ニ相見得申候、依之幸輔義三五日滞在、宰府御移居何れ之筋決定相付候迄之処、見届候方可然と申談相殘、小生義今日直様出帆いたし申候、尚委曲之始末ハ幸輔より可申上、只今之処ニて、西郷兄御出懸可被成程之事ニも無御座候、乍併詰ル処ハ、御出不相成候てハ相濟申ましく奉存候、

右今日博多より出立之便宜有之、今日迄大略之形行申上候、奉達

御聴候義は、以御賢考宜鋪御頼申上候、以上、

二月二日

大久保一蔵

養田傳兵衛様

西郷吉之助様

追て小蝶丸ニは、当分遮て之御用も被為在間鋪奉存候間、暫時ハ攝海江碇泊為致置可申候間、左様御間置可被下候、出帆差懸り乱筆御免可被下候、  
(島津忠義氏所藏本にて校訂)

六二二 吉井幸輔ヨリ西郷吉之助養田傳兵衛へ書

翰 (五卿太宰府へ移住)

六二二  
春寒兎角不退去候得共、先以、

御両殿様御機嫌能可被為涉、恐悦御同慶奉存上候、次ニ御両公御揃御奉職之筈奉賀候、小生共ニも海路都合能、去ル廿八日当津江着舟、早速拜謁相願候得共、美濃守様御不例ニて、下野守様御逢被遊、五卿辺之儀、且有志共之歎願粗申上置計ニて、十分ハ不尽候、米藩も拜謁ハ不被仰付候得共、幸今井榮出會ニ付、是ニハ存分談論ニ及候、右委細ハ、大久保氏より可被申上候間、致省略候、

一五卿扱向之儀、当藩之俗論嫌疑を恐レ、甚以魚抹之次第、纒八疊敷ニ五人御同座之由、御附之壮士輩、憤激いたし候も当然之事ニ候、右次第ニて、御軛座涯より段々混雜、寺石も当所江出懸居、折角尽力之折柄ニて、直ニ面會、不遠西郷上京之賦御座候間、其折必五卿ニ謁シ、且京師表之尽力も仕候、御国論之段も、程能安心之為申聞置候、五卿ニも頻ニ御待之様子、且於京師、亦々五卿軛座之命共下り候てハ、大混雜ニ可及ハ案内ニ御座候間、可相成ハ一日も早目被差出度、一蔵殿よりハ、暫ハ御出ニ及間敷趣、被申上候由御座候得共、小生共所見ニてハ、此上何と致再命下り候てハ、信を

失ふのミならず、却て恨を請候機会欵と、例之世話ヤ

きニ御座候、(弥四郎)西田も御頼ニ依て罷下り候由、おのつか

ら事実御聞取可相成、池田も長府迄差入候由、旁之儀

ニ付、小生ハ暫ハ当国江滞在、当藩之俗論を破り、五

卿安着を見届、上京之筋相決申候、畢竟俗論之起り候

ハ、北小路より今度筑藩尽力之次第、被対

朝幕ニ御不都合と申儀ヲ相通シ、且會藩士先達て当地

江入込ミ、奸之内より面会おどされ候模様、其辺よりし

て嫌疑を恐レ、段々不都合到来之様子、事情ハ不分、

一方計之説を聞て、失策を施シ可笑之甚敷キ物ニ御座

候、当藩之形勢ハ御存通之事にて、反正之上もしれた

事ニ御座候間、五卿安住さへ出来候ハ、早々立退ク

合御座候、中村圓太も当所より出舟之折被見付、終ニ

割腹為致候由、残念之事ニ御座候、

一長州内乱も追々小迫合有之、十四五日頃大争戦いたし、

諸隊大ニ利を得、長府之激徒是ニ応し、岩國・徳山之援

兵も引返シ、清末中ニ入て段々説得、諸隊も屈服、去

ル廿八日迄双方戦を止メ候由、萩之方ニも内輪ニ三百

人程起り立、隊ニ応シ候共相聞得候、右寺石が話ニ御

座候間、少々ハ隊ニ勢を付咄シ候欵も難計候得共、勝

利ハ無疑事と被聞申候、此旨形行任幸便申上越候、猶  
近日中五卿江も拜謁折合候、御届可申上候、以上、

吉井幸輔

二月二日

蓑田傳兵衛様

西郷吉之助様

追て、今朝小蝶丸ハ当津出舟、独被残中々のし不申

候、一日も早く都江と急ク心中御隣察可被下候、

〔たえがたい〕  
の方言  
〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

六二二

別啓

村田新八・坂木六郎、右兩人五卿御附被仰付度奉存候、

只今ニテ彼是相済マシ度相考申候、以上、

二月二日

六二三 西郷吉之助ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰

両士之書面、連中ニテ開封イタシ候処、段々兩人ニ

テキマリヲ付居候様子ニ御座候間、仕合之事ニ御座

候、乍然是非參掛候間、一往ハ是非不參候テ不相済

義ト相考候付、吉井出立不致内ヤリ付候含ニ御座候、

此旨一筆啓上イタシ候、頓首、

西郷吉之助

(編島直大、佐賀藩主)  
松平肥前守

二月五日

養田傳兵衛殿

六一四ノ一  
五卿附属ノ者トモ人数引分方四藩へ御達

松平美濃守

六一四 舊邦秘録

六一四ノ一  
二月十一日

五卿引分方筑前并四藩へ御達

松平美濃守

三條實美始五人ノ輩、並附属ノ者トモ、手番ヒ次第各藩へ引渡方ノ儀、頃日相達候、就夫是迄實美初へ附属脱藩人各藩申合、程能人数引分ケ、引渡方可被取計候、尤右ノ趣細川越中守初へ相達置候事、

二月十四日

細川越中守

有馬中務大輔

松平修理大夫

松平肥前守

三條實美始五人ノ輩、御自分へ請取候段被相達候付テハ、五ヶ国へ引分レ候儀、万一運ヒ兼候内情有之、御自分並外一ヶ国へ、両三人引分レ候儀相整候時宜ニ至リ候ハ、先其意ニ可任哉ノ趣、旧臘廣島表ニ於ヒテ伺出承置候儀ニハ候へトモ、畢竟先方ノ心俣ニ有之候テハ、御威令難相立候間、精々申談實美初五人ノ輩並附属ノ者共手番ヒ次第、最前相達候通、各藩へ引渡方尽力被取計候様、可被致候、尤請取方等ノ儀、細川越中守初へモ相達置候事、

二月

(斉藤、熊本藩主)  
細川越中守

(慶親、久留米藩主)  
有馬中務大輔

(島津茂久、薩州藩主)  
松平修理大夫

六一五 五卿御預ケノ達書

松平修理大夫

三條實美初五名ノ輩并附属ノ者共引渡方ノ儀、松平美濃守へ申談候付、請取方ノ儀頃日相達候、就夫實美初ニ附属脱藩人各藩申談、程能引分ケ引渡候様可取計旨、美濃守へ申談候、得其意宜被取計候事、

右之通、智恩院御旅館へ呼出、長谷川惣藏ヨリ相渡

候事、

元治元甲子二月十四日

六一六 海江田武次ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰

中将様より長岡良之助様江

〔謹美〕

御書被進、御使者相勤候様承知致し、去月廿一日熊本江着、則良之助様御側動淺井新九郎江、面合拝謁被仰付度旨申入候処、無御拋御差支被為在、御都合不被為出来、夫故口上申述、御書は淺井江慥ニ相渡候処、

良之助様御拜見相成候得は、

中将様御懇意ニ被仰聞候次第、一々御尤千万、殊ニより此方より御使者可被差上旨、淺井より御返事相成申候、左候て応答之次第左に申上候、

一 良之助様ニは、弥御上京被遊候哉、如何之思召ニ被為在候哉と相尋候処、唯今通之処ニテハ、迎も御上京之御賦に無之、

中将様ニは如何之思召ニ被為在候哉と尋問相成候間、

左様ニ御座候、多分

御書ニも被申上候通、御老体之事ニも有之、尤多病にて、御上京は被為出来かたく候よし、又唯今之形勢ニ

て御上京相成、天下之御為筋相成候見込、寸分無之、

却て害を生し可申儀と、われく式相考申候、何事も打捨候事ニは有之ましく候得共、当時之処にてハ、國を嚴重ニ致し候外無之、左候て此末天下之御為必ず相成候見込可有御座なと相答申候処、淺井申候ニは、至極之御同意ニ候、弊藩之議論も色々にて、御上京被為在たひ杯云々申候者も可有御座候得共、決して其儀不<sub>レ</sub>宜、いつれ富國を本体として、武備嚴重可致義、当時之道理ニ御座候、良之助様ニも決てく御上京ハ、遊されぬ御決心ニ御座候、此中は一橋様より御迎ひ見るよふな事柄も有之候得共、御上京不被遊候旨承得申候、一 淺井申候ニは、尾張様御心配にて、何れ天下之事は、一橋様・越前春嶽様

中将様この御三公御親睦不相成候ては、此末治も付兼、其事を計るニは、良之助様御任とやら申事にて、尾藩之者申上候訳可有御座哉ニ御座候段、被申聞候付、成程御尤ニ候、しかし

中将様におひてハ、天下之御為ニさへ相成る事ニ御座候ハ、御不和之、御親睦之と申様な事ハ露程も不被為在、貴君方も御案内之筈、昨春諸賢公方不抱私心天

下の御為御心配中之折柄、一橋様より 中将様ニかき  
 らす春嶽様初賢公方、悉く御拒ニ相成、夫より唯今通  
 之事ニも成行候半と相考申候、一橋様何の御趣意にて  
 賢公方を御拒ミ相成候哉、あなたかたハ如何御心得相  
 成居候哉と問掛候処、成程此義ハおかしき事と相考申  
 候、尾藩之者より密ニ承得候義は、一橋様幕を置、諸  
 侯江事を計るニおひて、幕より甚御嫌疑御受候故之事、  
 又一ニは横濱開鎖の御論御不和、夫等の事にて、昨春  
 の御次第ニも成立候様子ニ御座候なと承り申候間、  
 成程其儀は粗承居申候、幕の御嫌疑とやらにて云々、  
 思召相成候御趣意、如何様成者致一向相分不申候、又  
 横濱開鎖之事ハ未前之御論、是ハ御銘々御遠慮も被為  
 在候御事ニ御座候得は、其篇にて諸賢公方御拒相成候  
 てハ、実に天下之御不幸歎息千万ニ御座候、此末の治  
 乱いつれ一橋様御心中ニ可有御座、精実賢公方を御依  
 頼一物一和にて、天下之事を御計り被遊ニおひてハ、  
 先平治之見込もと御座候得共、唯今通にては、幕之暴  
 威ハ益々募り、中々六ヶ敷世上ニ成行可申抔申置候得  
 ハ、向よりも同意の嘶種々有之候得共、略し申候、  
 一馬之義式定とも病眼之よし承申候間、夫ハ甚失礼之至

御返し可被下候、外ニ吟味いたし差上候様可致段申置  
 候、

右之大意、爰許にて大久保氏江申出候処、貴君江申  
 上越置候様承知いたし候間、格別入込之事ハ無之候  
 得共、粗如此御座候、よろしく御披露奉頼候、以上、

二月十七日

海江田武次

蓑田傳兵衛様

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

六一七 道島家記抄

六一七ノ一 前条蒸気船ヨリ便船ニテ差越候浪士ノ名前

土佐

寺田信左衛門

家来一人

右同

上杉米次郎

右同

今野賀松太郎

右同

菅野覺兵衛

勝安房守家来

黒木小太郎

越後長岡

鶉飼豊之進

讃州塩飽

萬次郎

長崎水夫

橋本久大夫

伊豆

兼吉

肥前

初三郎

伊豆

彌七

右同

藤八

奥州南部

富蔵

讃州塩飽

友吉

伊豆

越前機械小頭

惣七

野村才吉

越前

伊助

紀州

新吉

武州

安吉

右八大乘院坊中威光院へ被召置候事、

丑二月十八日

六二七ノ一  
いそかれし野路は夕べに影さして

行かたくもる夕立の雨 のの子

寺田伊左衛門詠候由、小短冊ニ書シ有之、筆跡モ見事

ニ御座候、

六一八 道島家記抄（京攝雜報）

一乙丑二月廿日上京、御老中松平伯耆守・豊後守式千五

百人程召到着有之候処、当時関白様二条様ヨリ御用召有



之内、老入參殿被致候処、此節多人數列立上京イタシ  
 候儀ハ、何事ノ用向ニテ候哉ト御尋ニ付、此節ノ儀ハ  
 内々無抛用向有之上京仕候、右ノ訳ハ何トモ難申上候  
 旨申上候処、夫程隱密スヘキイワレモ無之、何様ノ事  
 候トモ少モ不苦候間、可申出旨被仰出候間、左様ナラ  
 ハ可申上、其子細ハ当將軍ニモイマタ年若ニテ、政事  
 向モ行届カタク候間、市橋ヲ吹下、(榮之)政事向ノ談判イタ  
 シ候ハ、可然、右ノ趣篤ト談合可仕考ニテ上京仕候段  
 申上候処、夫ハ決テ不相成、イマタ長州一件モ不相片  
 付央ノ事ニテモ有之、其事ハ不相成、此節諸大名參勤  
 本ノ通命シ候由、是ハ何様ノ事ニテ右次第ニ候哉、伺  
 ニテモイタシタル事哉ト被仰候処、決テ左様ノ事ニテ  
 ハ無之旨申上候処、是ハ自由ノ取計不相成、老入ハ直  
 様江戸ヘ差越、早々將軍上洛有之候様可取計、老入ハ  
 右式千五百人ノ人数大坂ニ差越、警衛イタスヘク旨被  
 仰出、早速其通相成候由、此事ハ先達テヨリ評判有之  
 候得共、決テ風説ナラント存候処、今月東郷七郎次差  
 越候処、内田仲ノ助(政風)ナリノ由承候。テ記置也、丑四月  
 六日、

一三條様已下五卿ノ衆守衛人交代者、重候テ差越候処、

丑四月十九日帰着、三原次郎左衛門・山口彦七杯ニ候、  
 此山口子ノ嘶ナラト承候、当分筑前宰府ニ滞在中々ノ  
 勢ニテ、勅使杯ノ下向ノ様ニ有之、分散杯被致様ノ  
 形勢ニテ無之候由、勿論此御方様ヘ御下向ノ由ニモ相  
 見得候由ニ候、筑前モ殊ノ外沸騰イタシ候様子ニテ候  
 由、日々何方モ相替リ、何篇不自由ニテ候由、

但此等ノ咄ニハ、筑前殊ノ外沸騰イタシ、五卿ノ衆  
 モ難儀被致、本ノマ主人杯モ不被思由ノ嘶ニ候処、  
 当分ニテハ前条通 勅使杯ノ下向ノ処ニ勢ヒ強キ  
 候由、

六一九 小松帶刀ヨリ西郷襄田ヘ書翰

於其御地

上々様御揃益御機嫌克被為 入、恐悅御儀御同慶奉存候、  
 倍爰許之形勢ハ追々申上候通御座候処、此節御老中兩人  
 上京ニ相成、段々趣意モ有之模様ニ被聞、尤歩兵三千人  
 計曳卒相成居、去ル十五日參 内被命候得共、白川侯御  
 煩ニテ御断ニ相成、一昨日差揃參 内相成候、何モ言上  
 ハ無之、閔白様ヨリ段々御尋ニ相成、何事モ只恐入ト計  
 申上居、夷ニ閉口之様子、左候テ白川侯ハ大樹公御召ニ

付、早々駈下り尽力イタシ候様被仰付、宮津侯ハ兵庫・大坂之御警衛相勤候様被仰付、今日出立ニ相成賦御座候、何モ御用筋ハ無之、余計ノ多人数度々ノ往来、財ヲ費シ候計ニテ、珍敷事ニ御座候、将又大久保江被仰付越候御参勤一条等モ、両閣老江モ 殿下ヨリ御達ニモ相成候得共、是モ只恐入ト計申候テ、何共不申上、併此儀ハ朝廷ニテ已ニ全体

思食モ被為在事故、二條公・正三卿江段々申上候処、能キ御都合ニ御座候間、不日何トカ相運可申ト相考申候、防長御所置ノ儀モ、此節関東表御達ノ事モ御差留、大樹公御上洛之上可被 仰出旨ニテ、御達ニ相成候筋ニ精々申上候処、是又其通ニ運立向ニテ、誠ニ天下ノ大幸ニ御座候、右通ニテ未十分ニ運兼申候間、大久保ニハ右相運迄ハ滞京不致候テハ難相濟、殊ニ右之御返事承知仕上申処ニ相成候得ハ、二條公辺ノ所モ早々御運モ相付候事ト存候間、相分次第出立イタシ候様申達置候間、形行可被達貴間候、且又筑前御滞在五卿ノ儀、夫々国々江請取候様尾州ヨリ達ニ相成候得共、何分五卿御動座之処ニ相成候テハ混雜モ差見得居候間、(平人正)成瀬等江申込、先今成ニ被成御滞筑候様相成、一時仕合之都合ニ御座候、右ニ付五卿

方御方御安心ノ為、誰ソ爰元ヨリ差越候方可然トノ事ニテ、内田仲之助小蝶丸ヨリ被差立、筑前江立寄、御国許之様罷下候様申渡、爰元之形行当人ヨリ申上候様、大小ト無申含差越候間、詳細御聞取達

御聞候儀、宜敷御取計可被成候、夫故細事致筆略候、以上、

二月廿四日

小松帶刀

養田傳兵衛殿

西郷吉之助殿

書添、仲之助ニハ其御元御用濟ニハ上京被仰付度御

座候、

六二〇 大久保一蔵ヨリ西郷吉之助養田傳兵衛へ

書翰(阿部松平兩閣老  
上京事件其外)

余寒去兼候得共、

御而殿様益御機嫌克被為遊御座、恐悅御同慶奉存候、

扱御当地形勢、去ル十七日飛脚被差立、御問合申上越候通ニテ、(正外)両閣老阿部豊後守・松平伯耆守上京、

朝廷江言上之趣有之、前以橋公會藩等江申出候形行ニ

ては、不容易暴威ヲ振ひ候賦ニ被察、先便申上候条々

之趣ニテ、十五日參

内は延引相成、一昨廿二日両閣老差揃参

内有之候処、誠ニ案外之都合にて、二條公よりした  
ゝか庄倒せられ、伯州江今日下坂、兵庫辺警衛いたし  
候様、豊州ハ今日関東江駈下り、大樹上洛周旋可致御  
達にて、御請申上候由ニ御座候、昨日大夫同道、二  
條公より相伺候次第左ニ大意申上候、

一 両閣老江何等之訳ヲ以上京いたし候哉と御尋之処、  
朝廷江言上之趣意無之、一橋江用向ニ付上京いたし候  
段申出、其趣意如何ト御尋之処、何分此席にてハ恐入  
候付、

殿下江参殿可申上と之事候処、宅江参候ては旁迷惑候  
間、少も不苦候付、是非申上候様御詰問にて再三ニ及、  
漸々申出候は、常野浪士之義未鎮定ト云ニ不至、且水  
府国内之混雜も有之候得は、大樹公別て御配慮候間、  
一橋江暫時御暇被成下度、左候得は万端示談ニ及度と  
之事候処、此義は以之外なる訳にて、昨春大樹東下之  
節、御直ニ一橋ヲ名代ニ滞京為致候間、御暇被成下度、  
左候へハ鎖港之成功ヲ遂度と之言上ニも相成、且は京  
師守衛惣督にて、長州犯闕之砌ハ勿論、則此節常野浪  
士之事變ニ付ても、惣督有て安

宸襟候訳ニ候、此時節ニ当ては、亦如何様之變も難凶  
候得は、御暇難相成段御答候処、如何様ニも御尤之義  
にて、奉恐入候段申出候由、尾張之義も御用被為在由  
候得共、相済次第出府之御暇被成下度ト之事にて、是  
も長州御処置、一定之間不相成段御答にて、奉恐入候  
段申出候由、

一 二條公より、昨春大樹公上洛、

宸翰ヲ以御達之趣有之、直書ヲ以御請相成候義、一ヶ  
条も尊奉之筋不相見、其方等ハ新参にて相分り兼候半  
か、併伝聞も可有之、是ヲ見よと御請書御差出相成候  
処、両閣拜見平伏して、不堪恐懼とのミ申居候由、扱  
一体東西懸隔之訳にて、事情不通之訳も可有之候得共、  
関東にて

京師ヲ疑奉り、討幕之御趣意の、或ハ幕ヲ御込らせ被  
成と言様なる、けしからぬ趣意有之由、以之外なる事  
ニ候、畢竟幕府御扶助之  
御深意にて社、追々難有

御沙汰有之訳、幕府御助被成候も  
天下之為ニ候、今幕ヲ討テ何之国家之益可有之哉、右  
様疑惑ヲ生シ、

朝廷ヲ奉疑候ハ、大樹公ハよも左様之心底ハ有之まし、  
定て閣老等之内より、左様之異説主張之者有之候半、  
其姓名ヲ聞んと御詰り懸之処、誰と申訳ニ無之なと申  
て、恐入居候由、

一右之外此節大膳父子出府、五卿護送之義、常野浪士之  
処置、諸大名參勤等之義、不可行之訳条理明白御詰問  
被為在候処、一として申開いたし候訳無之、何事も御  
尤恐入奉り候と之事候由、

右之通之大意之形行にて、如何様

御沙汰相成候ても、前条通御尤恐入奉ると之事にて、  
如何様論し候ても無益ニ候、仍て豊後守は、先度上京  
之節、大樹上洛之御請いたし東下、此節上京と定て其  
事ヲ奏し候半ト存候処、以之外なる訳ニ候、就ては早  
々東下いたし、神速上洛有之候様必死之尽力可致、伯  
耆守義ハ攝海異難之憂も有之、且ハ潜伏浪士之説も有  
之、諸藩ニても不被命候ては不相済折柄候間、幸ニ歩  
兵とやら多人數引卒之由候付、為警衛早々下坂探索之  
上、何分可申上と御沙汰有之候処、各畏伏、明後廿四  
日早々出立可仕、兩人共御請申上候由、

一右ニ付御參府一条之義は、第一奉命之訳有之、委曲申

上置候次第、大膳父子出府、五卿護送之義前条通御詰  
問相成候迄にて、別段御沙汰と申訳ニも無之候間、其  
段奉伺候処、其儀ニ候迎も、閣老江達候ても、右通ニ  
て其詮無之候間、大樹上洛之上御評議可被為在と之御  
事候由、御答ニ候、併此兩条ハ上洛ヲ待候ては、既ニ  
幕命相成居候訳にてハ、諸藩内情込り入候訳云々候間、  
是非表通

御沙汰相成候様奉願候処、尤之事にて早速御評議可被  
遊と之御事候間、不遠運相付可申奉存候、尤

御沙汰書にて御達相成候様、屹と御尽力可被下と之為  
勝御請合にて御座候、

右は概略之形行にて、巨細閣老御問答之条々、迎も  
筆紙ニ難書記、仍て彼是之情態言上之為、内田仲之  
助江被相合、小蝶丸より被差下候間、御聞取之上、  
御両殿様達

御聽候義、可然御取計可被下候、以上、

二月廿四日

大久保一藏

蓑田傳兵衛様

西郷吉之助様

追て、私事も可成早目復

命之合候得共、本文通御参府一条首尾不相成候付、  
結局相付候得は、直様帰国可仕候、小蝶丸より帰帆  
之筋先度申上置候得共、余延引相成、筑前五卿一条  
且五卿一条、幕より御達之飛脚も有之、出帆いたし  
候方可然と之御吟味にて、出帆相成候、尤中旬比蒸  
艦上坂之由候得は、近々上坂可有之候間、其便より  
小生帰国可仕候、左様御含可被下候、

一 一応帯刀殿就帰国、(伊勢)諏訪大夫京都詰御談合も申上置、  
御内聴にも達置候、(小松)小大夫も模様次第二ハ候得共、  
遅くても来月中ニハ出立之筋、談合いたし置候付、

早々諏訪大夫小蝶丸よりニても上京相成候様被仰付  
候て、宜鋪ハ有御座間鋪や、左候得は一時ニても小  
大夫重り合、諸事附属も可有之儀と奉存候、何分、  
思召被相伺、宜鋪御尽力可被下候、

一 加藤雄介其余五人、小蝶丸より被差下候、最初より  
寛宥之御趣意ヲ以御処置被為在度、併犯国禁候法ハ  
不相立候てハ不相叶候間、何分宜鋪御評議可被成下  
候、橋口義ハ、(吉之丞)右人数と異論相立、列ヲ離高野辺江  
潜伏之由ニ相聞得候間、則御手被召付候、不遠被差下

候都合ニ可相成候、(休之進、中井弘蔵旧名)横山義再三之義にて、此節及帰

参候得ハ、親類より殺れ候ハ案中故、難罷下段申募  
居候付、決て不及懸念段申論、帰参之筋ニ決定相成  
候、相当之御処置なれハ、外ニ道有之間鋪候得共、  
別段出格之御憐愍ヲ以、一命丈ハ御助ケ相成度、左  
候得は早目親類江疎忽不相働様、御内達被下候様、  
御取計可被下候、尚い細ハ内田より御聞取可被下候、  
(島津忠承氏所屬本にて校訂)

六二 吉井幸輔ヨリ西郷吉之助養田傳兵衛へ

書翰

春和之候、

御両殿様増御機嫌能可被為入、恐悦御同慶奉存上候、  
次ニ貴公様方、愈御堅固御奉職可被成御座、珍重奉存  
候、随て野生御同前罷在候、乍憚御安慮可被下候、当  
地彼是紛擾、大難事計にて、実ニ

朝廷之御苦慮奉恐入候次第御座候、乍併一昨廿二日、  
閣老両人参

内、鶏鳴迄御談論被為在、一々御説破相成、両閣老一  
言も不相成退出仕候由、誠以断然たる御決答、恐入難  
有次第御座候、此上承服仕候得は、天下太平無疑事御

座候得共、又暴威を募り候欵も難計、実ニ大事之御場合と罷成申候、右次第委曲之儀は、小松君・大久保氏より可被申上候間、省略仕候、猶内田より詳悉御聞取可被下候、

一 出立之砌、春嶽公江御伝言之趣、酒井十之丞江面会仕候て、可相成ハ福井迄参上、御直ニ申上度申述候処、

〔忠温、福井藩士〕

此節春嶽公御近習之者大井彌十郎帰国仕候付、同人江被仰聞候て不苦候ハ、右を以被仰進被下候てハ、何様可有御座哉之趣承り候付、其刃之儀は、十之丞在京ならば、如何様共時宜次第可致旨御沙汰被為在候間、大井氏江御直ニ可申上、返答いたし候処、兩人同意、私方江参候付、承知仕候形行大井江申聞、私儀ハ福井行取止申候間、其段御披露可被下候、

一 五卿分配之一条も、彼是六ヶ敷御座候へ共、先當時之処、程能五藩申合候様との処にて、一時治り申候、此等之儀<sup>逐</sup>一仲之助より御聞取可被下候、西郷君ニハ筑前刃迄御出懸之由、暫時なり共当地迄御出被下候へは、至て仕合之事ニ御座候、

一 天下之形勢どふも難被黙止御場合ニ至り、尤此節は御国是相定候機会欵と愚察仕候、橋公ニも拜謁いたし候

処、余程前非を悔ひ候御話共も御座候、適是迄御仕懸被遊候御事ニ御座候間、御国是相立候御見留為被在候ハ、御尽力被為在度御事にて、屈竟之場合を人ニせられ候ハ、些残念なる心地仕候、

右公私取交荒々如此御座候、猶奉期後音候、恐惶謹言、

吉井幸輔

二月廿四日

蕨田傳兵衛様

西郷吉之助様

貴下

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

## 六三二 舊邦秘録

六三二ノ一

御参内有之長防鎮静御奏達〔尾張前大納言繪督日記抄〕

謹テ奉言上候、毛利大膳父子追討為惣督臣慶勝儀藝州廣嶋へ出陣仕候処、大膳父子寺院蟄居謝罪仕、暴臣並參謀ノ徒斬首申付、罪魁ノ首級差出逐実檢、其後愈以悔悟服罪仕、長防全鎮静仕候ニ付、猶兩州鎮撫方夫々申渡、臣慶勝儀当正月四日廣嶋表陣払仕候、尤委細幕府へ相達申候間、大樹ヨリ 奏聞可仕奉存候、右ノ通

速ニ長防鎮靜仕候段、全御威異故ト不堪感激ノ至奉存  
候、誠恐誠惶頓首敬白、

二月 御官御諱上

六三ノ二 右ノ節左ノ書付御差上有之、

十一月朔日大坂發途、同十六日藝州廣嶋へ着到、

十一月十三日首級廣島へ護送、

十一月十八日攻懸日限見合ノ儀、同十四日使ヲ以討手  
ノ諸藩へ申渡候事、

十一月十八日首級実檢、

十一月廿日首級吉川監物へ為引渡遣ス、

一同日三條實美初五人ノ輩、長州ヨリ受取、預リ置候様、  
松平美濃守初へ申渡候事、

十二月五日毛利大膳父子始、自判恐入ノ書付指出、

十二月十四日長防見届ノ者、發途申付候事、

十二月廿四日山口新築破却場所並萩城内等見届渡ノ  
趣、廣島へ申來候事、

十二月廿七日討手ノ諸藩陣払申渡候事、

一益田右衛門介・福原越後(元側)・國司信濃妻(親指)子親類へ氣ヲ付  
候様沙汰、右家来トモハ分家ノ者へ鎮靜方申付置候旨、

大膳家老申達候事、

一正月四日廣島表發途、同十六日大坂へ到着、

一三條實美始五人ノ輩、正月十五日長州ヨリ松平美濃守  
へ受取候事、

一實美始ニ付屬脱藩人ノ儀モ引渡方申渡候事、

一實美始左ノ通分配方申渡候事、

松平美濃守へ

三條實美

細川越中守へ

三條西季知

有馬中務大輔へ

東久世通禧

松平修理大夫へ

壬生基修

松平肥前守へ

四條隆謨

一諸隊為追討毛利長門二月朔日出馬、明倫館へ滯陣ノ処、  
隊長ニ於テ恐入候ニ付、所々屯集ノ者トモ速ニ山口マ  
テ引取、追テ沙汰次第他地へ退散可仕旨申渡候処致承  
服、追々鎮靜ニ到リ候事、

但山口新館開門等修理ノ体更ニ無之事、

六二三 三條初御呼寄ノ儀暫御猶予ノ儀幕へ御達

三月五日諏訪因幡守殿へ為御差出

三條實美始五人ノ輩、松平美濃守へ引渡濟ノ儀、先達

テ申上置候、右ハ實美始（美始分記ノ名前書ナリ）別紙ノ通各藩へ引渡

方取計候様、美濃守へ申渡置候間、引渡濟ノ境申出次

第可申上候、就夫實美始引渡ニ付テハ、難黙止事情モ

有之、彼是遲緩仕候ニ付、美濃守へ精々申談、專尽力

為取計候折柄、實美始江戸表へ差越候様被

仰付、美濃守始各藩ニ於ヒテ、深心配仕候儀ニ御座候

間、暫御猶予御座候様奉存候、依之右一通相添申上候、

二月

御官

六二四 道島家記抄

（高岡・倉岡・饒・櫻佐ノ四ヶ郷ノ通称）  
關外ノ紙札他領へ全ク通融不致、用可甚辛配シ、紙札

ヲ諸領へ貸付相成候処、殊之外俄ニ富貴ニ相成、高岡（高岡郷東諸領郡）

辺ハ殊之外縁合不宜候由、此方ヨリ本手ヲイタシタル

所置也ト、皆々抱腹イタシ人モ多ク候ヨシ、丑二月廿

九日ノ嘶ナリ、

六二五 舊邦秘録

六二五ノ一  
三條實美始五人ノ輩、松平美濃守へ受取相濟候付、各

藩へ引渡方ノ儀、美濃守へ申談候付テハ、三條西季知

（細川）・東久世通禧（有馬）・壬生基修（薩州）・四

條隆諤（肥前）御自分へ御預ノ筈候間、請取方等宜被

取計候事、

二月

六二五ノ二

三條實美初五人ノ輩並附属ノ者トモ引渡方ノ儀、松平

美濃守へ申談候付、受取方ノ儀頃日相達候、就夫實美

初ニ附属脱藩人、各藩申合程能引分ケ、引渡候様可取

計旨、美濃守へ申談得其意宜可被取計事、

二月

六二六 高島右衛門ヨリ小松大久保へ書翰

以手紙得貴意候、鬱々敷候処弥安康珍重奉存候、然ハ

過日来ハ毎々御参 殿御苦勞之御事ニ奉存候、扱時々

一橋様ヨリ原市之進ヲ以被仰上候ニハ、昨日ハ御両所（忠成）

様一橋様へ御参殿被召、御達一條中納言様ヨリ各様へ



御直談ノ御様子委細被仰上、先伯耆守ヲ被召、右ノ御趣意相届候様、御沙汰ニ相成候様、御取計ノ様被相願候ニ付、無程御出門ニテ御參 朝被遊、則今日右辺ノ御 朝評被遊候思召ニ御座候間、御所様ニモ昨日一橋様へ御直話之御様子故、此儀御承知トハ被思召候得共、過日ノ御沙汰統ニモ候間、為念之此段可得貴意候様被仰付候間、依テ此段申上候、早々、以上、

三月六日

尚々乱書、殊ニ文言前後不揃、御推読被下候様希候、以上、

高島右衛門

小松帯刀様

大久保一蔵様

六二七 大久保一蔵ヨリ西郷養田へ書翰

尚々帯刀殿ヨリ別段何モ不被申遣候間、私ヨリ其段宜敷申上呉候様トノ事候間、御家老衆へハ御含ヲ以、御申上置可被下候、

御両殿様益御機嫌克被為遊御座、恐悅御同慶奉存候、御当地形行ハ、先月廿四日内田仲之助被差立、小蝶丸

ヨリ罷下候間、疾ニ相違候半ト奉存候、其后諸大名參府一条、長州大膳父子五卿御処置一条、 朝命相下候様段々尽力仕、二條公能々御請合、其余議奏衆刃ニ至リ、御同論之事候得共、表通ハ同シテ、陰ニ違背之方(備前守)モ有之、都合三度之 朝議ニテ、漸去ル二日、御別紙之通伝奏ノ手ヨリ所司代江表通御渡相成候都合ニ御座候、然処又々一難到来、會津・所司代ヨリ一橋江談合、少々内評義有之、 勅書所司代方江留置、尚一橋ヨリ子細可申上候間、其内右通被聞召置被下候様御届相成、大ニ力ヲ落シ、尚又二條公其外へ奔走仕候処、昨日一橋ヨリ帯刀殿御召ニテ、同道ニテ伺候イタシ候処、右之一条御相談ト申御事ニ御座候訳ハ、此節 勅書ニケ条之趣、別テ御至当之御趣意ニ候処、何分御書面迄突然御下ケ相成候テハ、逆モ現事被相行候処無覚束、適被仰出候御趣意、是非空言ト不相成候様、手数ハ尽シ度事候間、幸松平伯耆守滞坂故、早々御召呼御趣意柄御諭解被成下、右之 勅書御渡、早々東下被仰付候ハ、先少々ニテモ御趣意貫徹致シ候儀ト御勘考候、外ニ段々異説モ相立、御止ニ相成度ト之義モ有之候得共、一度被仰出候儀ヲ、奉返ト申ハ、条理ヲ失候故、決テ

御不同意思召サレヌ候、右通ニテ宜敷候ハ、則ニ條  
公江形行言上之賦ニ候間、尚所存承度ト之事故、其通  
ナレハ、別テ御宜敷候半ト、大夫ヨリ御答被申上候テ  
引取申候、然処昨日原市之進ヲ以ニ條公江形行被仰上、  
今日二條公御參 内被及 朝議候段ハ、別紙二條公御  
用人高島右衛門書翰之通ニ御座候、最早此上ハ万々相  
違有之間敷、左様御舍、御兩殿様達御聴候義宜敷御  
頼申上候、伯耆守今日御召相成候得ハ、三日中ニハ上  
京イタシ候付、弥結尾相成候ハ、則、翔鳳丸ヨリ罷下  
リ可申候間、是又左様御舍可被下候、帰国之上詳細可  
申上候得共、前条通少々延引ニ及候故町便取仕建、大  
略之形行申上越置条、余ハ何モ相省キ候、以上、

三月六日

大久保一蔵

蓑田傳兵衛様

西郷吉之助様

追テ、御兩君御安康被成御精務、奉恐賀候、随テ小  
生事御同様滞京仕候間、左様御安意可被下候、翔鳳  
丸モ着坂之由今朝相分、守衛方人数モ兩日中ニハ着  
可致候、尤交代之人数モ、翔鳳丸ヨリ被差下賦ニ御

座候、

六二八 鹿兒島ノ形勢

丑三月十二日夜、四ツ過ニテモ候哉、雷鳴夜半過相鎮  
リ候処、又曉方ヨリ頻リニ雷鳴、大雨ニテ夜明ケ方ヨ  
リ晴レ上リ候、然処噉啖郡辺又大崩レ候、山塩出候様  
トノ事ニ候、大ニ洗剝、当分

(發久公)  
太守君榮之尾へ被為入居候処、霧島山ハ殊之外洗崩シ、

御狩モ出来兼、廿二日ヨリ御帰殿之筈候処、モシヤ御  
狩モ不出来候処、御引寄十九日ヨリ御打立御帰殿ノ筈  
ニテ候、

但

年内ハ殊之外天氣モ宜候処、年明三日方ヨリ当分  
ニ至リ、殊之外雨降ツ、キ、二三日ト快晴之事モ  
無之、夫故麦モ殊之外痛ミ候由、

六月十七日記ス、

六二九 大久保一蔵ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰

御兩殿様益御機嫌克被為遊御座、恐悦御同慶奉存候、  
扱奉 命之一条、町便ヲ以申上候通、

勅書所司代へ御渡相成候処、一橋公・會・桑内件之趣有之、少々差扣、伯耆守御召呼ニテ、御趣意柄御達之上、右

勅書被相渡候様言上相成、其通 朝議一決、則伯耆守被召候処、一昨十三日上京、昨十四日参内ニテ篤ト殿下ヨリ御趣意御達、

勅書モ御渡、明十六日出立、東下之御請合奉申上候由御座候、逆モ難被行訳ヲ以、少々奉拒候向候得共、

殿下ヨリ条理明白、御説得被為在、終ニ奉畏伏候由、此上於関東<sup>(遊奉カ)</sup>尊捧之処、何共難凶候得共、右通断然 御

沙汰相成罷候得ハ、責ヲ塞候訳ニテ、先々大慶之義ニ御座候、伯耆守御請之処如何ヤト懸念仕居候処、十分之御都合ニテ、頓ト安心仕候、最早結尾相成候間、幸

翔鳳丸廿二三日方出帆之節候付、廿日方御当地出立、便舟ニテ罷下候賦御座候、今日定式飛脚通行イタシ付、定テ達着モ不被凶候得共、為念大略之形行申上候間、

御両殿様達御聴候義以御含宜敷御頼申上候、委曲ハ帰国之上可奉言上候、以上、

三月十五日

大久保一蔵

養田傳兵衛様

追テ、別紙御問合ニハ何モ不申上筋ニ申上候得共、海上之義、若延引モ難凶事ニ候ニ付、大略本文之形行申上候、別紙ハ其マ、差上候ニ付、左様御含可被下候、

六三〇 寺嶋宗則自記抄(留学生及ヒ王政復古ノ事ヲ英國外務大臣ニ説得ス)

慶應元年乙丑

(英國船)

三月十九日、五代才助ト共ニ一汽船ニ乘リ長崎ヲ発ス、薩海串木野郷ノ海岸羽島ノ側ヨリ上陸スレハ、新納刑部等茲ニ来リテ、船ヲ待ツコト久シ、新納ハ当時ノ家老ニシテ、生徒ノ主宰トナリテ、洋行スヘキノ命ヲ得タルナリ、町田民部モ若年寄ナレトモ、洋行ノ志アリ、合シテ生徒十五名、其他余ト共ニ五名、今存シテ官籍ニ在ルハ、森有禮・吉田清成・松村淳蔵・町田久成・中村博愛・田中静洲<sup>朝倉藩守</sup>、磯永彦輔<sup>彦名長澤</sup>、生徒中ノ少年ニシテ、十四歳ナリ、今ハ三十七歳ナルヘシ、宗教者トナリ、米国ニ在テ日本ヲ忘却シ、帰朝ノ意ナシト云ヘル奇人ナリ、三月二十二日羽島ヲ発シ、五月二十八日英国ソーサンプトンニ着ス、六十五日ノ航海トス、同日龍動ニ至リ一屋ヲ借り同宿シ、大

学校化学教師ウイルムソンノ監督ヲ以テ、二名ノ読書師ヲ聘シテ教授セシム、宗則ハ之ニ属シテ龍動ニ駐リ、新納・五代ハ英語通弁、堀壮十郎及英人ホームヲ携へ、英国中ノ名所及ヒ佛国・比義等ヲ巡回シテ、龍動ニ帰ル、生徒初ハ皆同居ナレトモ、後ハ分レテ二名ツ、英人ノ家ニ寓ス、余ハ町田ト同宿シ、又生徒中ノ土佐人高見彌一ト同宿ス、在英ノ時間ニ、学校ニ至リテ教授ノ方法ヲ見、或ハ病院ニ至リテ外科ノ手術ヲ見ル、

英国下議院ノ議官ニテ、オリハントト称スル人アリ、英国ヨリ始テ日本ニ在留ヲ命セラレタル公使アールコツクノ書記官トナリテ、江戸東禅寺ニ在リ、帰国後議官タリ、其説ニ云フ、外国人日本ニ至リ貿易スレハ、必ス日本ノ財ヲ奪ヒ尽スヘシ、実ハ日本人ノ為ニ之ヲ憂フト、余今之ヲ回想スレハ、斯ノ如キ警戒ヲ吐露セシ外人ハ、其前後ニ稀ナリ、余此人ニ日本外交ノ事ヲ談シ、同氏ノ好意ヲ以テ英政府ノ外務大臣カラレントンニ説カシム、其略ニ云フ、我朝外国ト条約ヲ結ヘルハ幕府ナレ共、方今諸藩其権ヲ剝キ、之ヲ京都ナル帝室ニ復セントス、故ニ諸藩士頗ニ外交ヲ妨ケ、外人ヲ

シテ幕威ノ及ハサルコトヲ知ラシメンカ為ニ、魯人ヲ殺シ、英公使ヲ襲ヒ、其他穩当ナラサル所為アル者ハ、皆幕府ニ叛クカ為ナリ、且日本国物産ノ産スル所、多クハ藩地ニ在レトモ、各藩士ヲシテ自由ニ貿易セシメサルカ為ニ、外人広ク貿易ヲ為シ難シ、故ニ英国政府モ亦日本政權ノ王室ニ帰スルコトニ助力シテ、其条約批准ノ主ヲ王室ニ移ス時ハ、各藩ノ服従セサル幕府ト条約ヲ締結セル、今日ノ如ク異議アルコトナク、内外全美ノ処分ナリ、今日ノ如キ幕府ニ対セル条約ハ、日本真主ノ約スル所ニアラス、永ク之ヲ保続シテ、兩國ノ益トナス可ラサル者ナリ云々、オリハント云フ、其言甚タ善シ、宗則モ同行シテ外務大臣ニ面謁セハ、我之ヲ説カント、翌日外務省ニ同行シテカラレントンニ謁シ、オリハントヨリ前議ヲ述へ、更ニ議院ニ至リテ、同人ニ建言スルコト兩度ニシテ、外務大臣大ニ同意シ、當時ノ在日本英国公使パークスニ帝權復興ニ助力セヨトノ命ヲ發シタリ、此時ヨリシテ英公使ハ薩人ニ接スルコト屢ナリ、翌年パークス鹿城ニ来リ、小松帶刀・西郷隆盛ニ見へ、勤王ノ事ヲ談ス、余此時未タパークスニ、英国外務大臣ヨリ日本条約締結ノ權

ハ、王室ニ帰スルノ益ヲ勸奨セル指令ノ達セシコトヲ  
知ラサレトモ、後ニ至リ之ヲ聞ケリ(英国ニ向テ王政復  
古ヲ説クノ矯矢トス)

宗則等龍動ニ至ル少シ前ニ、毛利藩士山尾庸三・井上  
勝・遠藤謹助数名龍動ニ来レリ、伊藤博文・井上馨モ  
同行ナレトモ、毛利藩ノ不穩ヲ聞キ、去テ帰レリト云  
フ(馬関戦争ニ就テ)

六三一 道島家記抄(藩内雜事)

丑三月廿日頃

一真米尅俵 三盃入(三盃入りハ三斗入りノ邦言)

代錢拾貫三拾文

丑三月廿八日頃ハ

三盃入尅俵 拾二貫二三拾文位

金尅兩 拾三貫五百文位

右ハ、先年酉年日本国中大飢饉ニテ、尅俵八貫文位ニ  
テ、百文ニ付真米五勺ニ合位モイタシ、御領国中ハ外  
ノ国トハ違ヒ、八貫文位ニテ候得共、東海道筋杯ハ一  
日ニ何百人ノ飢死ニテ、実ニ日モ当ラレサル程ニテ候、  
夫ニテ八貫文ノ直成ニテ候、其時ハ御倉モ米穀払底ニ

テ、左モ可有之処、当分ハ米穀沢山ニ有之、家毎ニ精  
貯<sup>こ</sup>ニ候者モ段々相見得候得共、米穀ノ直成高料ニ候、  
勿論諸色高料ニ相成候由、有司之人ヲ用ヒルヤラ、又  
ハ外国回員<sup>(留學生云)</sup>初リノ故カ、何トモ弁シカタキ次第ニ候、  
(大)

三月廿三日

六三二 小松帯刀ヨリ大久保一藏へ書翰

六三二ノ一

御別袖後、愈御安康被為成御座、御下坂候半ト奉雀躍  
候、二ニ小拙無異罷在申候間、乍余事御放慮可被下候、  
然ハ兩日ハ天氣モ宜敷、万端御都合モ宜敷候半ト奉存  
候、随分御保護被成度奉存候、偕当地其後相替ル条モ  
無之、御安心可被成候、別紙只今高島右衛門ヨリ到来  
イタシ候付、未タ御滞坂モ不被計ト存、早々差上申候  
間、初ヨリ此通ニ相成事トハ存申候得共、余リ再三之  
命ニ因循之モノニ御座候、此未如何之御達シニ相成候  
哉、其辺之処モ不伺候間、明日ハ參殿尚御都合相伺候  
心得ニ御座候、其上尚尽力之致シ様モ可有之候得共、  
朝廷之御見込モ不相分候ニ付、依夫テ如何様ニ歎尽力  
致シ可申候間、左様御心得可被成候、

一於盛様御上京方ニ付、陽明家御裏表使八十田、<sup>(大)</sup>事

藤井ヨリモ御口合申上候通、上京相成候様御尽力可被成候、賀陽宮御都合御案内通之事故、モウハ御上京之御運ニハ不致事ト存申候間、上京被仰付候テ可宜ト相考申候、

一 賀陽宮モ其後御模様不相分候得共、昨日小子へ罷出候様被仰下候ニ付、参殿イタシ候得共、御出掛リニテ拜謁相調不申、何カ先日ノ末ノ事カトモ被存候、分り次第申上程之事ナラ、早々申上候様可致候、

一 細川公子御召之儀、段々承繕候処、ドウカ参府掛ニ、天氣伺ト申ス処ニテ、有馬様・尹宮ヨリ御達ト申事ニ候得共、突留候儀不相分候、明日モ宮へ参殿御直ニ相伺候心得ニ御座候、

右外何モ相替候儀無御座候、今日ケ様之天氣故、未タ御滞坂ト相考早々差上候、返ス、随分ニ御保養、御航海可被成候、折角順風奉祈候、何モ追々可申上、早々可祝、

三月廿五日申ノ刻

帯刀

一藏様

追テ、税所蔵長へモヨロシク御伝声可被下候、木場へ

モ同断御頼申上候、来客中乱筆御免可被下候、

別紙  
三三二

以手紙得貴意候、兎角鬱々敷候処、弥御安康珍重御儀ニ奉存候、然ハ過日大久保一藏様御帰国之砌、為御暇乞御参殿之節、御約束ニモ相成居候趣ニ依テ、別紙写二通両三日前閣老連名ニテ、肥後守殿へ被申達候由ニテ相廻リ候間、則チ御廻シ申上候、乍御手数御約束之事故、一藏様御中途迄御達シ被下候様、御頼可申旨被仰付候間、此段宜敷御取計御頼申上候、早々以上、

三月廿五日

高島右衛門

小松帯刀様

六三三 道島家記抄

一 筑前侯国家沸騰美濃守様ト若殿二葉立候由、此節西郷吉之助差越色々手ヲ付候得共不弁別、美濃守様へ御目見相願候得共、是以不埒明、此上ハ薩州ト御挙働奉仰候ナリト申入候得ハ、其時漸ク御目見相成、段々ト是迄ノ有様申上候処、全ク不被入聞事而已有之タル由、其訊ハ若殿ハ藤堂侯ヨリ養子ニテ、全体長州最負ノ人ニテ、夫故物事二葉立候由、当分西郷京都へ差越居候

由ニテ、又々本之通國中不為濟候由、大概承候テ記置  
ナリ、四月朔日記ス、

但

西郷殿二月末方筑前へ差越候、

六三四 和田権五郎外二名ヨリ黒田嘉右衛門へ

書翰

任好便一書拜呈仕候、先日ハ御旅宿へ参上、御妨ニ相  
成申候、其後又々博多表之様御越之由、度々御往返御  
氣丈可被成奉存候、扱日外同藩島田辨左衛門ヨリ御引  
合申候節、五卿取扱一件之儀ニ付テハ、万事当藩へ御  
打懸御頼被置候段御申聞之由、其儀ハ弊藩モ御同様之  
事ニ御座候、然処此後猶又何方ヨリノ御使者且御文通、  
他所人御応接等之儀差起り候節、当藩ヨリ御相談ニ相  
成候儀御座候ハ、如何之御思召ニ御座候哉、善悪共  
一切御打懸御存寄無御座候段、可被及御返答候哉、且  
又筋合文ハ御申入被成候儀ニ御座候哉、段々心組ニモ  
相成候事ニ御座候間、右之趣ソト奉伺候、尤弊藩へハ  
総督府ヨリ御沙汰之趣有之候間、右辺之儀差起り、当  
藩ヨリ相談ニ有之、其筋御沙汰之趣ト齟齬イタシ候筋

ニモ有之候得ハ、成敗ニ相拘り、存寄不申候テハ、第  
一

公義総督府ヲ奉輕蔑候筋合ニモ相成、第二ニハ五卿之  
御身為ニモ宜敷有之間敷、第三ニハ当藩且弊藩ニモ差  
障リ可申、彼是愚考仕、先時モ關山先生奉初肥・米兩  
藩へモ、其趣ヲ以御談合ニ及、福岡へモ引合申候義ニ  
御座候、必シモ当藩へハ、依頼之儀御同様ニ付、難題  
ヲカケ申候心得ニテハ決シテ無御座、必竟先時之件々、  
当藩之見切り共何トモ相分不申、因テ不得止引合、件  
々安心之場ニ至リ申候事ニ御座候、辨左衛門罷出候節、  
不束ニテ尊慮何落シ申候哉モ難計、乍御面働御返書被  
成下候様奉希候、以上、

四月十四日

和田権五郎

大里隼之助

横井中右衛門

黒田嘉右衛門様

尚々総督府ヨリ御沙汰之趣ハ、当藩且肥・米共ニ同  
様之由ニ御座候間、定シ尊藩へモ御同様ト奉存候得  
共、為念是又奉伺候、以上、

六三五 久光公御登城云々

御退殿后御清祥被成御座奉賀上候、然は今日稲葉閣老より御留守居呼出ニ付、付役差出候処、別紙写之通御達相成候段申出候付、達

御聴候処、御所勞之所を以御断被仰上、可然旨

御沙汰承知仕候間、新納嘉藤二江相達、明朝以書付、御名内にて御断被仰上筈ニ御座候、就ては越前様・宇和嶋様ニも御同様之由ニ御座候、明日陽明殿御出御延引相達、御両所様江は御留守居剪紙を以、御所勞且無御抛訳にて、御断之御掛合執計候様達置申候、将又宇和嶋様御内より別紙之通御名宛にて掛合有之、差掛候事故、致開封達

御聴、成行貴所様御名前之返答仕出置申候、為御心得此段得貴意候、以上、

四月晦日

大久保一蔵殿

蓑田傳兵衛

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕